

**松野遺跡第11～23・25・26・29～31次
水笠遺跡第2・3・5～15・17～21次**

発掘調査報告書

新長田駅北地区震災復興土地区画整理事業地内の個人住宅等の新築に伴う発掘調査

**平成14年10月31日
神戸市教育委員会**

序

あの忌まわしい大地震が発生した平成7年1月17日午前5時46分から7年余の歳月が過ぎました。地震発生後に大規模な火災が発生した長田の街の被害は甚大で、一帯では災害に強いまちづくりを目指し、震災復興土地区画整理事業が行われております。事業はまだ完了してはおりませんがかなりの進捗を見、換地が終わった部分からは次々に新しい住宅が建てられていき、新しい長田の街並みが徐々に形作られていくております。

確かに被災された市民の方々の悲しみや心の傷痕は容易に癒されるものではありません。しかし街の風景が復興していくにつれ、人々の心の復興も少しずつではあっても進んで行くことでしょうし、またそれを切に望みます。

今回刊行する運びとなった本書はまさに土地区画整理事業の進捗後に新築される個人住宅の、工事着工前の発掘調査の報告書です。被災された方々が少しでも早く新しい生活が始められる様、着工予定に出来るだけ影響が出ない様に迅速な調査が求められました。遺跡全体で見れば面積的に小規模な調査成果を集積したものであり、本遺跡を総体的に理解することは難しいかもしれません、これも震災復興に係わる発掘調査の一つの姿であると思われます。

筆末になりましたが、発掘調査・報告書刊行に際して御協力頂いた関係諸機関・関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成14年10月31日

神戸市教育委員会

教育長 西川和機

例　　言

1. 本書は平成11～13年度に、現行住居表示では兵庫県神戸市長田区松野通4丁目で発掘調査を実施した松野遺跡第11～23・25・26・29～31次調査と、同区水笠通3丁目で発掘調査を実施した水笠遺跡第2・3・5～15・17～21次調査の報告書である。
2. 発掘調査は震災復興地区画整理事業新長田駅北地区内の個人住宅の新築に伴うもので、平成11年度は神戸市教育委員会、平成12・13年度は神戸市体育協会が、文化庁の補助金を得て実施したものである。調査組織や調査担当者の詳細は本文を参照されたい。
3. 現地調査での遺構等の写真は各調査担当者が撮影し、遺物の写真は西大寺フォト　杉本和樹氏が撮影した。
4. 使用した各種の地形図は清水靖夫編・柏書房刊『明治前期・昭和前期神戸都市地図』に収録されているの1:25,000假製地形図、国土交通省国土地理院発行の1:25,000地形図「神戸首部」「神戸南部」、神戸市発行の1:10,000地形図「市街地西部」、1:2,500地形図「禪昌寺」「長田」「東須磨」「大橋」である。
5. 使用した方位・座標は、国土調査法（昭和26年6月1日法律第180号）の施行令（昭和27年3月31日政令第59号）第二条及び別表第一によって定められた、平面直角座標系中国東Vである。また標高は東京湾中等潮位である。
6. 現地調査の際には神戸市都市計画局区画整理部西部都市整理課の協力を得た。
7. 本書第III・IV章の遺構・遺物の実測・浄書、成果の執筆は各調査担当者が行った。また遺構番号・遺物番号は各調査毎に符号した。よって他の個人住宅の調査区や、今回は報告対象になっていない区画街路部分の調査区とを比較検討した場合、同一遺構の延長部分が異なる遺構番号となっているものも含まれる。
8. 本書第V章第1節の執筆は関野　豊と須藤　宏、その他の部分の執筆と編集は関野　豊が行った。

本文目次

序
例言
目次

第Ⅰ章	はじめに	1	16.	第29次調査	44
第1節	調査に至る経緯と経過	1	17.	第30次調査	45
第2節	調査組織	5	18.	第31次調査	45
第3節	発掘調査一覧	7	第Ⅳ章	水笠遺跡の調査	51
第Ⅱ章	遺跡の歴史的環境と立地	11	第1節	調査の概要	51
第1節	周辺の遺跡と歴史的環境	11	第2節	基本層序	51
第2節	周辺の地理的環境と遺跡の立地	15	第3節	各調査成果	53
第Ⅲ章	松野遺跡の調査	21	1.	第2次調査	53
第1節	調査の概要	21	2.	第3次調査	55
第2節	基本層序	21	3.	第5次調査	56
第3節	各調査成果	23	4.	第6～10次調査	57
1.	第11次調査	23	5.	第11次調査	61
2.	第12次調査	25	6.	第12次調査	61
3.	第13次調査	25	7.	第13次調査	62
4.	第14次調査	26	8.	第14次調査	62
5.	第15次調査	27	9.	第15次調査	65
6.	第16次調査	29	10.	第17次調査	68
7.	第17次調査	30	11.	第18次調査	69
8.	第18次調査	30	12.	第19次調査	70
9.	第19次調査	30	13.	第20次調査	72
10.	第20次調査	37	14.	第21次調査	72
11.	第21次調査	38	第Ⅴ章	まとめ	73
12.	第22次調査	40	第1節	松野遺跡の遺構分布	73
13.	第23次調査	40	第2節	水笠遺跡の遺構分布	77
14.	第25次調査	41	第3節	結語	78
15.	第26次調査	42		報告書抄録	裏表紙裏

挿図目次

第1図	松野・水笠両遺跡位置図	2	第5図	水笠通3丁目区画整理前後対応図	8
第2図	土地区画整理事業範囲図	3	第6図	周辺主要遺跡分布図	14
第3図	松野通4丁目・水笠通3丁目位置図	4	第7図	地形分類図	17
第4図	松野通4丁目区画整理前後対応図	7	第8図	長田区周辺の旧地形図	18

第9図	長田区平野部微地形復元図	19・20	第39図	第31次掘立柱列断面図	48
第10図	調査地点位置図	22	第40図	第31次掘立柱建物平面図・断面図	49
第11図	第11次平面図・土層図	23	第41図	第31次溝平面図・断面図	49
第12図	第11次溝出土遺物実測図	23	第42図	第31次出土遺物実測図	50
第13図	街路予定地調査地点位置図	24	第43図	調査地点位置図	52
第14図	第12次平面図・土層図	25	第44図	街路予定地調査地点位置図	53
第15図	第13次平面図・土層図	26	第45図	第2次平面図・土層図・遺構断面図	54
第16図	第14次平面図	27	第46図	第2次出土石包丁実測図	54
第17図	第15・16次平面図・土層図	28	第47図	第3次平面図・土層図・ピット断面図	55
第18図	第17次平面図・土層図	29	第48図	第5次平面図・土層図	56
第19図	第18次平面図・土層図・溝断面図	31	第49図	第6～10次平面図・遺構断面図	58
第20図	第19・20次平面図	32	第50図	第6～9次土層図	59
第21図	第19次掘立柱建物復元図	33	第51図	第11次平面図・土層図	60
第22図	第19次井戸断面図	34	第52図	第12次平面図・土層図	61
第23図	第19次土坑断面図	34	第53図	第13・14次平面図	63
第24図	第19次土坑上層出土遺物実測図	35	第54図	第14次土層図	64
第25図	第19次土坑下層出土遺物実測図	36	第55図	第14次遺構断面図・出土遺物実測図	64
第26図	第19次掘立柱建物柱穴出土遺物実測図	36	第56図	第15次平面図・遺構断面図	65
第27図	第20次土層図	37	第57図	第15次土層図	66
第28図	第21次平面図・土層図	38	第58図	第15次出土遺物実測図	67
第29図	第22次平面図・土層図	39	第59図	第17次平面図・土層図	68
第30図	第23次平面図・土層図	40	第60図	第18次平面図・土層図	69
第31図	第25次平面図	41	第61図	第16次出土遺物実測図	70
第32図	第25次土層図	42	第62図	第19次平面図	70
第33図	第26次平面図・土層図・遺構断面図	43	第63図	第19次土層図・溝断面図	70
第34図	第26次溝出土遺物実測図	43	第64図	第20次平面図・土層図	71
第35図	第29次平面図・土層図	44	第65図	第21次平面図	72
第36図	第30次平面図・土層図	46	第66図	松野遺跡平面図	75
第37図	第31次平面図・土層図	47	第67図	松野遺跡弥生前期確認調査区位置図	76
第38図	第31次ピット断面図	48	第68図	水笠遺跡平面図	77

表 目 次

第1表 松野遺跡発掘調査一覧表 9 第2表 水笠遺跡発掘調査一覧表 10

写 真 図 版 目 次

- | | | | |
|------|---|------|---|
| 図版 1 | 1. 両遺跡周辺遠景
2. 両遺跡遠景 | 図版19 | 1. 松野22次調査区全景
2. 松野22次南東壁北東半土層 |
| 図版 2 | 1. 松野1・2次調査と街区遠景
2. 水笠遺跡遠景 | 図版20 | 1. 松野23次調査区全景
2. 松野23次北東壁中央土層 |
| 図版 3 | 1. 松野通4丁目北半街区遠景
2. 松野通4丁目北半街区遠景 | 図版21 | 1. 松野25次調査区全景
2. 松野25次ピット・南東壁土層 |
| 図版 4 | 1. 松野11次調査区全景
2. 松野11次調査区と1~3次調査地点 | 図版22 | 1. 松野26次調査区全景
2. 松野26次SD01断面 |
| 図版 5 | 1. 松野11次SD01・02
2. 松野11次南東壁沿断割土層 | 図版23 | 1. 松野26次SD02断面
2. 松野26次SK01 |
| 図版 6 | 1. 松野12次調査区全景
2. 松野12次南東壁中央土層 | 図版24 | 1. 松野26次SK01断面
2. 松野26次南西壁南東半土層 |
| 図版 7 | 1. 松野13次調査区全景
2. 松野13次溝状遺構 | 図版25 | 1. 松野29次調査区全景
2. 松野29次SK01 |
| 図版 8 | 1. 松野14次調査区全景
2. 松野15次調査区全景 | 図版26 | 1. 松野30次調査区第1遺構面全景
2. 松野30次調査区第2遺構面全景
3. 松野30次北西壁土層 |
| 図版 9 | 1. 松野15次SD01・北東壁土層
2. 松野16次調査区全景 | 図版27 | 1. 松野31次調査区全景
2. 松野31次調査区全景 |
| 図版10 | 1. 松野17次調査区全景
2. 松野17次ピット・北西壁土層 | 図版28 | 1. 水笠通3丁目街区遠景
2. 水笠通3丁目街区遠景 |
| 図版11 | 1. 松野18次調査区全景
2. 松野18次SD01断面 | 図版29 | 1. 水笠2次調査区全景
2. 水笠2次SD01断面 |
| 図版12 | 1. 松野19次調査区全景
2. 松野19次調査区全景 | 図版30 | 1. 水笠2次SD02断面
2. 水笠2次南西壁土層 |
| 図版13 | 1. 松野19次SB01・SK01炭分布
2. 松野19次SB01・SK01完掘 | 図版31 | 1. 水笠3次調査区全景
2. 水笠3次南西壁土層 |
| 図版14 | 1. 松野19次SB01柱穴断面
2. 松野19次SB01柱穴断面 | 図版32 | 1. 水笠5次調査区全景
2. 水笠5次SD01断面 |
| 図版15 | 1. 松野19次SE01
2. 松野19次SK02断面 | 図版33 | 1. 水笠6~10次調査区全景
2. 水笠6~10次調査区全景 |
| 図版16 | 1. 松野20次調査区全景
2. 松野20次北西壁南西端土層 | 図版34 | 1. 水笠6~10次調査区全景
2. 水笠6~10次調査区全景 |
| 図版17 | 1. 松野21次調査区全景
2. 松野21次SK01・02断面 | 図版35 | 1. 水笠6~10次SD01
2. 水笠6~10次SD01
3. 水笠6~10次SD01・03 |
| 図版18 | 1. 松野21次弥生土器出土状況
2. 松野21次北東壁中央土層 | | |

- 図版36 1. 水笠 6 ~10次 S D02
2. 水笠 9次 S K01断面
- 図版37 1. 水笠 7次 S X01断面
2. 水笠 10次 S X01断面
- 図版38 1. 水笠 6 • 7次北東壁土層
2. 水笠 8 • 9次北東壁土層
- 図版39 1. 水笠 11次調査区全景
2. 水笠 11次 S D01
- 図版40 1. 水笠 12次調査区全景
2. 水笠 12次南西壁土層
- 図版41 1. 水笠 13次調査区全景
2. 水笠 13次調査区全景
- 図版42 1. 水笠 14次調査区全景
2. 水笠 14次 S D01
3. 水笠 14次 S D01
- 図版43 1. 水笠 14次 S D01断面
2. 水笠 14次 S E01
- 図版44 1. 水笠 14次 S P03
2. 水笠 14次北西壁土層
- 図版45 1. 水笠 15次調査区全景
2. 水笠 15次調査区全景
- 図版46 1. 水笠 15次調査区全景
2. 水笠 15次 S D01 • 02
- 図版47 1. 水笠 15次 S D01
2. 水笠 15次 S D02
3. 水笠 15次 S K01
- 図版48 1. 水笠 15次 S K02
2. 水笠 15次南西壁土層
- 図版49 1. 水笠 17次調査区第 1 遺構面全景
2. 水笠 17次調査区第 2 遺構面全景
- 図版50 1. 水笠 18次調査区全景
2. 水笠 18次柱列
- 図版51 1. 水笠 19次調査区全景
2. 水笠 19次調査区北半
- 図版52 1. 水笠 19次 S D01
2. 水笠 20次調査区全景
- 図版53 1. 水笠 21次調査区全景
2. 水笠 21次 S D01
- 図版54 1. 松野 11次 S D03出土遺物
2. 松野 19次 S K01上層出土遺物
- 図版55 1. 松野 19次 S K01上層出土遺物
- 図版56 1. 松野 19次 S K01上層出土遺物
- 図版57 1. 松野 19次 S K01上層出土遺物
2. 松野 19次 S K01下層出土遺物
3. 松野 19次 S K01下層出土遺物
4. 松野 19次 S B01柱穴出土遺物
5. 松野 26次 S D01出土遺物
- 図版58 1. 水笠 2次 S D02出土遺物
2. 水笠 14次 S P03出土遺物
3. 水笠 15次旧耕作土出土遺物

第Ⅰ章 はじめに

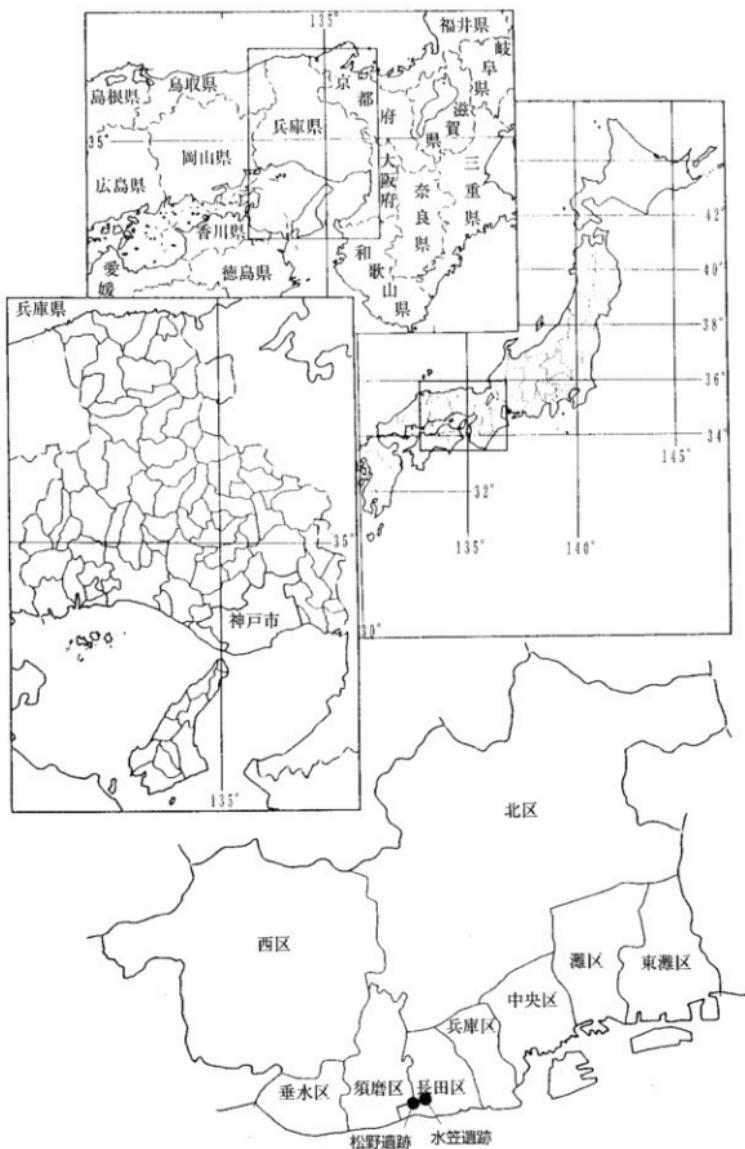
第1節 調査に至る経緯と経過

松野・水笠両遺跡は六甲山系西端の南側に広がる冲積地上に立地する遺跡である。松野遺跡は昭和56年8月6日に神戸市長田区松野通4丁目南半の市営松野住宅建設事業に先立つ試掘調査で発見され、直後の第1・2次調査で周囲を掘立柱塗と溝で区画された古墳時代後期前半の豪族居館が確認されている。その後暫く発掘調査は実施されなかったが、平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災で長田区一帯が甚大な被害を受けた後、松野遺跡の範囲ではJR神戸線の南側では震災復興市街地再開発事業で、北側では震災復興土地区画整理事業と区画整理後の個人住宅等の建設によって調査事例が増加し、平成14年3月末の時点で第31次を数えるものとなった。これまでの調査によって古墳時代後期の豪族居館およびそれと同時期の集落が確認された他、弥生時代前期、弥生時代後期、平安時代後半から鎌倉時代前半の遺構が検出され、大規模複合遺跡であったことが明らかになっている。しかし豪族居館より北にあたる松野通4丁目北半の当該地域では一転して同時期の様相は明らかでなく、弥生時代や中世の遺構が確認されるなどJR神戸線以南の松野遺跡南半とは異なる様相が次第に明らかになってきている。しかし一帯は遺跡の埋没深度が浅い上、近代以降急速に市街地化したため攢乱が多く、遺構面の遺存状況が概して悪い。

水笠遺跡は平成11年7月下旬から8月上旬に区画整理対象地内で遺跡の拡がりを確認する試掘調査の結果長田区水笠通2・3丁目で確認され、地名をとて命名された新しい遺跡である。その後震災復興土地区画整理事業と区画整理後の個人住宅等の建設によって調査事例が増加し、平成14年3月末の時点で第21次を数えるものとなった。これまでの調査によって主に弥生時代の溝が検出されているが、堅穴住居や掘立柱建物は検出されず、また遺物量も極めて少ないため遺跡の実態はまだよく判ってはいない状態である。しかし一帯は松野遺跡以上に遺跡の埋没深度が浅く、遺構面の遺存状況はかなり悪い。

新長田駅北側の一帯は神戸国際港都建設事業新長田駅北地区震災復興土地区画整理事業が進められている地域である。前述した平成11年7月下旬から8月上旬の区画整理対象地内での試掘調査が実施され、松野通1・4丁目、水笠通2・3丁目、神楽町3・6・7丁目の街区では遺跡の拡がりが確認された。それらの内、松野通4丁目と水笠通3丁目では平成11年度8月上旬以降、区画整理の街路予定地内で、現況の道路部分を除く範囲に関して発掘調査が実施されていった。街路予定地の発掘調査終了後に街路の築造が順次進められていったが、それと並行して宅地部分の換地が進行していく。街路部分で発掘調査を実施していくためにほぼ街区の全体で遺物包含層までの深さが判明していたため、換地終了後の個人住宅の新築計画が出された際にも工事が埋蔵文化財に影響を与えるかどうかがほぼ明らかとなる状況にあった。従って工事が埋蔵文化財に影響を与える場合に限り、発掘調査を実施する運びとなった。

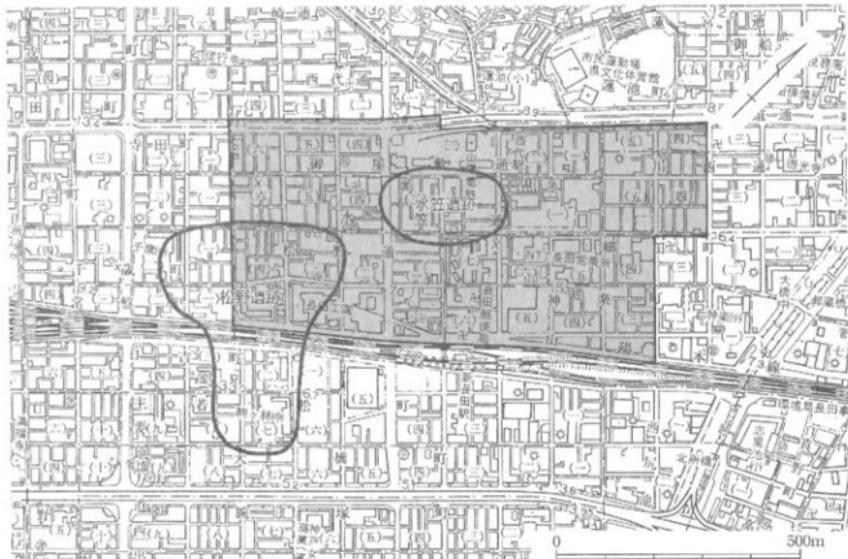
各々の発掘調査の詳細は第3節を参照されたいが、松野遺跡では平成11年度は8月中旬



第1図 松野・水笠両遺跡位置図

から下旬に1軒分（第11次）が実施された後、11月中旬から下旬に1軒分（第12次）、11月下旬から12月上旬に1軒分（第13次）、平成12年1月中旬に1軒分（第14次）、2月中旬から下旬に隣接した2軒分が同時に（第15・16次）が順次実施された。平成12年度は9月上旬に1軒分（第17次）が実施された後、10月上旬に1軒分（第18次）、10月下旬から11月中旬に隣接した2軒分が同時に（第19・20次）、11月上旬から中旬に1軒分（第21次）、11月中旬から下旬に1軒分（第22次）、12月中旬から下旬に1軒分（第23次）、平成13年2月下旬に1軒分（第25次）、3月中旬から下旬に1軒分（第26次）が順次実施された。平成13年度は6月下旬から7月上旬に1軒分（第29次）が実施された後、8月下旬に1軒分（第30次）、12月に1軒分（第31次）が実施された。尚第10・旧15・28次調査はそれぞれ平成11～13年度の松野通4丁目での区画整理街路予定地の調査である。

水笠遺跡では平成11年度は11月下旬から12月上旬に1軒分（第2次）が実施された後、平成12年1月中旬に1軒分（第3次）が実施された。平成12年度は7月中旬から8月上旬に5軒分（第6～10次）が実施された後、8月上旬に1軒分（第11次）、9月上旬から中旬に1軒分（第12次）、9月下旬に隣接した2軒分が同時に（第13・14次）、平成13年2月中旬から3月上旬にテナントビルの約半分（第15次）が順次実施された。平成13年度は7月下旬に1軒分（第17次）が実施された後、8月上旬に1軒分（第18次）、11月上旬に共同住宅1棟分（第19次）、11月上旬から中旬に1軒分（第20次）、11月中旬から下旬に共同住宅1棟分（第21次）が実施された。尚第1・4・16次調査はそれぞれ平成11～13年度の水笠通3丁目での区画整理街路予定地での調査である。



第2図 新長田駅北地区土地区画整理事業範囲図



第3図 松野通4丁目・水笠通3丁目位置図 (S = 1 : 2,500)

第2節 調査組織

発掘調査は神戸市文化財保護審議会の指導の下、以下の組織で実施された。

- 平成11年度
- 神戸市文化財保護審議会委員 史跡・考古担当
 - 檀上 重光（前神戸女子短期大学教授）
 - 工楽 善通（ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長）
 - 和田 晴吾（立命館大学文学部教授）
 - 神戸市教育委員会事務局
 - 教 育 長 鞍本 昌男
 - 社会教育部長 水田 裕次
 - 文化財課長 大勝 俊一
 - 埋蔵文化財係長 渡辺 伸行
 - 文化財課主査 丹治 康明・丸山 潔・菅原 宏明
 - 事務担当学芸員 東 喜代秀・井尻 格・藤井 太郎
 - 調査担当学芸員 口野 博史・谷 正俊・山本 雅和・富山 直人・阿部 敬生
・中谷 正
 - 遺物整理担当学芸員 平田 朋子
 - 保存科学担当学芸員 千種 浩・中村 大介
- 平成12年度
- 神戸市文化財保護審議会委員 史跡・考古担当
 - 檀上 重光（前神戸女子短期大学教授）
 - 工楽 善通（ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長）
 - 和田 晴吾（立命館大学文学部教授）
 - 神戸市教育委員会事務局
 - 教 育 長 木村 良一
 - 社会教育部長 水田 裕次
 - 文化財課長 大勝 俊一
 - 社会教育部主幹 渡辺 伸行（埋蔵文化財指導係長事務取扱）
 - 事務担当学芸員 西岡 誠司・東 喜代秀・橋詰 清孝
 - 埋蔵文化財調査係長 丹治 康明
 - 文化財課主査 宮本 郁雄・丸山 潔（兼務）・菅原 宏明（兼務）
 - 事務担当学芸員 山口 英正
 - 遺物整理担当学芸員 谷 正俊
 - 保存科学担当学芸員 千種 浩・中村 大介
 - 神戸市体育協会
 - 会 長 笹山 幸俊
 - 副 会 長 鞍本 昌男（専務理事事務取扱）・山田 隆・家治川 豊
・木村 良一

相 談 役 加茂川 守
常 務 理 事 静観 圭一
参 事 財田 美信
総 務 課 長 前田 豊晴
総 務 係 長 松田 保
総 務 課 主 査 丸山 潔・菅本 宏明
事 務 担 当 学芸員 斎木 嶽
調査担当学芸員 西岡 巧次・口野 博史・阿部 敬生・浅谷 誠吾・関野 豊
・阿部 功

平成13年度 神戸市文化財保護審議会委員 史跡・考古担当

榎上 重光（前神戸女子短期大学教授）
工楽 善通（ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長）
和田 晴吾（立命館大学文学部教授）

神戸市教育委員会事務局

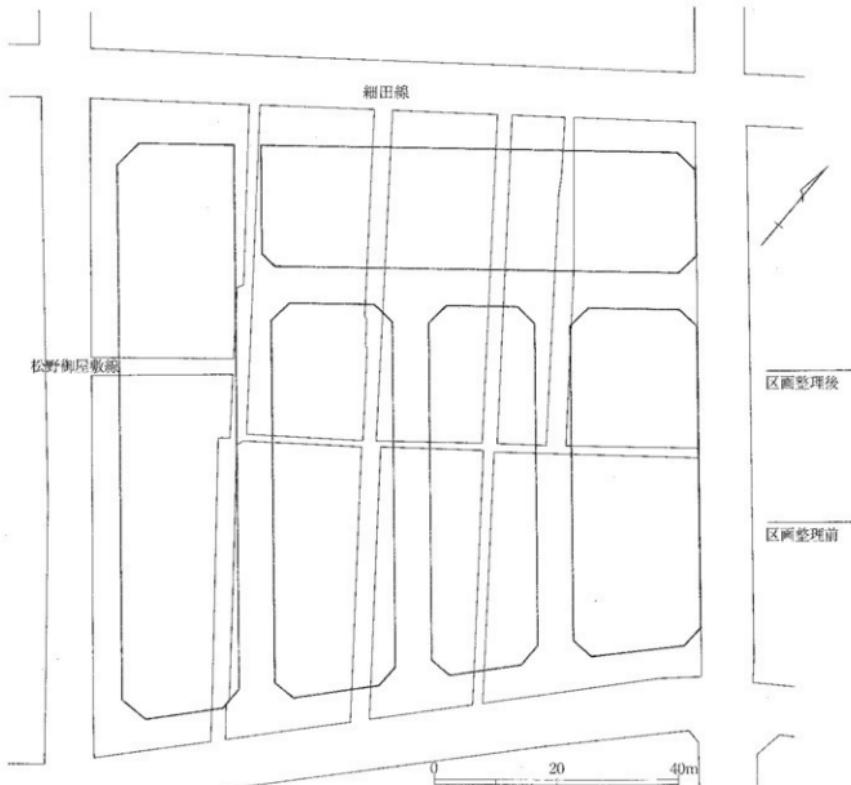
教 育 長 木村 良一
社会教育部長 岩畔 法夫
文化財課長 桑原 泰豊
社会教育部主幹 渡辺 伸行（埋蔵文化財指導係長事務取扱）
事務担当学芸員 口野 博史・西岡 誠司・橋詰 清孝
埋蔵文化財調査係長 丹治 康明
文化財課主査 宮本 郁雄（～12月31日）・丸山 潔（兼務）・菅本 宏明
（兼務）・千種 浩
事務担当学芸員 斎木 嶽
遺物整理担当学芸員 黒田 恭正
保存科学担当学芸員 中村 大介

鳴神戸市体育協会

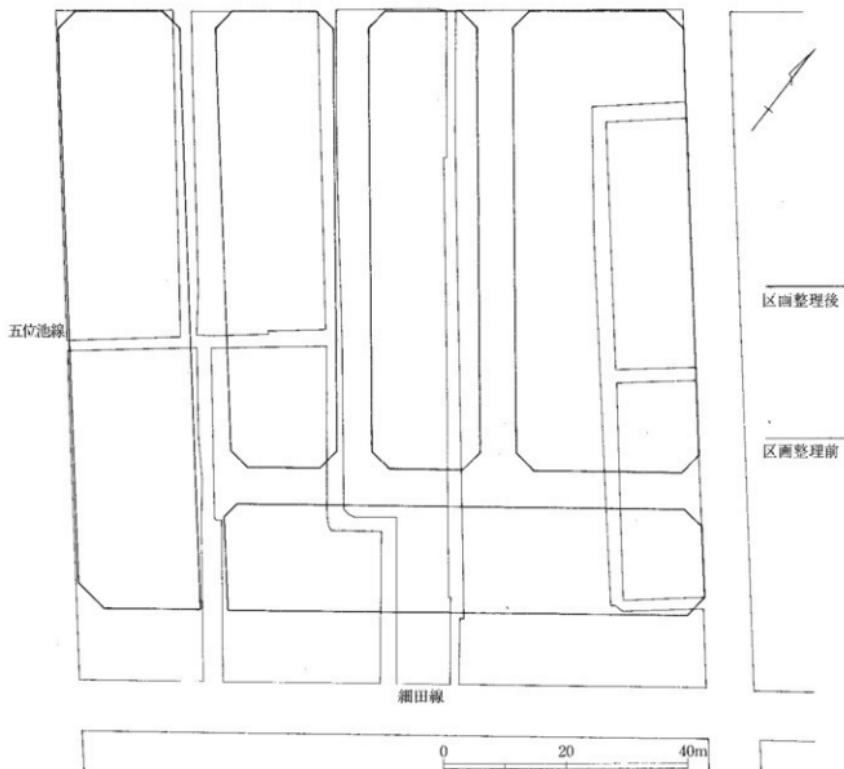
会 長 笹山 幸俊（～11月19日）
副 会 長 鞍本 昌男（専務理事事務取扱・11月20日～会長職務代行）・
山田 隆・家治川 豊・木村 良一
相 談 役 加茂川 守
常 務 理 事 梶井 昭武
参 事 財田 美信
総 務 課 長 前田 豊晴
総 務 係 長 松田 保
総 務 課 主 査 丸山 潔・菅本 宏明
事 務 担 当 学芸員 川上 厚
調査担当学芸員 須藤 宏・山口 英正・池田 毅・井尻 格

第3節 発掘調査一覧

松野遺跡では松野通4丁目で平成11年度に6件、平成12年度に9件、平成13年度に3件の合計18件、水笠遺跡では水笠通3丁目で平成11年度に2件、平成12年度に11件、平成13年度に5件の合計18件の調査が実施されたが、それぞれの調査次数・調査期間・調査担当者・調査面積・住所は第1・2表の通りである。住所は神戸市教育委員会文化財課に届出られた発掘調査依頼書に記載されていたものを記載したが、土地区画整理事業自体がまだ完了していないため旧住居表示のものや仮換地表示のものが混在し、統一できる状態ではない。よって住所では調査地点の位置が特定し難いため、詳細な位置は第10・37両図を参照されたい。なお現在までに神戸市内で実施された発掘調査のデータは、文化財保護法施行以降に限定しても数10年分の履歴が存在する。しかしこれらの中には主として調査次数の把握に錯誤しているものが存在しており、検索・照合に齟齬を来すことがままあった。



第4図 松野通4丁目北半区画整理前後対応図



第5図 水笠通3丁目区画整理前後対応図

したがって神戸市教育委員会文化財課では平成12年度を区切りとして過去に市内で実施された全ての発掘調査を再確認し、調査次数を改訂してデータ化する作業を進行中である。しかしここれまでに整理・収納が完了している調査記録や出土遺物への記載をすべて書き換えることは現実的には膨大な時間と労力が要求されるため、次表右端に読み替える新調査次数を紹介するに留めたい。したがって今後調査成果等について引用・問い合わせ等をされる場合、当面の間は次表左の現行調査次数を用いられたい。

松野遺跡

平成11年度

次 数	現地調査期間	調査担当者	調査面積	届出住所(松野通4丁目内)	新次数
第11次	8月17日～8月23日	山本雅和	約56m ²	17(32-1街区5号地1)	第9次
第12次	11月19日～11月24日	阿部敬生・中谷 正	約33m ²	31-4街区2・3符号	第10次
第13次	11月29日～12月3日	口野博史	約18m ²	7-2・26、8-4・10～12	第11次
第14次	1月13日～1月19日	富山直人	約48m ²	1-1・5	第12次
第15次	2月15日～2月22日	富山直人	約50m ²	7-9・11・12・22～24	第14次
第16次	2月15日～2月22日	富山直人	約100m ²	7-13・14・21・22・28	第13次
合 計	8月17日～2月22日	—	約305m ²	—	—

平成12年度

次 数	現地調査期間	調査担当者	調査面積	届出住所(松野通4丁目内)	新次数
第17次	9月4日～9月7日	阿部敬生	約22m ²	3-1・6-13～15	第16次
第18次	10月4日～10月6日	関野 豊	約40m ²	31(31-5街区1符号)	第17次
第19次	10月19日～11月13日	関野 豊	約80m ²	1-1(31-1街区4-4符号)	第18次
第20次	10月19日～11月13日	関野 豊	約50m ²	1-1	第19次
第21次	11月7日～11月13日	阿部 功	約44m ²	4・5・9・10	第20次
第22次	11月14日～11月24日	関野 豊	約45m ²	6-7・8・13・14	第21次
第24次	12月18日～12月25日	阿部 功	約56m ²	31-2-1	第22次
第25次	2月21日～3月1日	口野博史・浅谷誠吾	約60m ²	5-13・15、8-3	第24次
第26次	3月15日～3月27日	関野 豊	約60m ²	3-1・2・4	第25次
合 計	9月4日～3月27日	—	約457m ²	—	—

平成13年度

次 数	現地調査期間	調査担当者	調査面積	届出住所(松野通4丁目内)	新次数
第29次	6月22日～7月2日	井尻 格	約58m ²	31-4街区15号	第29次
第30次	8月20日～8月29日	井尻 格	約50m ²	6-8～10(31-2街区2符号)	第30次
第31次	12月3日～12月28日	須藤 宏	約30m ²	31-3街区1号地	第31次
合 計	6月22日～12月28日	—	約138m ²	—	—

第1表 松野遺跡発掘調査一覧表

水笠遺跡

平成11年度

次 数	現地調査期間	調査担当者	調査面積	届出住所(水笠通3丁目内)	新次数
第2次	11月26日～12月2日	谷 正俊	約 53m ²	13-4街区1符号	第2次
第3次	1月17日～1月19日	谷 正俊	約 50m ²	5-1	第3次
合 計	11月26日～1月19日	--	約103m ²	--	--

平成12年度

次 数	現地調査期間	調査担当者	調査面積	届出住所(水笠通3丁目内)	新次数
第5次	6月20日～7月3日	西岡巧次	約 46m ²	7-1	第5次
第6次	7月13日～8月1日	関野 豊	約 40m ²	6-3・4・8	第6次
第7次	7月13日～8月1日	関野 豊	約 45m ²	4-13	第7次
第8次	7月17日～8月4日	関野 豊	約 45m ²	6-5・6・9・14	第8次
第9次	7月17日～8月4日	関野 豊	約 45m ²	6-1・6・14・15	第9次
第10次	7月17日～8月4日	関野 豊	約 65m ²	6-9	第10次
第11次	8月7日～8月11日	関野 豊	約 25m ²	9(13-3街区2-(2)符号)	第11次
第12次	9月8日～9月19日	阿部敬生	約 35m ²	13-4街区8	第12次
第13次	9月21日～9月26日	関野 豊	約 20m ²	9	第13次
第14次	9月21日～9月29日	関野 豊	約 30m ²	7-1、9	第14次
第15次	2月14日～3月9日	関野 豊	約220m ²	11-1・3～10	第15次
合 計	6月20日～3月9日	--	約616m ²	--	--

平成13年度

次 数	現地調査期間	調査担当者	調査面積	届出住所(水笠通3丁目内)	新次数
第17次	7月23日～8月1日	池田 究	約 50m ²	13-1-16	第17次
第18次	8月2日～8月9日	池田 究	約 52m ²	4-4-6	第18次
第19次	10月30日～11月8日	山口英正	約160m ²	7-2・3、8-3・4	第19次
第20次	11月8日～11月12日	山口英正	約 35m ²	13-4-11	第20次
第21次	11月15日～11月22日	山口英正	約100m ²	13	第21次
合 計	7月23日～11月22日	--	約397m ²	--	--

第2表 水笠遺跡発掘調査一覧表

第Ⅱ章 遺跡の歴史的環境と立地

第1節 周辺の遺跡と歴史的環境

- 縄文時代以前** 六甲山系南麓平野の西端付近一帯では旧石器時代や縄文時代の遺跡は少なく、散在的に資料が得られるのみである。会下山遺跡(1)でナイフ型石器が、名倉遺跡(2)で縄文時代中期の土器が採集されている他、楠荒田町遺跡(3)で縄文時代中期の土器が出土している。
- 縄文時代晚期** 縄文時代晚期後半以降は遺跡数が一転して増加し、しかもこれらの多くは次の弥生時代前期にも継続する遺跡である。当該時期の主要遺跡は戎町遺跡(4)・五番町遺跡(5)・三番町遺跡(6)・上沢遺跡(7)・大開遺跡(8)・楠荒田町遺跡(9)等である。これらの遺跡では縄文晚期後半の突堤文土器と弥生前期の所謂遠賀川式土器を共伴するが、現在縄文晚期にまで確実に遡る水田址は確認されてはいない。縄文晚期後半には既に水田耕作を開始していたかどうかは今後の調査次第であるが、縄文晚期から弥生前期にかけての大きな社会構造の変化を理解する上で極めて重要である。
- 弥生時代の集落** 大開遺跡は弥生前期の環濠集落で、北東至近地でも別の弥生前期の集落の環濠と考えられるものが検出されている。戎町遺跡は弥生前期の水田と木製品貯蔵用施設の可能性がある円形杭列構造が検出されている。また松野遺跡(10)からも遺跡確認の契機となった試掘調査で木葉文を持つ土器が出土している。弥生時代中期は一帯では前期から継続する戎町遺跡・楠荒田町遺跡等を除くと遺跡の存在は顕著でないが、弥生時代後期では中期と比較して遺跡数が若干増加する。当該時期の主要遺跡は長田神社境内遺跡(11)・長田南遺跡(12)・上沢遺跡(13)・祇園遺跡(14)等である。
- 古墳** 前期古墳では西から順に得能山古墳(15)・会下山二本松古墳(16)・夢野丸山古墳(17)が存在する。これらは相前後した時期に築造されたと考えられ、いずれも竪穴式石槨が構築されている。しかし三角縁神獸鏡が副葬されておらず、在地的な性格が強い古墳と推定されている。得能山古墳は六甲山系前面の標高約50mの小尾根上に立地する。工事中の発見であり詳細は不明であるが、竪穴式石槨から画文帶神獸鏡・内行花文鏡・鉄刀等が出土した。会下山二本松古墳は標高約50mの丘陵頂部に立地する全長約55mの前方後円墳である。竪穴式石槨から銅鏡・鉄鏃・鉄劍・鉄刀・滑石製琴柱形石製品等が出土した。夢野丸山古墳は六甲山系前面の標高約110mの尾根先端に立地する直径約20mの円墳である。竪穴式石槨から重列式神獸鏡・銅鏡・鉄鏃・鉄劍・鉄刀・鉄製農工具等が出土した。中期古墳では海岸沿いの砂堆上にかつて念仏山古墳(18)が存在した。鎧付円筒埴輪が出土しており、明治時代の地形図から全長約200mの大型前方後円墳と推定されている。後期古墳は丘陵上や茹藻川河口部等に存在が知られているが、早くに消滅して現状ではその実態を知る手掛かりは少ない。また名称のみを残す古墳や遺物の出土のみが伝えられる古墳(19)も多い。
- 古墳時代の窯址** 高取山東側中腹に立地する林山古窯址(20)は採集された須恵器から6世紀後半に操業していた。現在確認されている中では六甲山系南麓で唯一の須恵器窯址である。
- 古墳時代の集落** 古墳時代では前期に鷹取町遺跡(21)・若松町遺跡(22)・兵庫松本遺跡(23)等が営まれ始め、

中期には神楽遺跡(24)・三番町遺跡(25)・上沢遺跡(26)等が営まれる。集落は竪穴住居と掘立柱建物で構成されているが上沢遺跡では大壁建造物が検出されている。神楽遺跡からは韓式系土器・算盤玉形滑石製鉢鉋車、三番町遺跡からは大溝から小型青銅鏡、上沢遺跡からは韓式系土器・大量の滑石製玉製品が出土している。後期には松野遺跡(27)・湊川遺跡(28)・楠荒田町遺跡(29)等が営まれる。松野遺跡では豪族居館と考えられる遺構群が検出されている。これらの集落の状況を見るに、ほぼ同時期に併存した集落もあれば、ある時期途絶えていたような集落もある。また外来的な遺物が出土した集落もあれば、出土しない集落もある。これらの集落が離散集合を繰り返しつつ、河川の水系といった一定の地域毎に一つの政治的な纏まりを形成していったと思われる。

飛鳥時代

一帯では飛鳥時代の遺跡は少なく、発掘調査で断片的に資料が出土する程度である。そのような中、御藏遺跡(30)の確認例は注視される。

奈良・平安時代

奈良時代になると畿内から九州にまで続く山陽道が東西方向に貫いて築造された。一帯の交通事情がより充実し、これ以降都である平城京や平安京との繋がりが強くなっている。この時期には長田野庄遺跡(31)・大田町遺跡(32)・神楽遺跡(33)・御藏遺跡(34)・上沢遺跡(35)・室内遺跡(36)等がある。大田町遺跡は山陽道に設置されていた「須磨驛」の可能性が考えられ、室内遺跡では六甲山系南麓平野西半では唯一の古代寺院である「房王寺」に関連する遺構・遺物が確認されている。御藏遺跡と上沢遺跡からはある程度の量の瓦が出土しており、瓦葺建物の存在が推定されている。

平安時代末以降

平安時代の末に平家一門によって大輪田泊が修築された頃から更に遺跡数は増加していく。この時期の集落は祇園遺跡(37)・戎町遺跡(38)・若松町遺跡(39)・二葉町遺跡(40)・御船遺跡(41)・上沢遺跡(42)・大開遺跡(43)・兵庫津遺跡(44)等がある。祇園遺跡からはまさに平家が権勢を誇っていた時期の庭園が検出されている。兵庫津遺跡は大輪田泊の背後に広がる遺跡と考えられ、以後江戸時代から更には現在まで人々の活動が連続と続いている。

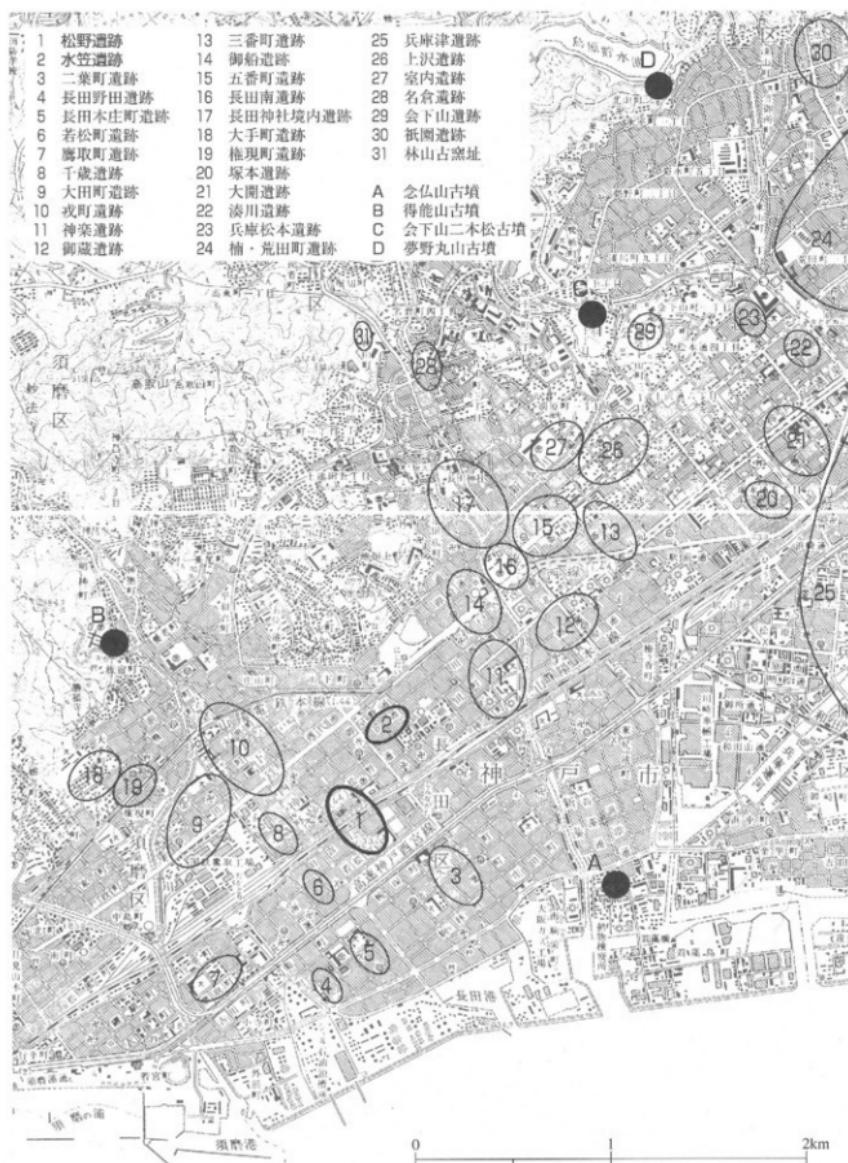
江戸時代以降

江戸時代以降の集落はこれら上記の集落が基礎となって展開し、近代化以前の村落に繋がっていくものと思われる。

註『神戸市埋蔵文化財年報』は主要調査事例である。)

- (1) 喜谷美宣『縄文人のくらし』神戸市立考古館 1979
- (2) 直良信夫『神戸市名倉町出土の縄文土器片』『近畿古文化叢考』 1943
- (3) 丸山 澄編『楠・荒田町遺跡Ⅲ』神戸市教育委員会 1990
- (4) 山本雅和編『戎町遺跡第1次発掘調査概報』神戸市教育委員会 1989
- (5) 丸山 澄・丹治康明「五番町遺跡出土の土器」『楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1980
- (6) 松林宏典「五番町遺跡 第5次調査」『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1997
- (7) 口野博史・口野博史編『上沢遺跡 第2次調査』『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1994
- (8) 阿部敬生・口野博史編『阿部敬生・口野博史』『上沢遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1995
- (9) 前田佳久編『大開遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1993
- 鎌田 勉・友岡信彦「大開遺跡 第7次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999
- (10) 丸山 澄・丹治康明「楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1980
- (11) 千種 浩「松野遺跡」『昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1983
- (12) 黒田恭正編『長田神社境内遺跡発掘調査概報』神戸市教育委員会 1990
- 西岡誠司・佐伯二郎「長田神社境内遺跡」『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1992
- (13) 池田 稔「長田南遺跡 第1次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2001
- (14) 斎木 譲「上沢遺跡 第19次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2001
- (15) 西岡誠司「祇園遺跡 第7次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2001

- (15) 梅原未治「神戸市板宿得能山古墳」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第二輯 兵庫県 1925
- (16) 梅原未治「会下山二本松古墳及び経塚」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第五輯 兵庫県 1923
黒田恭正「会下山二本松古墳」『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1987
- (17) 梅原未治「神戸市夢野丸山古墳」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第二輯 兵庫県 1925
- (18) 喜谷美宣「市街地に消えた古墳－念仏山古墳－」『神戸市立博物館研究紀要』第6号 神戸市立博物館 1989
- (19) 森田 稔「長田区観音山古墳の出土遺物」『博物館だより』No.23 神戸市立博物館 1988
本村豪章「古墳時代の基礎研究稿」『東京国立博物館紀要』16 東京国立博物館 1981
- (20) 須沢正行・渡辺伸行「神戸市長田区林山窯について」『神戸古代史』3-1 1986
- (21) 大平 茂編『神戸市鷹取町遺跡』兵庫県教育委員会 1991
- (22) 口野博史「若松町遺跡 第2次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2001
- (23) 松林宏典「兵庫松本遺跡 第1次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2001
- (24) 渡辺伸行・西岡誠司「神奈遺跡」『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1987
- (25) 妙見山龍遺跡調査会「神戸市長田区三番町遺跡現地説明会資料」1987
口野博史・水嶋正稔「三番町遺跡 第2次調査」、黒田恭正「三番町遺跡 第3次調査」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1994
- (26) 池田 稔・井尻 格「上沢遺跡 第9次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2000
- (27) 下種 浩編『松野遺跡発掘調査概報』神戸市教育委員会 1983
口野博史編『松野遺跡発掘調査報告書3～7次調査』－新長田駅南第2地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う－ 神戸市教育委員会 2001
- (28) 西岡巧次「湊川遺跡」『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1989
- (29) 丸山 漢・丹治康明「楠・荒田町遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1980
- (30) 安田 滉編『御藏遺跡第17・38次発掘調査報告書』御崎東地区震災復興土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 神戸市教育委員会 2001
- (31) 兼康保明・小林健二「長田田遺跡 第1次調査」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1998
- (32) 吉川義彦『大田町遺跡発掘調査報告』関西文化財調査会大田町遺跡調査団 1994
口野博史・川上厚志「大田町遺跡」『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1994
森内秀造・山上雅弘編『兵庫県文化財調査報告第128号「神戸市須磨区大田町遺跡発掘調査報告書」－神戸市大田郵便局等新築工事に伴う発掘調査報告書－』兵庫県教育委員会 1993
山口英正・東喜代秀「大田町遺跡 第5次調査」『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1997
- (33) 菅本宏明『神楽遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1981
- (34) 關野 豊「御藏遺跡 第2次調査」、山口英正「御藏遺跡 第3次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2000
山田清朝編『神戸市 御藏遺跡－第8・9・10次調査－』神戸市教育委員会 2000
安田 滉編『御藏遺跡第4・6・14・32次発掘調査報告書』御崎西地区震災復興土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 神戸市教育委員会 2001
- (35) 斎木 巍・柏原正民・兼康保明・弘田和司「上沢遺跡 第3次調査」、斎木 巍「上沢遺跡 第4次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999
- (36) 水口富夫・平田博幸・高瀬一嘉「室内遺跡」『平成9年度年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1998
- (37) 富山直人「紙園遺跡第5次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2000
- (38) 山口英正「戎町遺跡 第15次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999
山本雅和・戎町遺跡 第19次調査』『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1998
- (39) 口野博史「若松町遺跡 第2次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2001
- (40) 川上厚志編「二葉町遺跡発掘調査報告書第3・5・7・8・9・12次調査』－新長田駅南第2地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う－ 神戸市教育委員会 2001
- (41) 東喜代秀「御船遺跡 第1次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999
池田 稔「御船遺跡 第2次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2000
- (42) 橋詰清孝「上沢遺跡 第20次調査」、斎木 巍「上沢遺跡 第21次調査」、斎木 巍「上沢遺跡 第27次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2001
- (43) 富山直人「大開遺跡 第4次調査」『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1995
- (44) 池田 稔「兵庫津遺跡 第6次調査」、富山直人「兵庫津遺跡 第7次調査」、須藤 宏・阿部 功「兵庫津遺跡 (工事立合調査)」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999
内藤俊哉「兵庫津遺跡 第15次調査」、同「兵庫津遺跡 第17次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2001
兼康保明・中山浩彦「兵庫津遺跡」、兼康保明・鐵 英記・菊地逸夫・神野 信・半澤幹雄・大川勝宏「兵庫津遺跡」『平成8年度年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1997



第6図 周辺主要遺跡分布図 (S = 1 : 25,000)

第2節 周辺の地理的環境と遺跡の立地

地質

六甲山系南麓の平野部は六甲山を構成する花崗岩の風化土や、所謂六甲花崗岩をかつて被覆していた大阪層群から流出した土砂によって形成された沖積地である。松野・水笠両遺跡が所在する神戸市長田区は南麓平野部でも西端付近に位置し、巨視的には北西方向から南東方向に徐々に下がる緩斜面地となっている。両遺跡は妙法寺川が形成した扇状地扇端から自然堤防帶に位置しているが、一帯は阪神・淡路大震災の地震動が大きく被害が甚大であった範囲であることから見ても比較的軟弱な地盤であることが判る。

今から約50～60万年前には「六甲変動」と呼ばれる六甲山系を形成する隆起運動が始まり、約7,300万年前に形成された所謂六甲花崗岩が隆起してきた。この隆起運動と大阪湾の沈降運動の結果、大阪湾の最深部と約1,000mの高低差を有する長さ約40kmの山塊ができる上ったが、この六甲山塊も大きく東西2つに分けることができる。東六甲は南麓平野部との境界が急峻で比高もあり、平野部に卓越した扇状地を発達させている。一方西六甲は南麓平野部との比高が小さく、供給される土砂量が少ないため扇状地の発達が小さい。また海岸沿いには沿岸流で運ばれた土砂によって砂堆が形成されている。そして両者の間は自然堤防帶と三角州が形成されているため、南麓平野の傾斜も緩やかである反面に比較的軟弱な地盤となっている理由がそこにある。

微地形復元

第9図は1:2,500地形図に記された道路上の標高や一部描かれている等高線から、平野部全域に等高線を復元したものである。丘陵部や山裾は大規模開発が多いことと道路上の標高の記入が少ないとから復元しなかった。復元の際には昭和48年作成の地図の数値を使用したが、適切な位置に数値がない場合は後年のものを援用した。また道路上でも明らかに旧地形を改変している部分の標高や橋上の標高、造成されている可能性が高い街区内の標高はノイズの原因となるため意図的に使用しなかった。一般に近世以降と考えられている河道の固定に伴う堤防や昭和13年の阪神大水害時の堆積層の有無など完全に旧地形を復元できとはいが、微地形の観察上は大きな齟齬はないものと思われる。

微地形を概観するとまず海岸沿いには砂堆の発達が、そして砂堆内側の旧苅藻川（新湊川）河口部の東西两岸にはラグーンが確認される。時期を示す資料は存在しないが、このラグーンが堆積作用で陸化する以前には天然の良港として使用されていた可能性が高い。西側のラグーンから北東の蓮池町の方向へは浅い谷状の低地が続いており、その左右にはそれぞれ旧苅藻川・妙法寺川由来の堆積地形が確認される。従って以前存在した「蓮池」は主に両河川の堆積層末端から湧き出す伏流水を堤で堰止めた池であったと考えられる。またこの谷状低地の存在によって両河川の扇状地は複合化していないことが明瞭に識別できる。微高地としては旧苅藻川河口部西側の砂堆に向かって小規模の尾根状突出がある。現在そこには臨済宗南禪寺派の海泉寺が所在するが、海泉寺は明治7年に火災のため移転し、既に現地にあった別の寺院と一つになったものである。しかし地形から考えて先述したラグーンが港に使われていた際、航海の恰好の目標になるため何らかの施設が存在していたとしてもおかしくはない。また尾根状の突出の北側背後には周囲より更に傾斜が緩い平坦地が存在している。扇状地では旧苅藻川が形成した扇状地扇頂部は村野工業高校の北

側、扇端部はJR付近に位置している。一方妙法寺川が形成した扇状地扇頂部は滝川高校付近であるが、扇端部は判然としないまま更に南側の自然堤防帶に続いている。強いて境界を求めるならば主要地方道神戸・明石線とJRの中間になると思われる。妙法寺川下流の自然堤防帶一帯には等高線の間隔や走行に乱れが見られる部分が数ヶ所存在している。これらは完全に埋没して現在存在を確認できない河道固定以前の妙法寺川旧河道や、その時の自然堤防が複雑に交錯した結果と考えられる。山裾では妙法寺川西方の東須磨駅周辺から以西、妙法寺川支流の天井川西岸の月見山駅一帯にかけての部分は周囲より更に傾斜が急である。しかし天井川の河道固定に伴う堤防を除くと目立った起伏もなく、等高線が比較的並行に走っている。新しい堆積がなく段丘化が進行している部分と考えられる。

遺跡の立地

上記の地理的環境の中、主要各遺跡がどの様な位置に立地しているか具体的に触れてみたい。遺跡の分布状況は第1節の第6図を参照されたい。松野遺跡は妙法寺川が形成した扇状地扇端部から自然堤防帶にかけての位置に相当する。その中でも第1・2次調査を実施して古墳時代後期の豪族居館を検出した松野通4丁目南半の街区は傾斜が周辺より急な部分であり、南東方向に眺望が開けている状況にある。水笠遺跡は妙法寺川下流の自然堤防帶に相当する。松野遺跡と同様に北西から南東方向に徐々に傾斜していく地形である。二葉町遺跡は砂堆に向かって突出する小尾根背後の更に緩傾斜の平坦地に立地する。長田野田遺跡・長田本庄村遺跡は妙法寺川河口部付近の三角州、若松町遺跡・鷹取町遺跡は妙法寺川下流の自然堤防帶、千歳遺跡は妙法寺川の扇状地扇端部から自然堤防帶にかけての位置にそれぞれ立地している。地形的にはこれらの遺跡は實際には埋没して現在確認できない妙法寺川の旧河道によって分断され、遺跡が存在した当時の自然堤防や微高地に営まれたものと考えられる。大田町遺跡は妙法寺川の扇状地扇端部、戎町遺跡は同じく扇状地扇央部にそれぞれ立地している。神楽遺跡・御藏遺跡・三番町遺跡は旧茹藻川の扇状地扇端部、御船遺跡・五番町遺跡・長田南遺跡は同じく扇状地扇央部、長田神社境内遺跡は同じく扇状地扇頂部にそれぞれ立地している。遺跡の時期や性格等のため単純な比較は出来ないが、妙法寺川流域の遺跡は扇状地から下流部にかけての範囲に広く間隔を開けて分布し、旧茹藻川の流域の遺跡は扇状地上に狭い間隔で分布している傾向が看守される。

妙法寺川・旧茹藻川両流域以外の近隣平野部では、妙法寺川西方山裾の段丘上には権現町遺跡・大手町遺跡、旧湊川の自然堤防帶から扇状地上には塙本遺跡・大開遺跡・湊川遺跡・兵庫松本遺跡、旧湊川東方段丘上には楠・荒田町遺跡、旧湊川河口部南側の砂堆上には兵庫津遺跡がそれぞれ立地している。

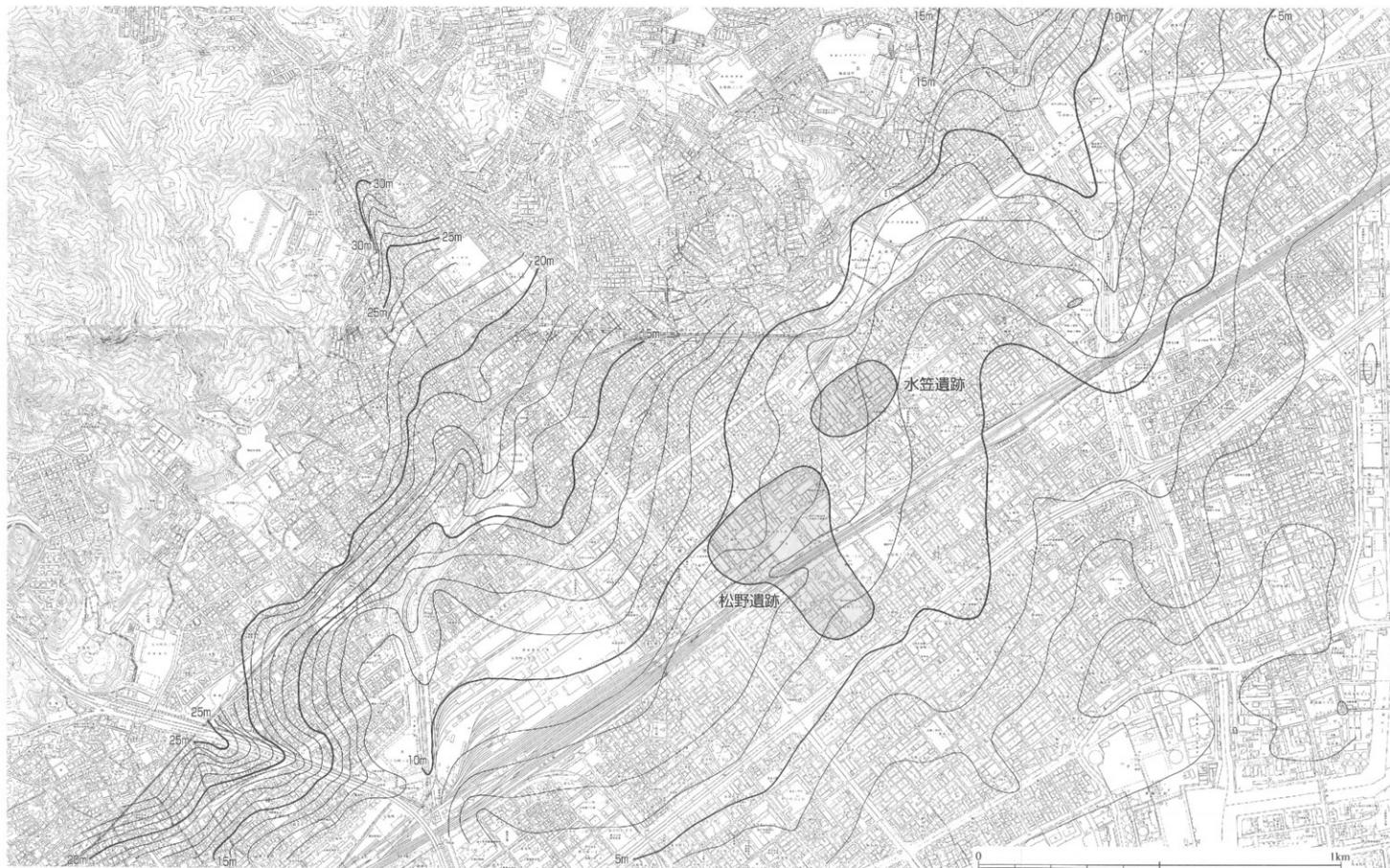
得能山古墳・夢野丸山古墳は六甲山系前面の小尾根上、会下山二本松古墳は会下山丘陵頂部にそれぞれ立地し、いずれも南麓平野部の眺望が極めて良好な位置にある。一方大正時代初めに削平されて消滅したと考えられる念仏山古墳の立地は異なり、旧茹藻川河口部東側の砂堆上である。旧茹藻川河口部の砂堆内側に東西両岸にラグーンが拡がっていたこと、そのラグーンが港として使用されていた可能性があることは先述の通りであるが、全長約200mの大型前方後円墳と推定されている念仏山古墳がそのような位置に立地していることは、港の使用時期と西六甲南麓平野部の開発の進行状況を考える上で、また所謂畿内政権にこの一帯が取り込まれていく過程を考える上で極めて興味深い内容である。



第7図 地形分類図（山本雅和編「戎町遺跡第1次発掘調査概報」神戸市教育委員会 1989 より、一部改変）



第8図 長田区周辺の旧地形図 ($S = 1 : 25,000$)



第9図 長田区平野部微地形復元図 ($S = 1 : 10,000$)

第Ⅲ章 松野遺跡の調査

第1節 調査の概要

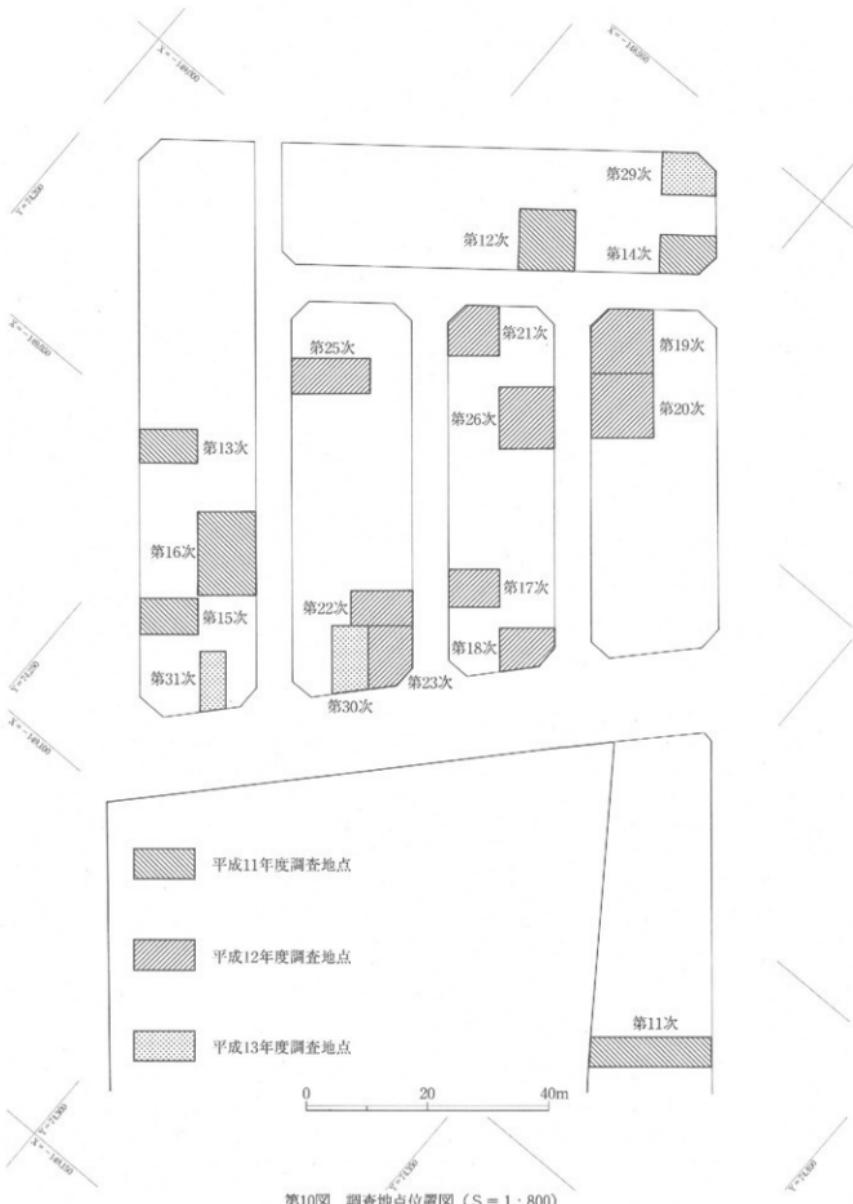
平成13年度末現在で計18件となる個人住宅等の新築に伴う発掘調査であるが、区画整理の街路築造完了後に宅地の換地が進行したため、当然のことであるが住宅の事業主は換地を受けた方々で、まさに先の震災で被災された方々である。従ってその方々が少しでも早く新生活を始められる様、着工予定にできるだけ影響を及ぼさない様に迅速な対応と調査が求められた。そのため個々の調査地点の配置には何の法則性もない。偶然にほぼ同時期に隣接した敷地で新築計画が出され、要調査となったもののみ、2軒分の敷地を同時に調査した事例は存在したが、要調査場所を順次調査していくに過ぎない。

個々の個人住宅の新築計画が出された後、教育委員会文化財課では当該建物の工事が埋蔵文化財に影響を与えるかどうか内容を検討し、発掘調査の要不要を判断している。工事掘削深度が浅いため埋蔵文化財に影響を及ぼさない事例には調査を実施していない。従って松野通4丁目の街区內でも調査を実施せずに住宅が新築されたものもある。また要調査と判断された事例でも埋蔵文化財への影響の程度により、影響が大きく敷地のほぼ全面に調査を実施したもの、影響が及ばない部分があるため敷地の一部を除いて調査を実施したもの、影響が一部に限られるため基礎や地中梁等の部分にのみ調査を実施したものなどがあった。また調査は実施したものの、掘削深度が中程度のため工事の際にもこれ以上埋蔵文化財に影響を与えない事例では、さらに下方に埋蔵文化財が存在していても調査を終了したものもあった。前提条件として工事が埋蔵文化財に影響を与える場合と、調査時の安全の確保の二点を根拠としたため、個々の工事計画により調査の対応は一定していない。またその上に調査面積も換地された土地の大小と、その中の工事の影響範囲に左右され比較的小規模なものが多く、平均約50m²、最大でも約100m²、最小は約18m²であった。

第2節 基本層序

基本層序

各調査の具体的な層序は個々の土層図を参照されたいが、大別して上から順に近現代の整地土、都市化直前の耕作土・床土、旧耕作土、遺物包含層、基盤層もしくは地山と続いている。現地調査時には遺物包含層と基盤層もしくは地山を区別したが、遺物包含層から基盤層もしくは地山へと徐々に変化して層界の不明な調査もあり、遺物包含層は基盤層あるいは地山の上部が土壤化したものとの可能性も考えられる。従って本来の遺構面は遺物包含層の上面と考えられる場合もあるが、ほとんどの遺構は基盤層もしくは地山の上面まで掘り下げなければ確認できなかった。それらの中で唯一第19次調査で検出した掘立柱建物1棟と土坑1基は明らかに遺物包含層の上面で検出した。また後世の耕作によって遺物包含層自身が削平されて消滅している調査もあった。遺物包含層からは古墳時代や弥生時代の土器片が少量出土したが、多くは弥生時代後期と思われるものであった。基盤層中からは弥生時代前期と思われる土器片が極少量出土した。



第3節 各調査成果

1. 第11次調査

調査区は幅4m、長さ14mである。遺構面は乳黄色系のシルト混じり極細砂で、西から東に向かってわずかな傾斜面となっている。遺構は調査区の西半を中心に確認でき、溝3条、ピット5基がある。

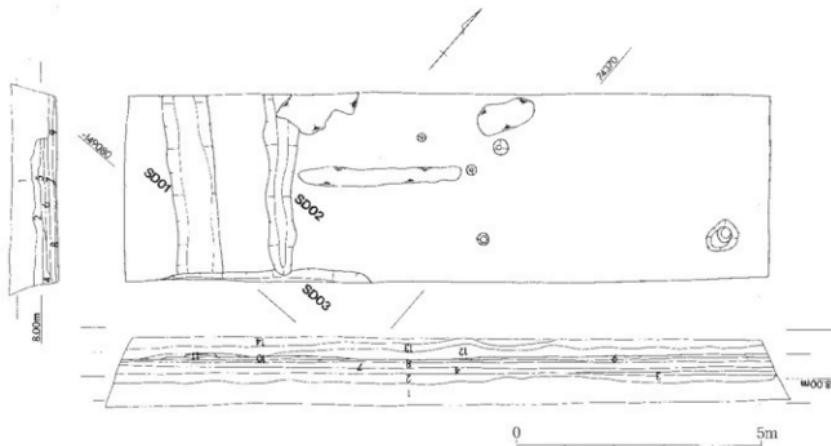
S D01 北西から南東にむけて走る溝で、幅1m前後、最大深さ10cmである。埋土は暗褐色細砂質シルトを主とするが、溝底には灰色極細砂が薄く堆積している。

S D02 S D01とはほぼ平行して走る溝で、幅50cm前後、最大深さ20cmである。埋土は暗褐色細砂混じりシルトである。

S D03 S D01・S D02と直交し両遺構を切る溝で、最大幅30cm、最大深さ8cmである。埋土は暗褐色シルト質細砂である。

ピット いずれも暗褐色系の埋土であるが、柱穴と認定できるものはない。

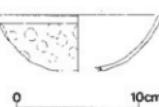
出土した遺物には、土師器・須恵器・瓦器がある。その量は概して少なく、いずれもが



- | | |
|------------------|---------------------|
| 1 盛土・搅乱 | 8 暗褐色シルト質細砂～細砂 |
| 2 耕土 | 9 暗乳褐色シルト質細砂～細砂 |
| 3 暗乳色シルト混じり細砂～細砂 | 10 暗灰褐色シルト質細砂 |
| 4 灰色シルト質細砂 | 11 起褐色纏状質シルト |
| 5 乳黄色シルト質細砂～中砂 | 12 淡乳黄色シルト混じり極細砂～細砂 |
| 6 淡黄灰色シルト質細砂 | 13 淡乳灰色細砂～細砂 |
| 7 明灰色シルト質細砂 | 14 淡黄色シルト混じり極細砂 |

第11図 第11次調査平面図・土層図 (S = 1 : 100)

第12図 第11次調査溝 S D03
出土遺物実測図 (S = 1 : 100)

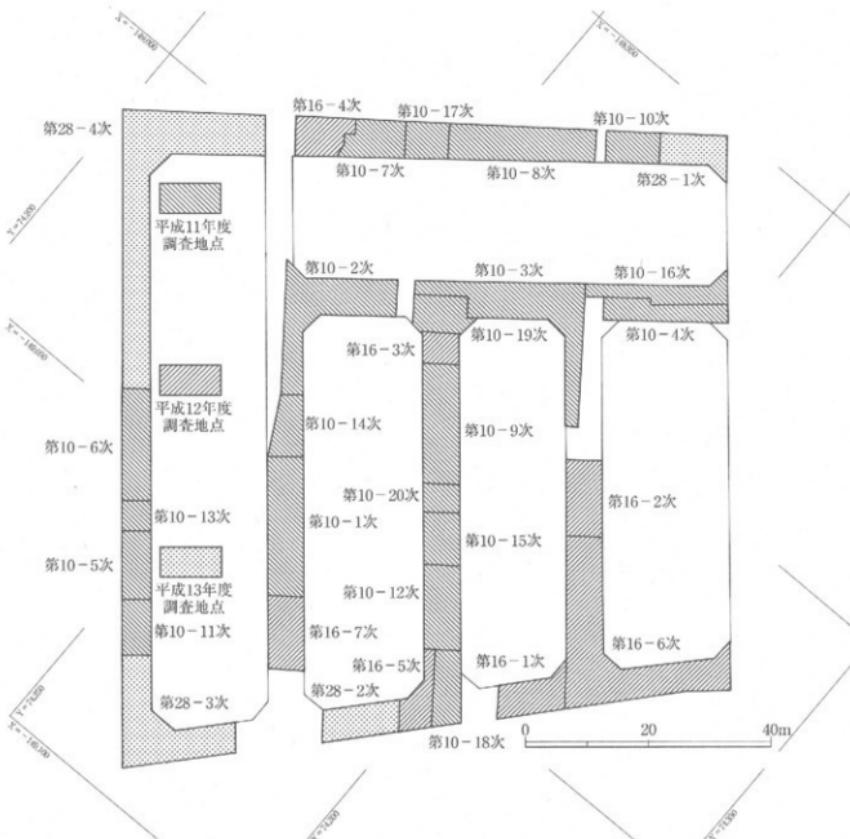


遺構の上面あるいは遺構埋土から出土したものである。S D01~03では、いずれも平安時代末～鎌倉時代初めの土師器・須恵器・瓦器が出土している。

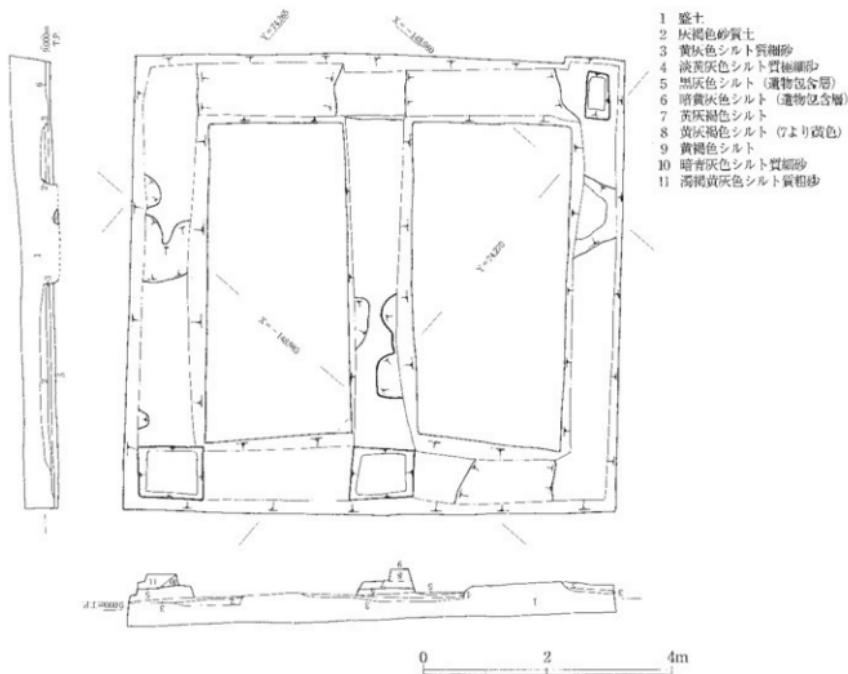
なお、工事掘削深さG.L.-1.1mまで遺構面以下について断ち割り調査を実施したが、埋蔵文化財は確認されていない。

小結

今回の調査区は古墳時代後期初めの豪族居館とされる遺構の確認された第1・2次調査地点に隣接する地区であったが、古墳時代後期の遺構は全く確認できず、鎌倉時代初めの溝を3条確認できたにとどまる。第1・2次調査でも豪族居館を取り巻く柵列と濠の西側では顕著な遺構が確認されていないことから、同様に古墳時代後期初めの遺構が顕著ではない地点と考えられる。



第13図 街路予定地調査地点位置図 (S = 1 : 800)



第14図 第12次調査平面図・土層図 (S = 1 : 80)

2. 第12次調査

建物の基礎で破壊される部分に限定して調査を行った。工事影響レベルまでの調査で、基礎部分はG.L.-90cm、梁部分はG.L.-50cmまで掘り下げた。

現地表面から30~40cmまでは盛土で、その下層に希薄な耕作土・旧耕作土層が堆積し、これらを除去すると黒灰色シルトの遺物包含層が検出される。調査区の4分の3は包含層の上面、または途中で調査が終了している。旧耕作土と包含層の間からは須恵器・土師器が出土しているが、包含層からは土師器片のみで街路部分での第10次調査をふまえると、おおまかに弥生時代後期から古墳時代初頭の包含層と考えられる。

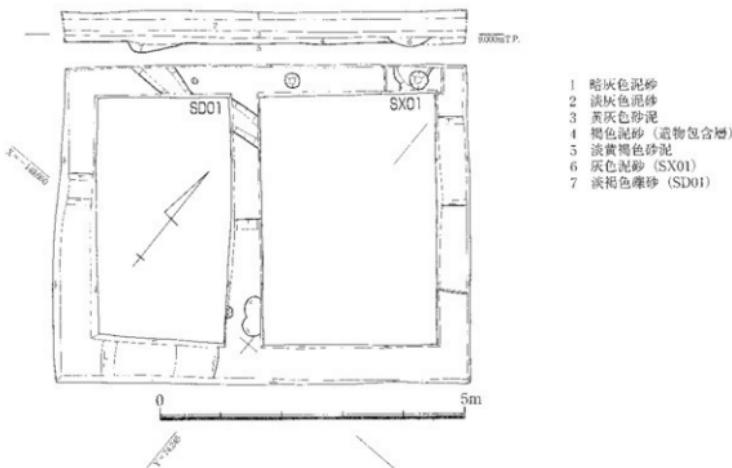
基礎部分と梁の一部で遺構面を検出したが、遺構は確認されなかった。

小結

今回はほとんどの部分が包含層上面で遺構面の検出に及ばなかったため、本調査区の状況は不明である。遺構は確認されなかったが、包含層からは須恵器が1点も出土しなかったことから、第10次調査と同様に古墳時代中期頃の遺構がないものと考えられる。

3. 第13次調査

調査区は、基礎の形状が「日」字形である。層序は旧耕土及び現代盛土、淡灰色泥砂、



第15図 第13次調査平面図・土層図 (S = 1 : 80)

黄灰色砂泥、褐色泥砂（古墳時代包含層）、淡黄褐色砂泥（古墳時代遺構面）である。

淡灰色泥砂、黄灰色砂泥層から微量の中世の土師器・須恵器が出土した。古墳時代包含層からも微量の古墳時代の土師器・須恵器が出土した。

検出遺構 調査区北東部では古墳時代包含層に切り込んだ、直径0.3m、深さ0.2mのピットと径0.6m、深さ0.2mの落ち込みS X01が検出された。微量の遺物と層位から鎌倉時代頃の遺構と考えられる。

同じく調査区北辺では、直径0.2m、深さ0.2mのピットと幅0.5m、深さ0.2mの溝SD01が検出された。層位から古墳時代もしくはそれ以前の遺構と判断される。

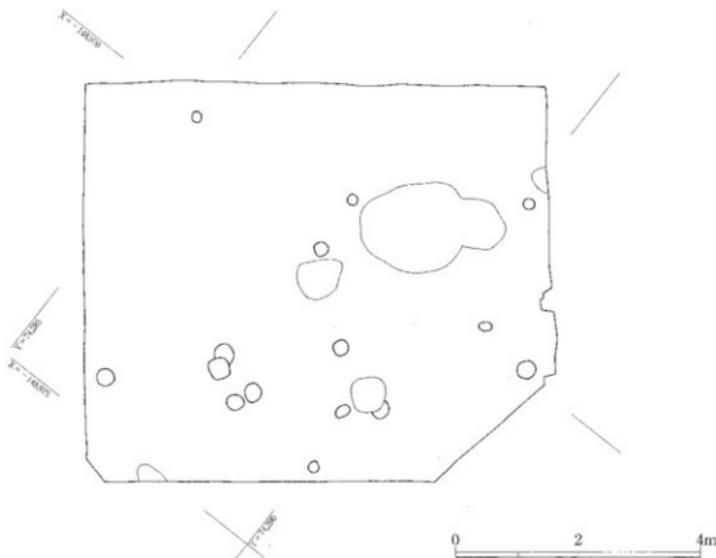
調査区西辺から南東部にかけては擾乱坑である。中央部は、北辺から連続すると考えられる溝SD01と南へ僅かに下がる地形が検出された。東辺は擾乱坑と近世の井戸と考えられる遺構が検出された。

小結 僅かな面積の調査区であるが、比較的良好に遺構面が遺存していた。また今後の調査で遺跡が良好に残る箇所については、中世の遺構面が存在することも考えられる。

また北辺から中央部で検出された溝SD01からの出土遺物はなかった。しかし遺構内堆積土が他の遺構とは異なり砂礫を多く含むものであった。周辺の調査地区やJRを挟んだ南側の調査地では、これと同様の堆積土内から弥生時代前期の遺物が検出されていることから、弥生時代の遺構の可能性も考えられるところである。

4. 第14次調査

南北6m、東西8mの調査区である。盛土及び旧耕土層を重機による掘削でおこない、その後北半部分については包含層を人力でおこなっている。東半については包含層まで旧耕土層が及んでいたため、旧耕土層の直下に少し削平された状態で遺構面が存在した。

第16図 第14次調査平面図 ($S = 1 : 80$)

検出遺構

検出された遺構はピット15のみであった。ピットの深さはまちまちであるが、深さ0.6mを測るものもある。柱穴の断面観察から柱の接ぎ変えがおこなわれた痕跡が認められ、ある一定期間建物が存続していたと考えられる。また、柱穴の配置状況から何度かの建替えが行われたと考えられる。

時期としては12世紀後半から13世紀末の間に建てられ存続していたと考えられるが、調査範囲の制約から、柱穴の組み合わせによる建物の時期の特定までには至っていない。

小結

今回の調査は、現在松野遺跡の範囲に含まれてはいるものの明らかでなかった地区である。今回の調査は中世段階における集落の一端が明らかとなった。

松野遺跡では、古墳時代の居館として著名であるが、その周辺の状況については、不明な点が多くあった。近年の調査で居館の北側では古墳時代の遺構はほとんど認められず、飛鳥時代以降の耕作痕や中世の集落が検出されているのみである。

居館の北側には古墳時代の遺構密度が少ないことが明確になれば、松野遺跡全体を考える上で重要な成果であり、大きな問題の提議となろう。

5. 第15次調査

今回の調査地は、第1・2次調査の北側に位置し、居館遺構に隣接する部分にあたるものである。

S D01 ほぼ南北方向に走る溝である。幅20cm～40cm、深さ10cm前後である。

S D02 ほぼ東西方向に走る溝である。幅20cm～30cm、深さ10cm前後である。



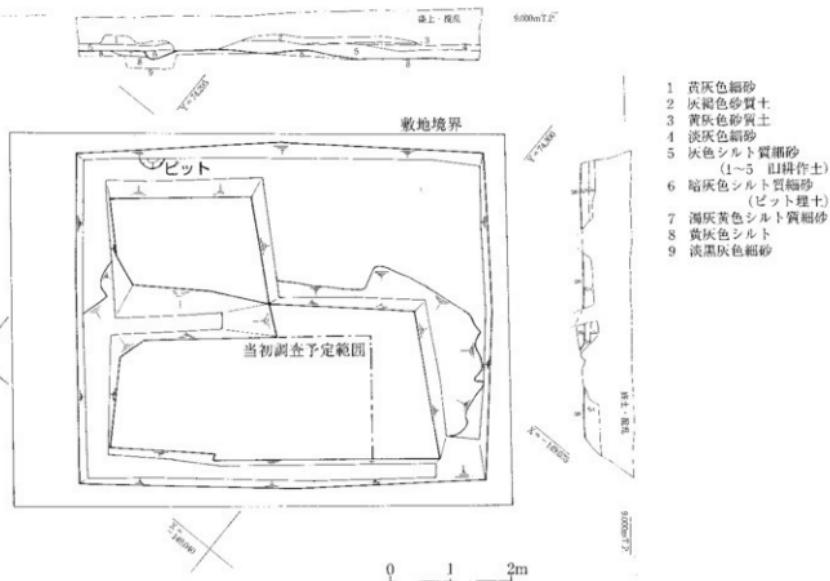
第17図 第15・16次調査平面図・土層図 (S = 1:100)

- S D03 ほぼ北東から南西方向に走る溝である。幅20cm~30cm、深さ10cm前後である。
- S D04 ほぼ北東から南西方向に走る溝である。幅20cm~30cm、深さ10cm前後である。
- この他にピット4基を検出した。
- 小結 今回検出した遺構は溝4条、ピット4基である。遺構の時期は遺物に乏しいため確定出来ない。包含層からの出土遺物としては弥生時代後期から古墳時代後期にかけてのものが出土している。
- 今回の調査も含めて居館遺構の検出された地点の北側では、ほとんど遺構が検出されておらず、空間地帯または生産域であった可能性が高いものと考えられる。

6. 第16次調査

今回の調査地は、第1・2次調査の北側に位置し、居館遺構に隣接する部分にあたるものである。

- S D01 ほぼ南北方向に走る溝である。幅20~40cm、深さ10cm前後である。
- ピット 南端で数基検出している。
- 小結 今回検出した遺構は溝1条、ピット数基である。遺構の時期は遺物に乏しいため確定出来ない。包含層からの出土遺物としては弥生時代後期から古墳時代後期にかけてのものが出土している。



第18図 第17次調査平面図・土壌図 (S = 1 : 80)

今回の調査も含めて居館遺構の検出された地点の北側では、ほとんど遺構が検出されておらず、空間地帯または生産域であった可能性が高いものと考えられる。

7. 第17次調査

今回の調査は新築住宅の基礎部分について実施したが、調査区の南半分は既に地盤改良が行われて大きく攪乱を受けており、遺物包含層や遺構面も失われていた。

調査区北半は、後世の耕作によって遺物包含層は削平され、わずかに遺構面上に痕跡程度に残るのみであった。遺構面も同様に削平を受けているものと考えられ、遺構もピットを1基検出したに止まる。

ピットは調査区北西隅で検出したもので、約半分が調査区外に延びている。このため、本来の規模については不明であるが、径50cmで、深さ15cmのものと考えられる。

なお、遺構面よりも下層の状況について把握するために一部断ち割り調査を実施した。現地表下約85cmに存在する淡黒灰色細砂層より土器片が1点出土したが、そのほかに遺構・遺物等が確認されず、埋蔵文化財の拡がりが認められなかったので、以上で調査を終了した。

小結

今回の調査は、基礎部分のみの調査であったことに加えて、調査区の南半分が大きく攪乱を受けていたことなどにより、遺構・遺物ともに極少量検出したにとどまった。調査区北半部も遺物包含層や遺構面が大きく削平されており、遺構もピットを1基検出したのみであった。このため、今回の調査地の南側で検出された、古墳時代の豪族居館の存在時期における、当調査地の土地利用等については明かにできなかった。

8. 第18次調査

敷地南隅を除いてほぼ全面の発掘調査で、平成11年度に都市計画街路予定地で実施した第10-1次調査の北西隣に位置する。溝1条を検出した。

S D01

調査区の南東半で検出した、北東から南西方向の溝である。北東側は調査区外に統き、南西側は攪乱で破壊されているため全長は不明である。検出長3.5m、幅0.7~1.0m、深さ約20cmで断面はやや深い皿状、埋土は灰褐色砂である。遺物は出土しなかった。

小結

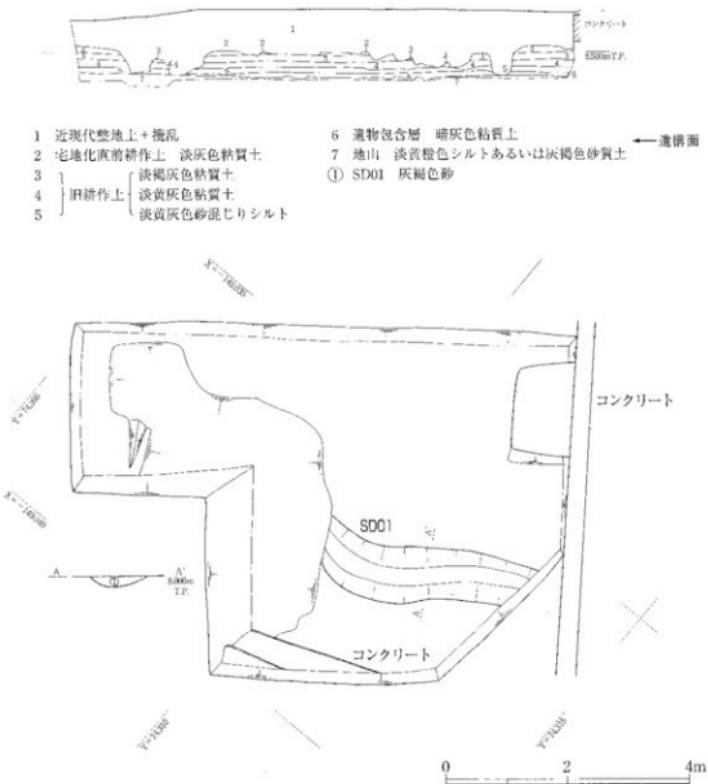
今回の調査では溝を1条検出したのみであった。遺物の出土もなかったために時期の確定は難しい。しかし街路部分での第15-1次調査同様に遺構面の遺存状況が悪いため、他にも遺構が存在していた可能性はある。近隣での調査事例の増加を待ちたい。

9. 第19次調査

敷地南隅を除いてほぼ全面の発掘調査で、平成11年度に都市計画街路予定地で実施した第10-4次調査の南東隣に位置する。掘立柱建物1棟、井戸1基、土坑2基の他、ピットを16基検出した。

S B01

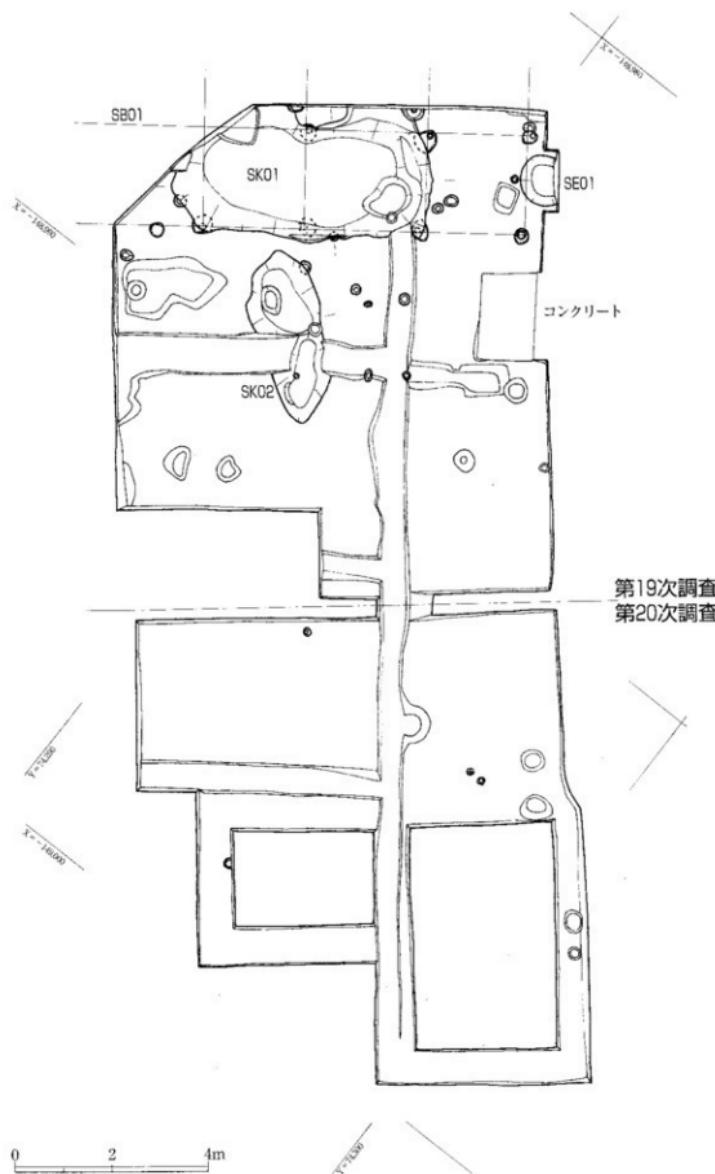
調査区の北西側で検出した掘立柱建物で、明らかに遺物包含層の上面で検出した。柱間は東西方向は4間分、南北方向は1間分を確認したが、南東側にはさらに統く柱穴は存在しないため建物の南辺部分に相当する。北西側は調査区外に統くが、平成11年度区画整理



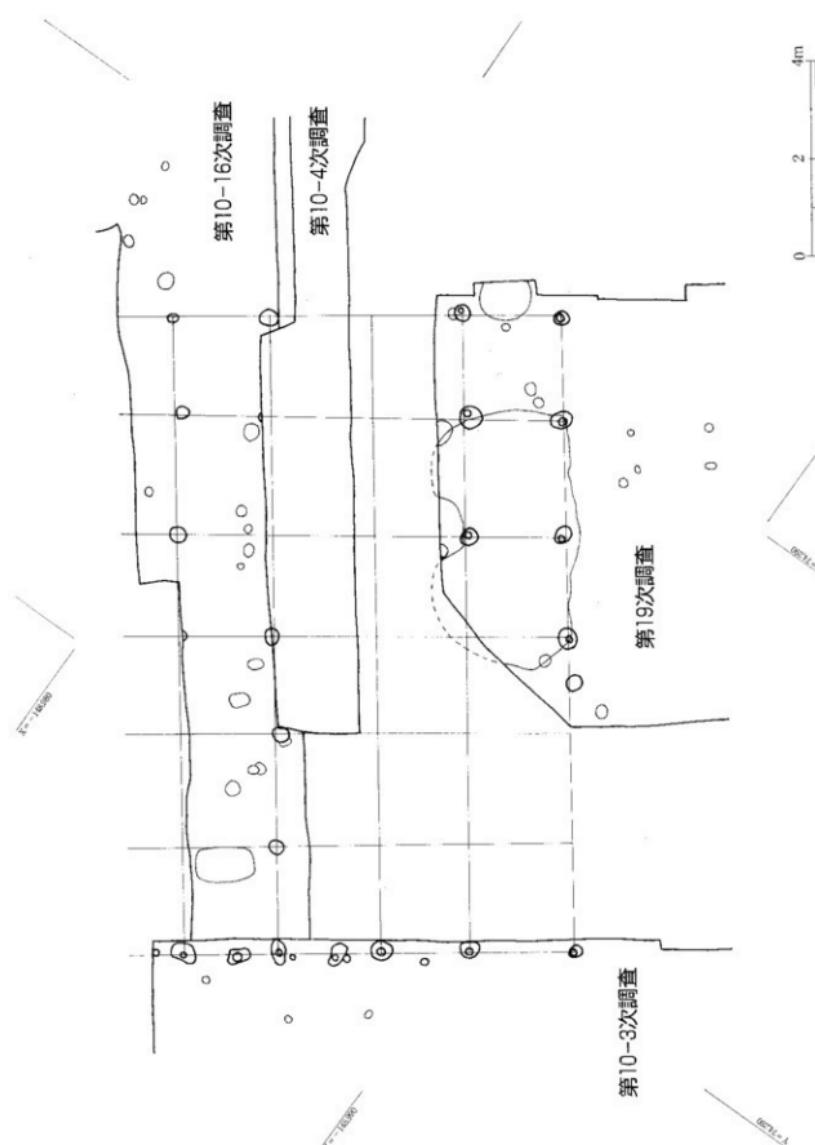
第19図 第18次調査平面図・土層図・溝SD01断面図 (S = 1:80)

の街路部分の発掘調査で同じ建物の柱穴を検出しておらず、建物内部に未調査部分も含むが復元すると桁行6間(13.0m)×梁間4間以上(7.9m)の総柱建物になる。東西方向の柱列の方向は所謂国土座標上でE36°Nである。掘形の大きさは30~60cm、深さは15~35cmである。西側柱列と南側柱列の中には間柱となるものがあり、主柱穴の中には柱痕を持つものや根石を持つものがある。主柱穴の柱間の規模は東西方向が2.0~2.4m、南北方向が1.8~2.1mである。南端の柱間の東から2・3間目には土坑SK01が存在する。

SE01 調査区の北隣で検出した井戸である。北東側の一部が調査区外に続くが、現状では平面は長径1.1mの楕円形、底面も長径0.7mの楕円形である。深さ1.2mで、埋土は褐色シルトと暗灰色シルト、それと地山構成土が塊状に混和したものである。井戸最下部の地山は淡黄褐色砂質土で、この層が湧水層となっている。井戸枠は存在しなかったが、埋土が灰色系のシルトと地山土が混和したものであることを考慮すると、井戸枠を抜き取って埋め立てたものと思われる。土器片は全く出土しなかったため時期は不明である。



第20図 第19・20次調査平面図 ($S = 1:100$)



第21図 第19次調査標立柱建物S-B01復元図 (S = 1 : 100)

S K01 調査区の北西辺で検出した不整形の土坑で、明らかに遺物包含層の上面で検出した。長さ5.3m、幅2.9m以上、深さ約45cmで断面は浅い皿状、埋土は上から順に淡褐色灰色粘質土、褐色灰色粘質土、灰色微砂、淡灰色土、淡褐色灰色土である。褐色灰色粘質土には別種の土の小塊や炭小片が含まれるため埋め立て土と思われ、また灰色微砂には濃密に炭が分布する部分がある。木片を焼却した後で土を被せて埋め立てたと考えられる。遺物は鎌倉時代頃の土器片が大量に出土した他、青磁片・白磁片も含まれていた。検出した状態では掘立柱建物S B01の柱穴を覆っていたが、炭片を含む灰色微砂を取り除いた状態では柱穴が検出され、柱穴を避けるように土坑が配置されていたことが判る。従って土坑と建物は同時に併存しており、建物の内部に土坑が掘られていたと推定できる。建物を解体する際に不要となった廃材を土坑上部で焼却し、不要の土器類とともに埋め立てたと考えられる。

S K02 調査区の中央で検出した長卵形の土坑である。長径3.6m、短径1.5m、深さ約35cm、断面は浅い皿状であるが底面の数ヶ所に楕円状に窪む部分がある。埋土は上から順に暗灰茶色シルト、茶灰色粘土である。出土した遺物の多くは弥生土器と思われる微細片であるが、1点のみ6世紀初頭頃と思われる。生焼けの須恵器杯蓋片が出土した。従ってこの土坑は耕作溝を除くと豪族居館跡を検出した第1～3次調査以北では初めて確認された古墳時代後期の遺構である。

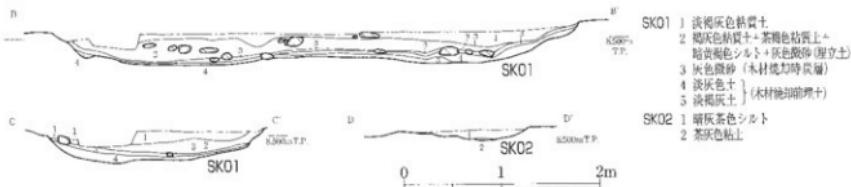
ピット ピットはすべて直徑あるいは長径10～70cm、深さ10～60cmである。ピットの中にはかなり深く立派なものや小さく浅いものなどが混在していたが、掘立柱建物を構成するようにはまとまらなかった。S P01からは鎌倉時代頃の土器片が出土したが、他にはわずかに土師器の小片が出土したピットが数基あるのみである。



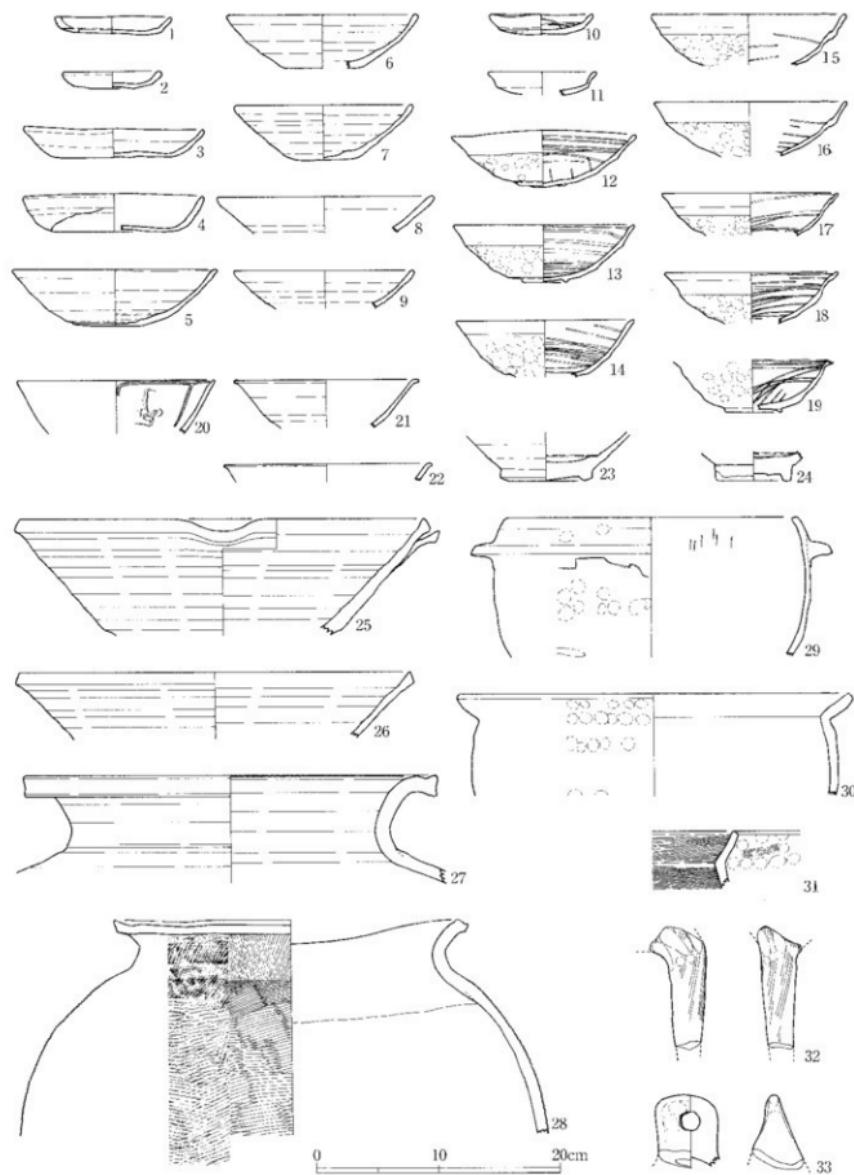
第22図 第19次調査井戸 S E01断面図 (S = 1 : 20)

柱建物S B01の柱穴を覆っていたが、炭片を含む灰色微砂を取り除いた状態では柱穴が検出され、柱穴を避けるように土坑が配置されていたことが判る。従って土坑と建物は同時に併存しており、建物の内部に土坑が掘られていたと推定できる。建物を解体する際に不要となった廃材を土坑上部で焼却し、不要の土器類とともに埋め立てたと考えられる。

柱建物S B01の柱穴を覆っていたが、炭片を含む灰色微砂を取り除いた状態では柱穴が検出され、柱穴を避けるように土坑が配置されていたことが判る。従って土坑と建物は同時に併存しており、建物の内部に土坑が掘られていたと推定できる。建物を解体する際に不要となった廃材を土坑上部で焼却し、不要の土器類とともに埋め立てたと考えられる。



第23図 第19次調査土坑 SK01・02断面図 (S = 1 : 20)



第24図 第19次調査土坑SK01上層（木片焼却後）出土遺物実測図（S=1:4）

出土遺物

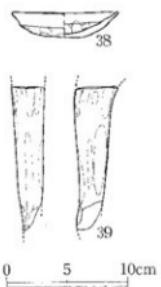
遺物は整理箱で約2箱出土したが、その大半は土坑SK01から出土したものである。その他に土坑SK02や掘立柱建物SB01の柱穴、ピット、遺物包含層から遺物が出土したが、ここでは図化し得た土坑SK01と掘立柱建物SB01の柱穴から出土した遺物について報告する。

1・2は土師器の小皿、3・4は皿で、4には粘土板の接合痕が明瞭に残る。5～9は須恵器碗で、8は他より口径が大きい。10・11は瓦器の小皿、12～19は碗で、11を除き暗文が施されているがすべて内面のみで、小皿は疎らな一連の渦巻き状、碗の上半は疎らな一連の渦巻き状、見込みは平行線状である。20は青磁碗で、釉色は暗灰緑色、内面に劃花文がある。21～24は白磁で、22を除き外面上にはヘラケズリが明瞭に観察できる。釉色は21が淡緑白色、22は白緑色で貫入が著しい。23は淡緑白色、24は淡緑色である。内面見込みは23には1条凹線が巡り、24には蛇の目軸ハギがある。25・26は須恵器鉢で、25は片口の部分が残る。27・28は須恵器甕で、27はタタキを丁寧にナデ消すが、28は頸部のみ緩くナデ消すのみである。また28は焼け歪みが著しい。29は土師器羽釜で、鈴の接合痕が明瞭に残る。また外側からは確認できなかったが指頭圧痕が横方向に連続する部分は粘土紐の接合痕の可能性が高い。30・31は土師器甕で、29同様指頭圧痕が横方向に連続する部分は粘土紐の接合痕の可能性が高い。31はハケが丁寧である。32は脚付釜で、本体は遺存しないが強いナデで接合されていた。33は土師質の銷壺で、釣り手部分のみで磨滅が著しい。これらには数点12世紀後半頃と考えられるもののが含まれ、青磁・白磁はその傾向が強いようであるが、大勢は13世紀初頭から前半頃と考えられる。したがって掘立柱建物SB01が解体されて土坑SK01が埋め立てられた時期はその頃と判断される。尚土器には二次焼成を受けたものが多く含まれており、瓦器の中には表面に吸着していた炭素が消滅して一見土師器のように見えるものもあった。これらは掘立柱建物SB01解体時に土坑SK01上で捨てた部材を焼却した際の影響と考えられる。34・35は土師器小皿である。36は瓦器小皿で、37には粘土板の接合痕が明瞭に残る。37は堀で、外側は格子タタキが著しいが内面は丁寧にナデ消されている。図化できた遺物は少ないが、それ以外の遺物を見ても掘立柱建物SB01解体の前後では明確な時期差は確認できなかった。

38は瓦器小皿で、暗文は施されず見込みに星状にナデしている。39は脚付釜で、脚下端は強い指頭圧痕でまとめる。



第25図 第19次調査土坑
SK01下層(木片焼却前)
出土遺物実測図
(S = 1 : 4)



第26図 第19次調査
掘立柱建物SB01
柱穴出土遺物実測図
(S = 1 : 4)

小結

今回の調査で検出した土坑SK01を伴う掘立柱建物SB01は鎌倉時代頃のもので、街路部分の第10・3・4・16次調査の成果と合わせると、桁行6間(13.0m)×梁間4間以上(8.0m以上)の比較的大きな建物となる。また調査区の北側至近地の第12次調査では建物の復元には至らなかったが同じ頃の柱穴を検出しておらず、複数の掘立柱建物が建てられていた可能性が高い。また掘立柱建物内に土坑を伴う事例では、一般的にはその土坑を含む区画は廐で、土坑の用途は牛馬の排泄物と藁屑等で堆肥を造るためのものであると考えられている。これらの土坑は柱間1間×1間もしくは2間×1間の物が多く、今回の土坑も一部分が調査区外に統くもののほぼ柱間2間×1間の規模である。従って今回の事例も廐の可能性がある。しかし土坑は建物解体時に不要材を土坑上部で焼却後に埋め立てたと考えられるため、炭の分布より下は掘立柱建物存続時の堆積土の筈であるが、それらは堆肥を造るためにしては有機物を濃密に含んでいたとは思われない精良な土層である。ただし土層の残留脂肪酸分析は実施していないため、牛馬由來の有機物の有無は不明である。よって土層が精良なことで直ちに廐の可能性を否定する訳ではないが、一株の疑問点が残ることも事実である。今後の調査事例の増加と残留脂肪酸分析の結果に期待したい。

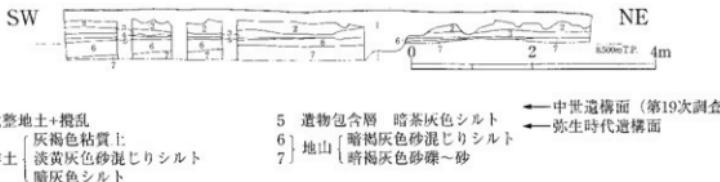
土坑SK02は耕作溝を除けば第1～3次調査以来の古墳時代後期の遺構である。周辺では街路部分の調査で耕作溝が確認されているため当時一帯は耕作地であったと推定されているが、少量ではあるが遺構が存在していたことが明らかとなった。SK02の性格は定かではないが、周辺での今後の確認事例の増加によって一帯の土地利用の有り方が耕作地のみであったかどうか判明していくことになろう。

10. 第20次調査

コンクリート杭の打設によって破壊される部分の発掘調査で、平成11年度に都市計画街路予定地で実施した第10～3次調査の北東隣、第19次調査の南東隣に位置する。敷地の北西半分はほぼ全面を掘削し、南東半分は幅約70cmのトレンチを外周に2本、内部に2本設定した。ピットを4基検出した。また遺構面の基盤層からは弥生時代前期と思われる土器片が少量出土した。

ピット ピットはすべて直径あるいは長径20cm、深さ5～20cmの小規模なもので、掘立柱建物を構成するようにまとまらなかった。遺物は出土しなかった。

小結 今回の調査ではピット4基を検出したのみで、北西隣の第19次調査と比較して軽して遺構密度が希薄になった。また少量であるが遺構面の基盤層から弥生時代前期の土器片が



第27図 第20次調査土層図 (S = 1 : 80)

出土したことは、松野遺跡内での弥生時代前期の状況を考える上で重要で、隣接する第10・13次調査では下層の遺構面で弥生前期の可能性がある土坑を1基検出していることからも、今回の調査区周辺では弥生前期の遺構面は下層に存在していることになる。今回遺構は検出されなかったが、周辺では遺構が検出される可能性が考えられる。

11. 第21次調査

基本層序

基本層序は近代から現代にかけての整地、盛土層の下層は旧耕土及び床土層であり、その下層が弥生時代から中世の遺物包含層である暗灰褐色砂質シルト（6層）である。この下層が遺構面を構成する暗黄灰色シルト（9層）である。

尚、今回の調査では工事の掘削深度が、設計G.L.-100cmであり、これに伴い発掘調査もその深さまで実施している。

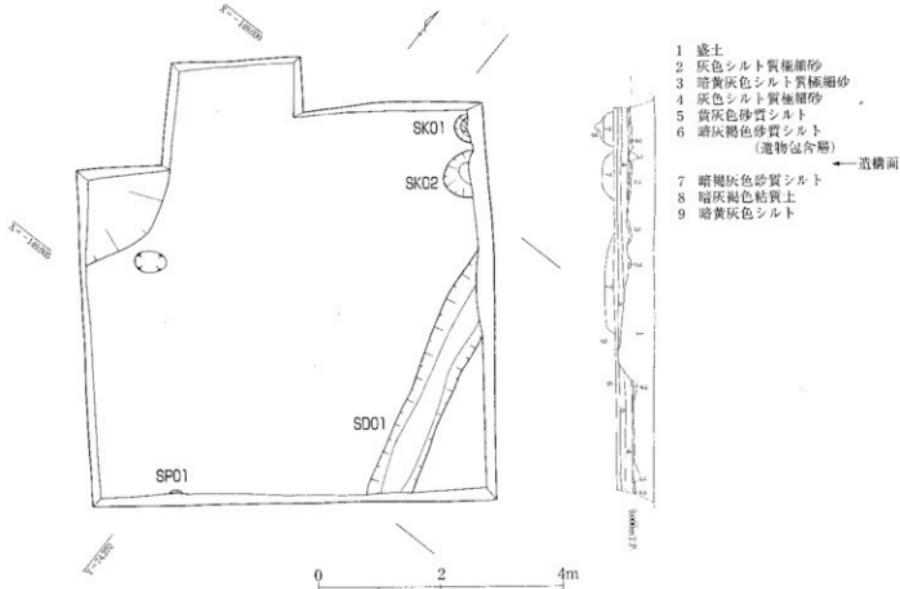
検出遺構

遺構は主に、調査区の東側で検出された。検出された遺構は溝1条、土坑2基、ピット1基である。

S D01 幅64~80cm、深さ10cm前後の南北方向の溝である。埋土は暗灰褐色砂質シルトである。

出土遺物はなかった。

S K01 幅58cmを検出したが東側は調査区外へと続くため、全体の規模は不明である。深さは32cmで、埋土は2層に分かれ、上層が暗灰褐色砂質シルト、下層は砂混りの暗灰褐色粘質土



第28図 第21次調査平面図・土層図 (S = 1:80)

である。出土遺物はなかった。

S K02 幅82cmを検出したがS K01と同様、東側は調査区外へと続くため、全体の規模は不明である。深さ20cmで、埋土は暗灰褐色砂質シルトである。出土遺物はなかった。

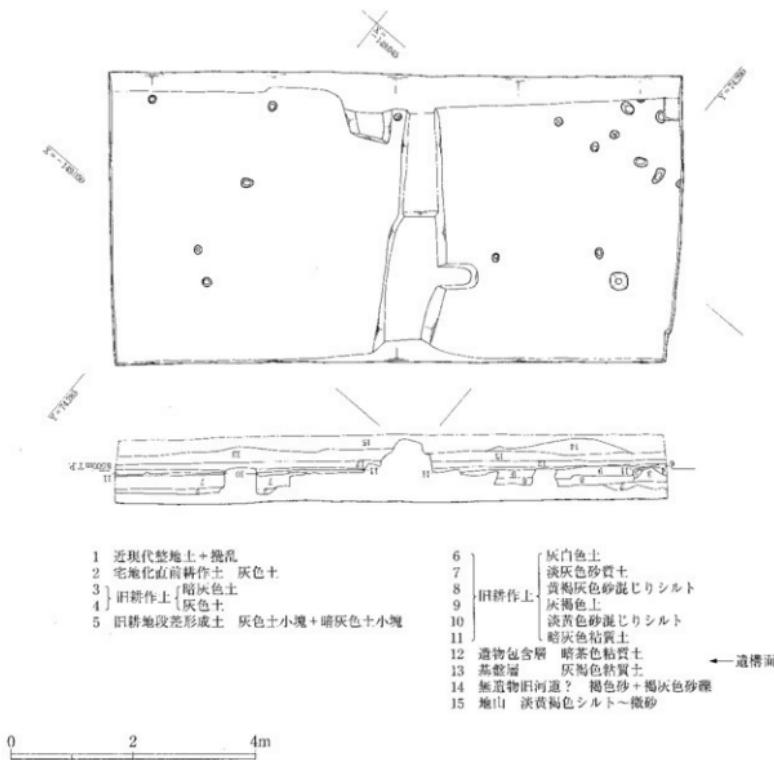
S P01 幅38cmを検出したが南側は調査区外へと続くため、全体の規模は不明である。深さは17cmで、埋土は暗黄灰色粘質土である。弥生土器片が1点出土している。

この他、遺構面上で弥生土器片がまとめて出土したが、遺構は検出されていない。

小結 今回の調査は、これまでの調査地点の空白部を埋めるものとなった。

北側隣接地で平成11年度に実施された第10-3次調査では東側を中心に遺構が確認されており、東側が安定した土壤で遺構が存在し、西側は湿地状に落ちていく状況が、本調査地内でも確認された。

今回確認された遺構については、S P01以外は出土遺物はなく詳細は不明である。また遺構面上から出土した弥生土器片は磨滅した小片ではあるが、平成11年度の第10-1次調



第29図 第22次調査平面図・土層図 (S = 1 : 80)

査では土坑内から前期の完形の甕が出土しており、遺構面上からも前期の土器が出土していて、今回出土した土器とも胎土等が類似していることから前期のものであると考えられる。近隣に弥生時代前期の遺構が存在するものと考えられる。

12. 第22次調査

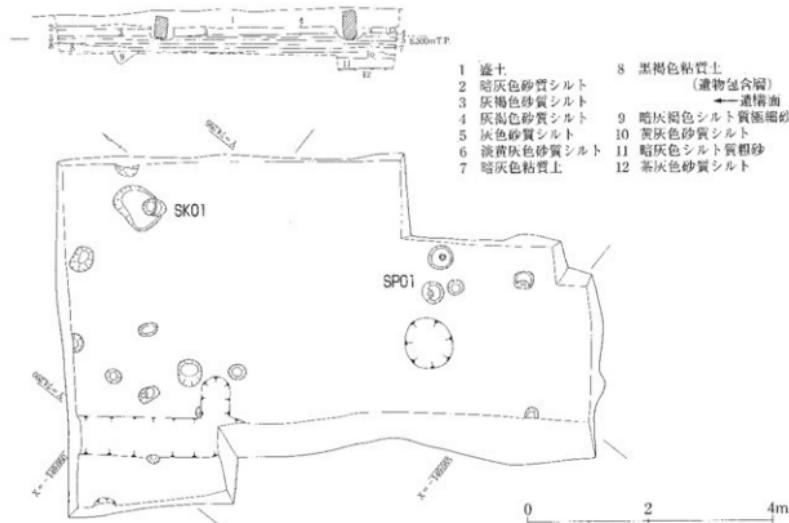
敷地北東辺を除いてほぼ全面の発掘調査で、平成11年度に都市計画街路予定地で実施した第10-12次調査の南西隣に位置する。ピットを18基検出した。また遺構面の基盤層から弥生時代前期の土器片が出土した。

ピット ピットはすべて直徑あるいは長径10~30cm、深さ5~20cmの小規模なもので、掘立柱建物を構成するようにまとまらなかった。遺物は出土しなかったが上層の遺物包含層からは弥生土器しか出土せず、遺構面の基盤層からは弥生時代前期と思われる土器片が1点出土したため、ピットの時期も弥生時代の中で捉えられる。

小結 今回の調査ではピット18基を検出したのみで、それも掘立柱建物の復元には至らなかつた。しかし第20次調査同様に少量ではあるが遺構面の基盤層から弥生時代前期の土器片が出土した。周辺を調査する際には弥生前期の遺構が下層の遺構面で検出される可能性が考えられよう。

13. 第23次調査

基本層序 基本層序は近代から現代にかけての整地、盛土層の下層は旧耕土及び床土層であり、そ



第30図 第23次調査平面図・土層図 (S = 1:80)

の下層が弥生時代から中世の遺物包含層である黒褐色砂質シルト（8層）である。この下層が遺構面を構成する黄灰色砂質シルト（10層）である。

検出遺構

検出された遺構は、土坑1基、ピット16基である。

S K01

長径80cm、短径60cm、検出面からの深さ10cmの土坑である。南東隅をピットに切られている。埋土は暗茶褐色砂質シルトである。出土遺物はなかった。

ピット

今回の調査で検出されたピットは径20~40cm、深さは検出面から10~25cmである。建物を構成するものであるかは不明である。S P01から土師器片1点が出土した他は、遺物の出土は確認されなかった。

小結

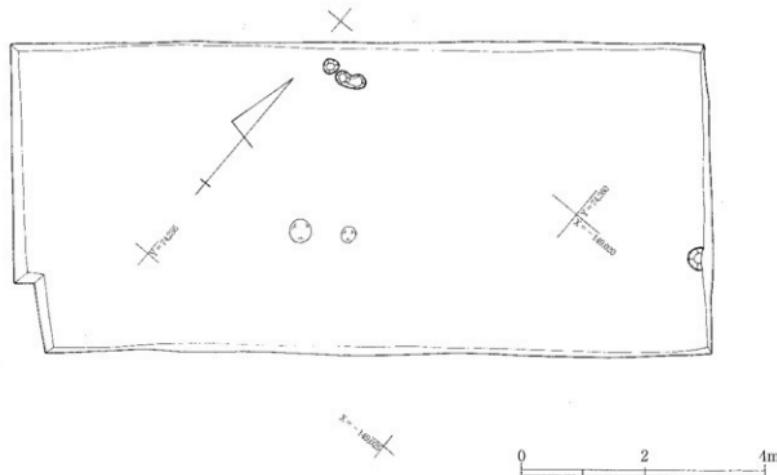
今回確認された遺構については、出土遺物はなく詳細は不明である。遺物包含層中から出土した遺物も微細で、量もごくわずかであった。

南側に近接する古墳時代の遺構群との関連は今回の調査では確認することはできなかった。古墳時代の遺物は遺物包含層中から須恵器の壊蓋片1点が出土したのみである。本調査区の南側に隣接する区画街路部分の調査においても古墳時代の遺構は確認されておらず古墳時代の遺構群の広がりは不明であると言わざるを得ない。

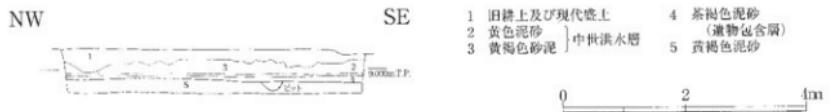
14. 第25次調査

設計図上基礎杭が多く、建物の形状に全面掘削をおこなうこととなった。層序は旧耕土及び現代盛土、黄色泥砂、黄褐色砂泥（中世洪水砂）、茶褐色泥砂（古墳時代包含層）、黄褐色泥砂（古墳時代遺構面）である。

淡灰色泥砂、黄灰色砂泥層から微量の中世の土師器・須恵器が出土した。古墳時代包含層からも微量の古墳時代の土師器・須恵器が出土した。



第31図 第25次調査平面図 (S = 1 : 80)



第32図 第25次調査土層図 (S = 1 : 80)

検出遺構 東西方向の断面では、茶褐色泥砂に切り込んだ耕作痕が観察され、中世洪水砂の堆積後に耕作地として利用されていたことが判る。耕作痕の方向は現在の町割りとほぼ同様の南北方向である。

古墳時代遺構面では、調査区西辺で直径0.3m・深さ0.2mのピットと北辺中央部で茶褐色泥砂よりやや濃い色の土がブロック状に入ったピット状の遺構が検出された。径0.2m・深さ0.3m程の規模である。

小結 僅かな面積の調査区であるが、比較的良好に遺構面が遺存していた。しかし遺構・遺物ともほとんどなく、時期や調査対象地の性格などを明確にすることはできなかった。

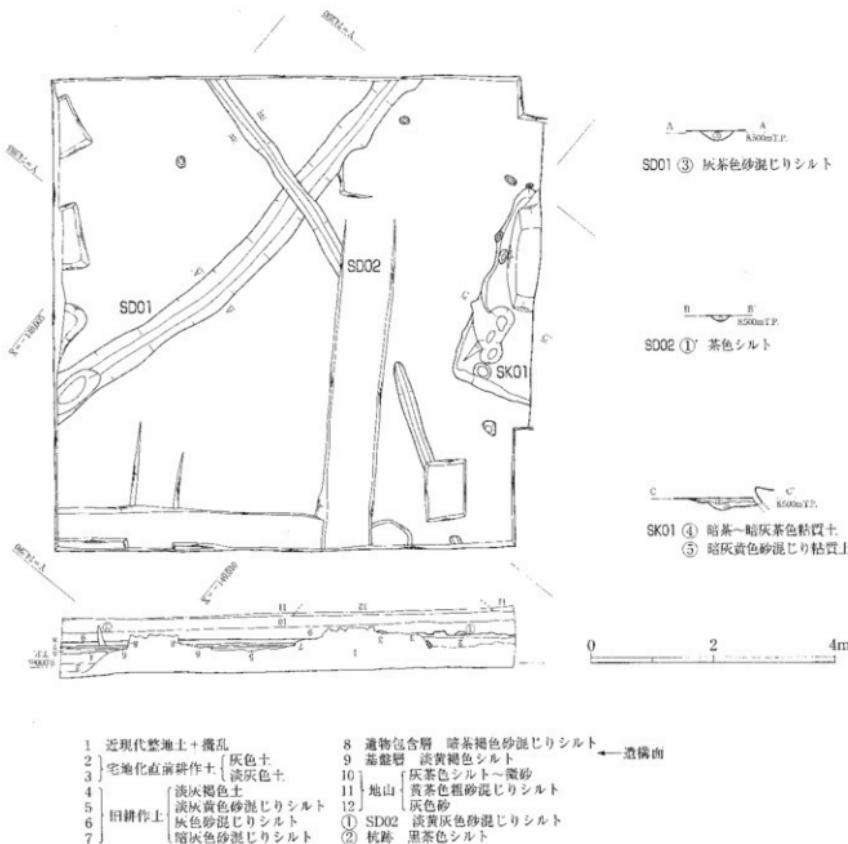
15. 第26次調査

敷地ほぼ全面の発掘調査で、街路部分で平成11年度に実施した第10-3次調査の南隣、平成12年度の16-1次調査の西隣に位置する。溝2条、土坑1基の他、ピットを5基検出した。また遺構面の基盤層から弥生時代前期と思われる土器片が少量出土した。

S D01 調査区中央北寄で検出した東西方向の溝で、西半はわずかに北側にカーブしている。長さ8.3m分を検出したが東西両側は調査区外に続くため全長は不明である。幅0.4~0.6m、深さは約15cmであるが検出した北端部分は少し窪んで深くなっているので深さ約25cmになる。断面は椀状、埋土は灰茶色沙混じりシルトである。弥生土器片が少量出土した。それらの内で唯一図化できたものは壺の底部である。土器表面の遺存状況が悪いために調整は不明であるが、逆にそのために胎土中の砂粒の鉱物的観察が容易となっている。砂粒は長石・石英が主であるが、粒子は幾分小さいもののそれらと同量程度の角閃石を主とする黒色鉱物が多く見られる。中には両者で構成される小礫粒も數片含まれている。黒色鉱物が多いために胎土の色調も茶褐色になっている。六甲山系南麓一帯ではこのような色調の土器はあまり見られず、有色鉱物が多く所謂チョコレート色をした土器の産地は畿内では大阪府の生駒山西麓が著名である。本例を直ちに生駒山西麓と決ることはできないが、黒色鉱物を多く含む地域の粘土と砂で作られた搬入品であることは確実である。

S D02 調査区の中央で検出した溝で、北側から南西方向に緩く弧状に延びている。一部が擾乱で破壊されたり削平されて消滅したりしているが、調査区を貫通する状況で確認した。長さ8.8m分を検出したが全長は不明である。幅0.2~0.3m、深さ5~10cmで断面は皿状から椀状、埋土は茶色シルトである。弥生土器小片が1点出土した。

S K01 調査区の南東辺中央で検出した土坑である。南東側は調査区外に続くが現状では一辺3.4mの隅丸方形である。底面は不整形で凹凸が著しく、最深部の深さは約20cmである。埋土は上から順に暗灰茶色粘質土、暗灰黄色粘質土である。遺物は古墳時代の土師器片と須恵器片が出土したが、土坑最上部には土師器の長胴甕が押し潰れた状態で出土した。須

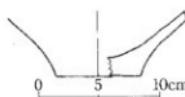


第33図 第26次調査平面図・土層図・遺構断面図 (S = 1 : 80)

恵器は甕の同部分の小片である。豪族居館が確認された第1・2次調査地点より北側の街区では、古墳時代後期頃の遺構は都市計画街路予定地で平成11年度に実施した第10-11・20次調査地点の2ヶ所で耕作溝が検出されているのみであった。しかし詳細な時期比定は難しいもののこの土坑も古墳時代後期と推定できる。

ピット ピットはすべて直径あるいは長径10~20cm、深さ10~15cmで、掘立柱建物を構成するようにはまとまらなかった。遺物は出土しなかった。

小結 今回の調査では耕作溝を除くと第19次調査に統いて古墳時代

第34図 第26次調査
溝 S D01出土遺物
実測図 (S = 1 : 4)

後期の遺構が検出された。内容は底面が不整な土坑1基ではあるが、この他にも周辺を調査する際には同時期の遺構の検出が期待される。溝S-D02の北側延長部分は街路部分の第10—3次調査では検出されていない。あまり深い溝ではなかったために削平されて消滅していた可能性が高い。また第20・22次両調査同様に遺構面の基盤層から弥生時代前期の土器片が出土した。出土量自体は少量であったが、周辺調査の際には第10—3次調査の様に弥生前期の遺構が下層の遺構面で検出される可能性も考えられよう。

16. 第29次調査

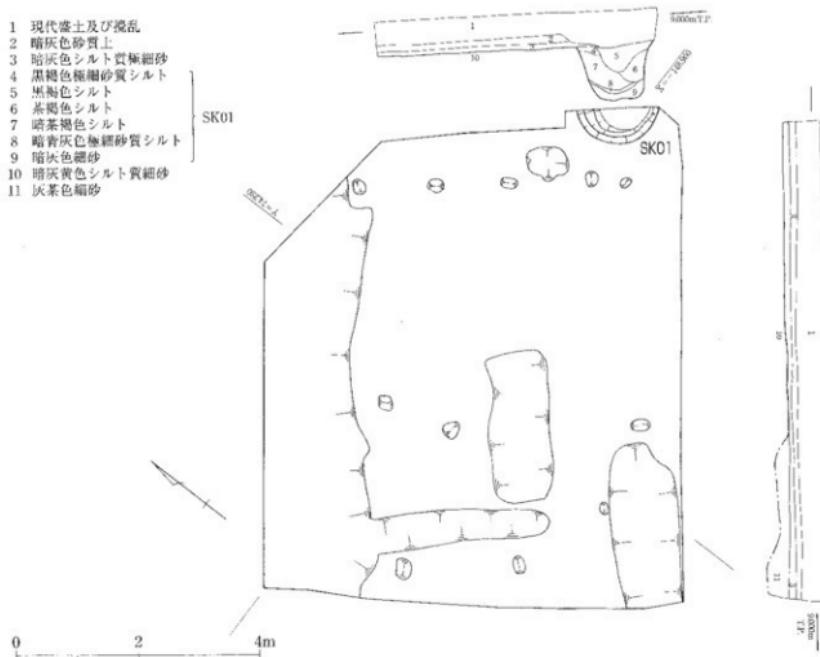
調査地は街区の北西隅にあたる。換地後に個人住宅の建設に伴うもので、建物面積約58m²について調査を実施した。調査の方法は、重機で盛土及び擾乱土を除去し掘削を行った。そして、遺物包含層を人力により掘削を行い、遺構面の検出と遺構検出のための精査作業を実施した。

基本層序

大別して上から近現代の整地土、耕作土、床土、旧耕作土、遺物包含層となる黒灰色シルト、そして遺構面である黄灰褐色砂質シルトとなる。現況地盤から遺構面までの深さは約60cmである。

- 1 現代盛土及び擾乱
- 2 暗灰色砂質土
- 3 暗灰色シルト質極細砂
- 4 黑褐色極細砂質シルト
- 5 黑褐色シルト
- 6 茶褐色シルト
- 7 淡茶褐色シルト
- 8 暗青灰色極細砂質シルト
- 9 暗灰色細砂
- 10 暗灰黄色シルト質細砂
- 11 深茶色細砂

SK01



第35図 第29次調査平面図・土層図 (S = 1:80)

調査の結果、従前の建物により調査区北側の一部が損壊を受けていたものの、土坑1基を検出した。遺物については、遺物包含層からの出土は皆無であった。

S K01 調査区の南東隅で検出した土坑で、検出径1.3m、深さ0.8mで断面形状は逆台形である。今回西半分しか検出できず東半分が調査区外になるため全体規模については不明である。埋土は大別して3層に分かれ、上から順に黒褐色シルト、暗茶褐色シルト、暗灰色細砂の順でそれぞれ弥生時代前期頃の遺物が少量出土した。この土坑は、全体を検出していないので不明な点があるが、円形で逆台形の堀込みをもつ井戸と考えられる。

小結 今回の調査では、遺構面の遺存状態が良くなかったが、土坑1基検出した。周辺の調査で時期の判る遺構としては、調査区南側の街区の調査で中世頃の掘立柱建物を検出しているが、この周辺で弥生時代前期の遺構を検出したのは初めてである。調査地は遺跡の範囲の北側にあたるが、この調査の結果さらに遺跡が北側に広がる可能性も考えられる。

17. 第30次調査

基本層序 盛土直下には、耕作土、床土、旧耕作土、遺物包含層となる黒褐色小礫混じりシルトが堆積している。この遺物包含層下の暗灰褐色細砂の上面が第1遺構面となる。そして下層の暗黄褐色細砂が第2遺構面となる。調査区南側は、従前の建物の基礎が残り、かなり損壊を受けていた。

第1遺構面 現況地盤から0.7mで検出された遺構面で、十数基のピットが確認された。この遺構面の上層の遺物包含層からは、弥生土器と考えられる土器片が少量出土している。

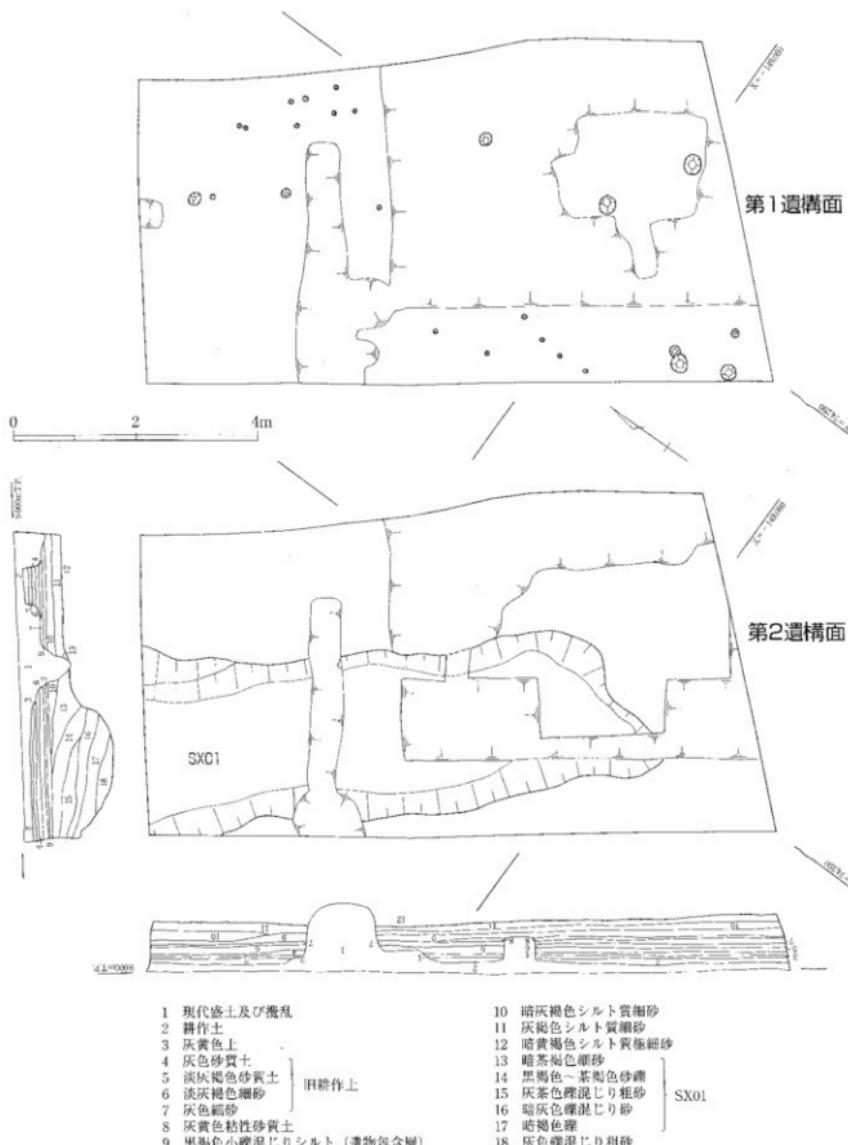
ピットは径8cm前後のものと径20~25cmのものがあり、深さは10~20cmであるが、なかには深さ45cmに達するものもある。これらのピットの断面観察から判断して杭状のものと思われる。ただピット1基は、柱痕らしきものが観察できたものがある。ピットからの出土遺物がなく時期については判らない。これらのピットはまとまりがなく、建物を構成するものではないと考えられる。

第2遺構面 現況地盤から0.8~0.9mで検出された遺構面で、北から南に流れる土石流S X01が検出された。この遺構は幅2.6m、深さ約80cmを測る。埋土は粗砂と小礫で構成されていて、磨滅した弥生土器と縄文土器が数点出土した。

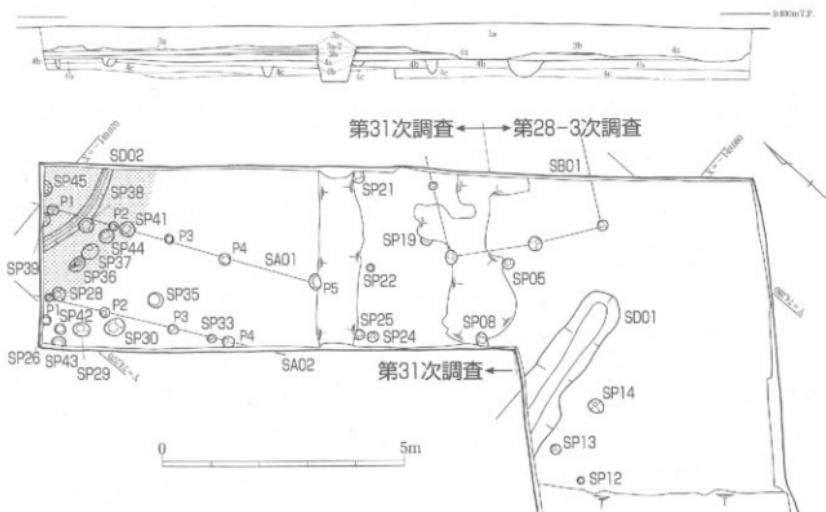
小結 今回の調査区は、古墳時代後期の豪族居館と考えられる遺構が確認された北側にあたるが、その時期に該当する遺構・遺物とも確認されなかった。むしろ、弥生土器を含む遺物包含層下で遺構を検出していることから、この時期に該当する遺構が存在する地域と考えられる。

18. 第31次調査

松野通4丁目北半街区の南隅付近で実施した発掘調査で、古墳時代後期の豪族居宅と推定される大型建物群が検出された第1・2次調査地点とは市道を挟んで北側に隣接している。南隣では街路拡幅部分の第28~3次調査を同時に実施した。遺構面は2面確認され、第1遺構面では中世の耕作痕が、第2遺構面では弥生時代末から古墳時代前期と古墳時代後期の遺構が検出された。現地表および2面の遺構面の標高は以下の通りである。



第36図 第30次調査平面図・土層図 (S = 1 : 80)



la 現表土・盛土
 (2a) 宅地化直前耕作土
 3a 灰色砂混じりシルト 旧耕作土
 3a-2 オリーブ灰色砂混じりシルト 床土
 3b 灰色シルト質砂 淋水層
 4a 黒色砂混じりシルト
 4b 黃褐色シルト質砂
 4c にぶい黄色シルト質砂

← 第1遺構面（中世）
 ← 第2遺構面（古墳時代～弥生時代）

第377図 第31次調査平面図・土層図 (S = 1 : 100)

現地表 (1a層上面) : 約9.2m

第1遺構面 (4a層下面) : 約8.5m

第2遺構面 (4a層下面) : 約8.5m

第1遺構面 耕作痕 洪水砂である3c層に覆われる遺構面。耕作痕が検出された。

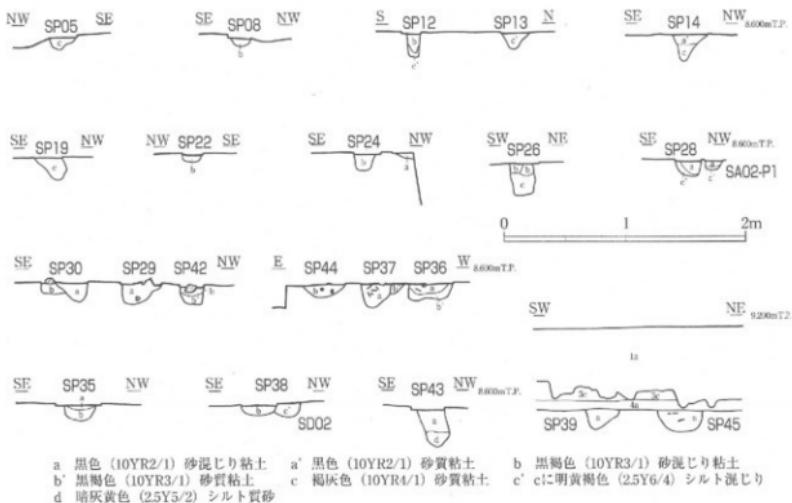
耕作痕 調査区西側の街路 (=条里) 方向は北から西に約39°振るが、これに平行する溝多数が検出された。鎌溝等の耕作痕と考えられ、3c層の出土遺物から中世の畠と推測される。

第2遺構面 古墳時代後期・前期の遺物を主体に含む4a層下面で検出。古墳時代前期の土器溜まり・溝・柱穴、時期不明の掘立柱建物・柱列・柱穴等が検出された。

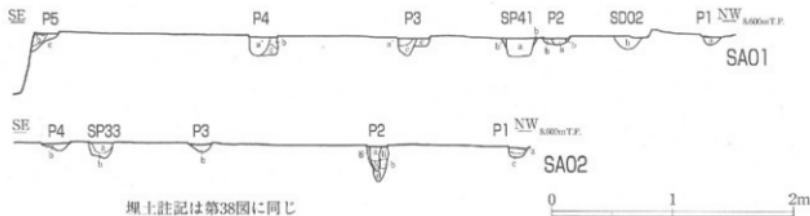
ピット 40基程のピットが検出されている。そのうち遺構のまとまりとして把握できたものに掘立柱列SA01・02と掘立柱建物SB01がある。柱穴から出土した遺物には古墳時代前期のものと後期のものがあり、少なくとも2時期の遺構の存在を確認できるが、埋土はとともに4a層に近い黒褐色がほとんどで区別できない。

SA01 プラン円形の柱列で構成される遺構。柱穴5本が確認され、調査区の北へさらに続く可能性がある。この柱列は北から西へ約26°ほど振った方向にのび、第1・2次調査で確認されているSA03の西辺の方向、北から西に約29°に近い。

SA02 SA01とはほぼ平行 (北から西へ約27°振る) するプラン円形の柱列で構成される遺構。柱穴4本が確認され、調査区の北および南へさらに続く可能性がある。

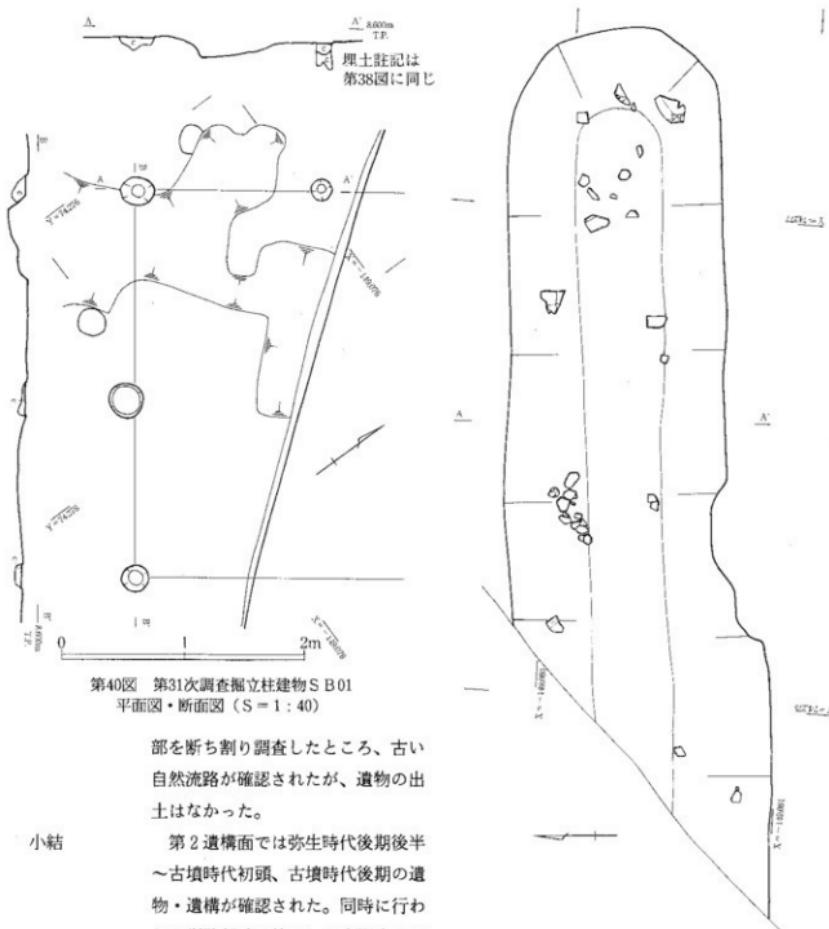


第38図 第31次調査ピット断面図 (S = 1 : 40)



第39図 第31次調査掘立柱列 S A01・02断面図 (S = 1 : 40)

- S B01 南北2間×東西1間以上の掘立柱建物。北から西へ53°振った方向に主軸方向をとる。その東が調査区の外にのびるため東西の規模については確定できない。柱穴からの出土遺物は土器の小片のみで、この建物の時期は確定できない。
- S D01 幅約1.0m・遺構確認面からの深さ約40cmをはかる溝状の遺構。東から北へ5°振った方向にのびる。埋土から古墳時代初頭の土器が出土している。
- S D02 幅約25cm・遺構確認面からの深さ約15cmをはかる溝状の遺構。東西方向にゆるやかな弧をえがいてのびる。埋土から古墳時代初頭の土器が出土している。
- S X01 4a層で弥生時代末から古墳時代前期の土器が比較的集中して出土した部分。調査区北隅付近で確認された。この土器群の下位で S A01・S A02・S D02やピットなどの遺構が検出された。
- 4b・4c層 第2遺構面の下層にあたる洪水砂層である4c層を掘削した結果、弥生土器と晩期の縄文土器が少量出土した。磨滅しており、洪水時に混入したものと推察される。また更に一

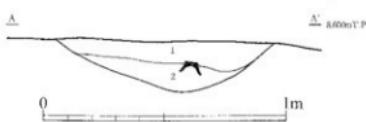


第40図 第31次調査掘立柱建物S B01
平面図・断面図 (S = 1 : 40)

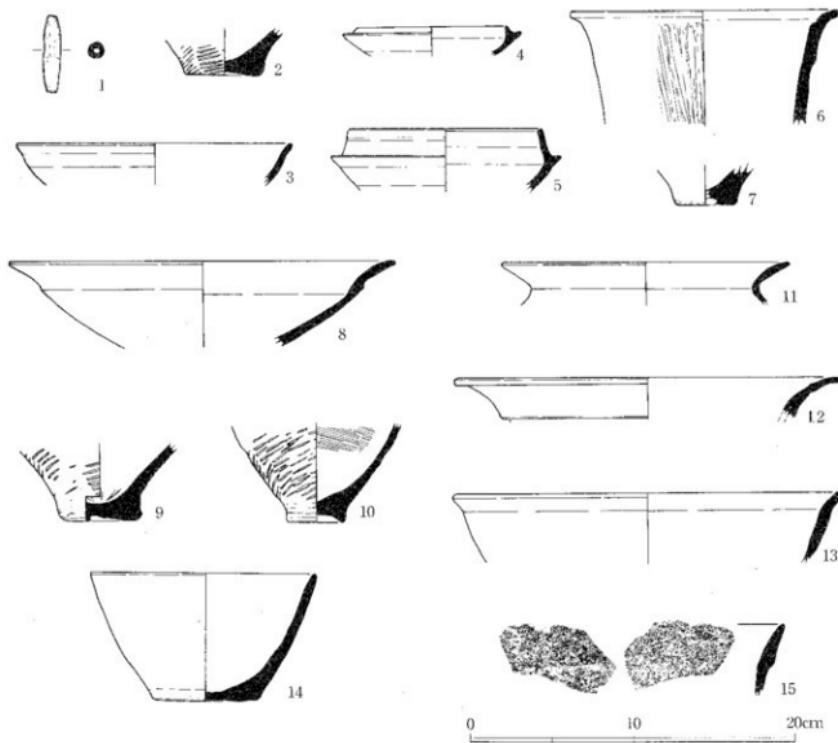
部を断ち割り調査したところ、古い自然流路が確認されたが、遺物の出土はなかった。

小結

第2遺構面では弥生時代後期後半～古墳時代初頭、古墳時代後期の遺物・遺構が確認された。同時に行われた街路部分の第28～3次調査では弥生時代中期の遺構も同一面で確認されている。これら三時期の遺構の埋土は類似していて特徴からは三者を弁別できない。遺物包含層から出土する遺物のうち主体となるのは先述のとおり弥生時代後期後半～古墳時代初頭のもので、時期の判断できる遺構もこの時期のものが多い。



第41図 第31次調査溝S D01
平面図・断面図 (S = 1 : 20)



1・2 1層、3 3層、4~7 4a層、8・9 SD01、10 SD02、11~13 SX01、14 4b層、15 4c層
(1・2・7~13 土師器、3~5 猶慮器、6~14 弥生土器、15 織文土器)

第42図 第31次調査出土遺物実測図 (S = 1 : 3)

第31次調査地点は豪族居宅と推定される大型建物群が確認された第1・2次調査地点の市道をはさんで北側隣接地だが、それとの関連で注目される古墳時代後期の遺構・遺物は目立ったものが確認されていない。遺物包含層から出土した同時期の遺物は須恵器片が少量とごく少なく、遺構についても時期の確定できるものはなかった。

ただし、時期の確定はできなかったが、掘立柱列 S A01・02の存在が注意される。両者は第1・2次調査で検出された柱列(=樋ないし塀)にほぼ平行する。時期判定に耐える遺物の出土がなく、埋土からの時期判定もできず、規模等も確認されているものと比較にならない点など不安はあるが、この周辺では、弥生時代後半から古墳時代初頭にかけての遺構、特に溝等はSD01のように方位方向にはほぼ合致するものが多いという傾向がある。これと異なる方向であり、居宅関連の遺構とこの柱列の方向が一致することは、特に居宅の区画ということを勘案した場合、注意すべき遺構だと思われる。

第IV章 水笠遺跡の調査

第1節 調査の概要

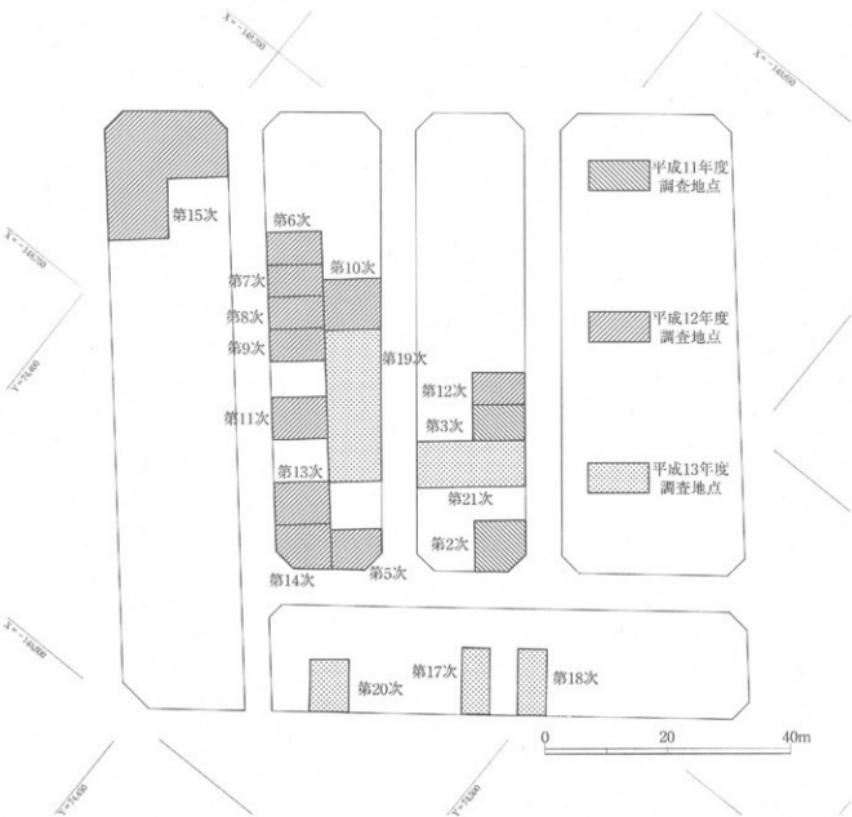
平成13年度末現在で計18件となる個人住宅等の新築に伴う発掘調査であるが、松野遺跡同様に住宅の事業主は換地を受けた方々で、先の震災で被災された方々である。従ってやはり同様に着工予定にできるだけ影響を及ぼさない様に迅速な対応と調査が求められた。そのため個々の調査地点の配置には何の法則性もなく、偶然にほぼ同時期に隣接した敷地で新築計画が出され、要調査となったものの複数軒分の敷地を同時に調査した事例は存在したが、要調査場所を順次調査していくに過ぎない。

個々の個人住宅の新築計画が出された後、教育委員会文化財課では当該建物の工事が埋蔵文化財に影響を与えるかどうか内容を検討し、発掘調査の要不を判断している。工事掘削深度が浅いため埋蔵文化財に影響を及ぼさない事例には調査を実施していないが、水笠遺跡は松野遺跡以上に遺跡の埋没深度が浅く、事例の多くは調査の対象となった。また要調査と判断された事例でも埋蔵文化財への影響の程度により、影響が大きく敷地のほぼ全面に調査を実施したもの、影響が及ばない部分があるため敷地の一部を除いて調査を実施したもの、影響が一部に限られるため基礎や地中梁等の部分にのみ調査を実施したものなどがあった。また調査は実施したものの、掘削深度が中程度のため工事の際にもこれ以上埋蔵文化財に影響を与えない事例では、さらに下方に埋蔵文化財が存在していても調査を終了したものもあった。しかし実際の現地調査の際には工事が埋蔵文化財に影響を与える場合と、調査時の安全の確保の二点を根拠としたため、個々の工事計画により対応は一定していない。またその上に調査面積も換地された土地の大小と、その中の工事の影響範囲に左右され比較的小規模なものが多く、テナントビルや共同住宅を除くと平均約40m²、最大でも約65m²、最小は約20m²であった。

第2節 基本層序

基本層序

各調査毎の層序の具体例は添付の土層図を参照されたいが、大別して上から順に近現代の整地土、都市化直前の耕作土、旧耕作土、遺物包含層、地山と続く。現地調査時には遺物包含層と地山を区別したが、遺物包含層から地山へ徐々に変化して層界の不明な部分もあり、遺物包含層は地山の上部が土壤化したものと判断される。したがって本来の遺構面は遺物包含層の上面と考えられるが、ほとんどの遺構は基盤層上面まで掘り下げなければ確認できなかった。それらの中で唯一第14次調査で検出した井戸1基のみは明らかに遺物包含層の上面で検出した。



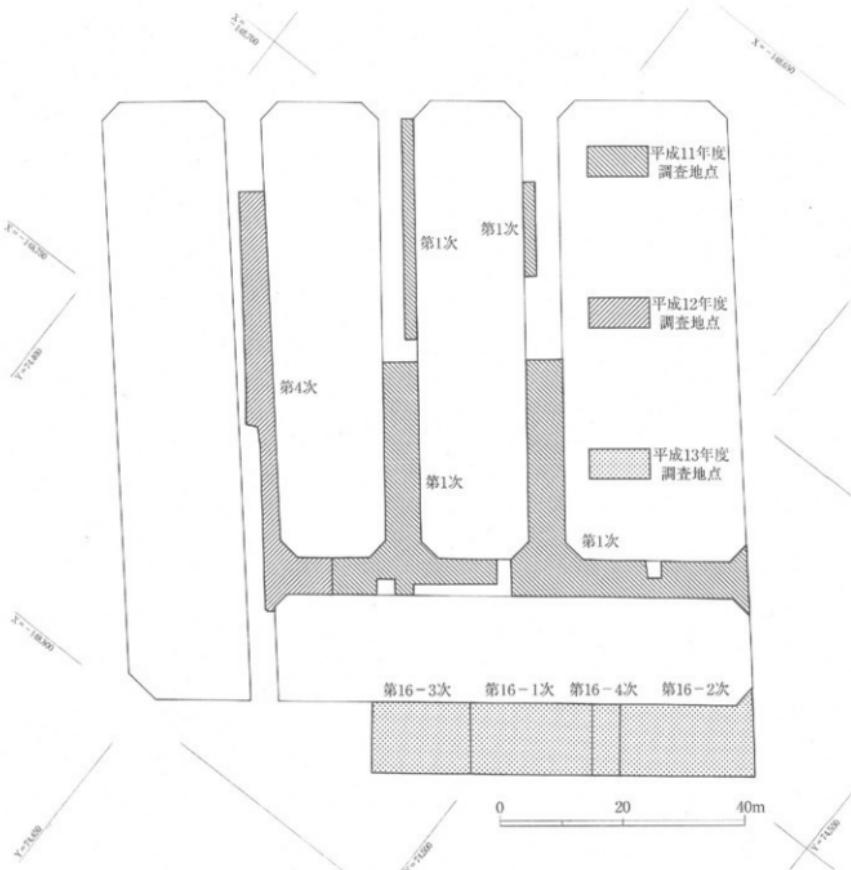
第43図 調査地点位置図 (S = 1 : 800)

第3節 各調査成果

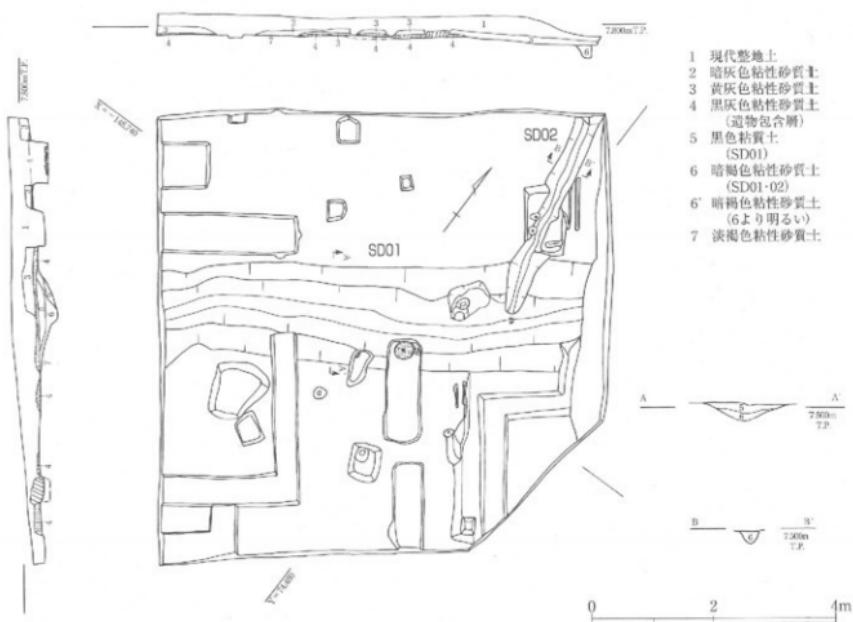
1. 第2次調査

調査前の状況は、家屋が除却された更地になっており、現地表高は7.8m前後である。この付近は、区画整理の道路面より遺物包含層や遺構検出面の方が高い位置にあるため、建物建築に伴う整地作業で、それらが損壊されるおそれがあり、建築予定部分の全面、約53m²の発掘調査を行った。

基本層序 瓦礫、コンクリートを主体とする整地土層の下に耕作土（暗灰色粘性砂質土）、中世頃の耕作土、床土（黄灰色粘性砂質土）が部分的に残っており、その下に弥生時代の土器を



第44図 街路予定地調査地点位置図 (S = 1 : 800)



第45図 第2次調査平面図・土層図・遺構断面図 (S = 1 : 80)

極く少量含む黒灰色粘性砂質土が局部的に薄く堆積する。現地表面から約30~40cm程で、遺物包含層や遺構検出面が現れる。

検出遺構

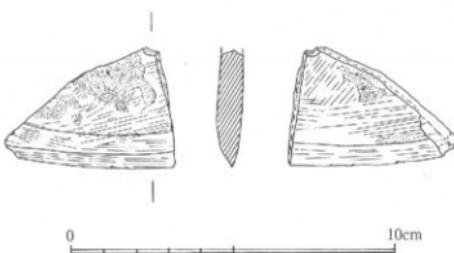
SD01

検出長約7m、幅約1.6m、深さ約30cmの北東~南西方向に流れる溝である。上層には黒色粘質土、下層には暗褐色粘性砂質土が堆積する。後述のSD02と合流する付近から、土器が若干出土した。

SD02

検出長約3.4m、幅約40cm、深さ約20cmの北西~南東方向に流れる断面形がU字形の溝である。建物の基礎によつてかなり破壊されているが、基礎底より深い部分が約5cmほど残存している。そのあたりから、磨製石包丁の破片が出土した。

石包丁は5.2×3.7cm、厚み8mmの欠損品であるが、両面から穿孔された紐穴の一部が残存している。刃部



第46図 第2次調査出土遺物実測図 (S = 2 : 3)

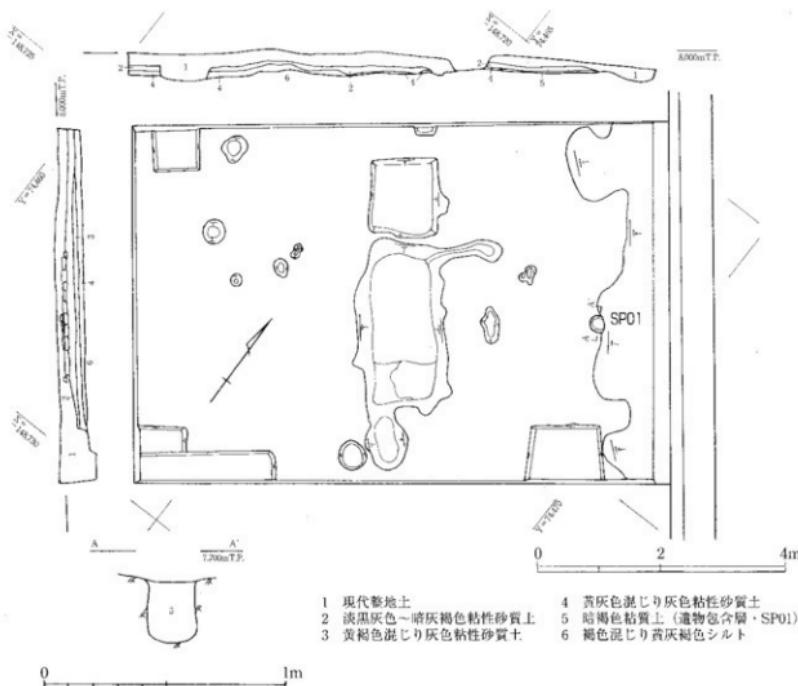
は直線刃で、横方向の研磨によってそれぞれの面が二段と一段に作り出されており、かたよった両刃状を呈している。体部の一部分には自然面を残している。おそらく半月形直線刃形態をとるものと思われる。材質は有馬層群中で産出する玄能池碎屑岩「塩田石」である。比重は2.41となっている。

小結

今回の調査では、溝が2条確認された。これらの溝は、街路部分の第1次調査で発見された溝とほぼ接続することが分かった。溝内から遺物の出土は極めて少ないため、溝が使用されていた時代の判断材料に乏しいが、少量の出土土器と石包丁から弥生時代の遺構と考えるのが妥当である。また、第1次調査の際、弥生時代中期の土器が出土していることからもそれが追認されるものと思われる。これらの溝がなんの目的で掘られたかは、現在の段階では明らかでないが、当時の水田に導水するための溝あるいは、水はけを良くするための機能を有する溝の可能性が指摘される。

2. 第3次調査

調査前の状況は家屋が除却された更地になっており、現地表高は7.8~8.1mである。



第47図 第3次調査平面図・土層図・ピットSP01断面図 (S = 1:80・1:20)

この付近は、区画整理の道路面より遺物包含層や遺構検出面の方が高い位置にあるため、建物建築に伴う整地作業で、それらが損壊されるおそれがあり、建築予定部分の全面、約50m²の発掘調査を行った。

基本層序 ①瓦礫混じり土（瓦礫、コンクリート）、②淡黒灰色～暗灰褐色粘性砂質土（近世～近代耕作土）、③黄褐色混じり灰色粘性砂質土（近世頃の床土、耕作土）、④黄灰色混じり灰色粘性砂質土（中世頃）が20～30cm堆積する。⑤暗褐色粘質土（弥生時代の土器を極く少量含む）は東端のみに薄く（2～3cm）遺存する。現地表面から約40～50cmほどで、遺構検出面である⑥褐色混じり黄灰褐色シルトが現れる。

検出遺構 ピット1基が東端部で検出された。

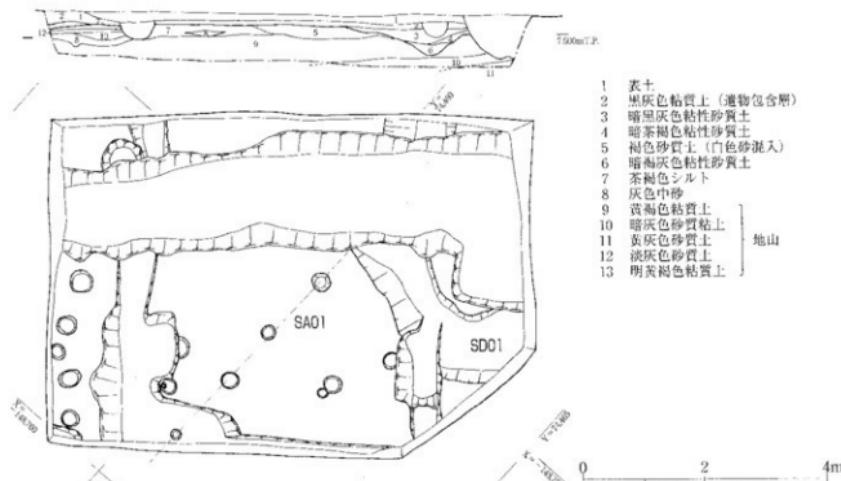
S P01 直径約20cm、深さ約30cmを測り、埋土は暗褐色粘質土である。遺物は出土しなかったため、時期の詳細は明らかでない。

小結 今回の調査では、ピットが1基確認された。これまでの調査で、弥生時代と判断される溝やピットが発見されており、今回のピットも同時期のものと考えられる。

これらの溝・ピットの機能は明らかではないが、遺構の分布状況や遺物の出土量からみて、調査地は集落縁辺部で、耕作地に近い場所にあたると判断するのが妥当であろう。

3. 第5次調査

調査地は、平成11年度に実施した第1次調査の都市計画街路部分東側に接する角地にあたる。第1次調査においては、溝・ピットが今回の調査地に接して検出されており、当該地においても連続する遺構が検出されると考えられた。



第48図 第5次調査平面図・土層図 (S = 1:80)

調査は、表土・擾乱部分を重機によって除去した結果、調査区北半部は大きく擾乱され調査区北辺沿いに一部遺物包含層と遺構面を残すのみであったが、南半部では遺物包含層および遺構面を良好に残存させていた。遺物包含層内からは中世の土師器・須恵器片が出土している。

- 検出遺構 検出した遺構は、ピット14基、溝1条で、ピットの内調査区中央の4基のピットで構成される柱列1条を検出した。
- ピット 径20cm～35cm前後の円形ピットで深さは5cm～25cm前後を計測する。一部のピットでは柱痕跡が観察できる。
- S A01 調査区中央で検出した柱列は柱間隔が北から1.0m、0.8m、1.0mを計測し、ほぼ真北に並び、ある種の建物を構成すると考えられるが、調査範囲が狭小で擾乱坑が北半をしめることから性格は不明である。
- S D01 調査区東部で検出した「く」の字に屈折する断面V字形の溝である。幅1.0～2.0m、深さ45cmを計測する。溝の北側は擾乱により壊滅されているが調査区北壁沿いでかろうじて溝の肩部を残す。
- 出土遺物 出土遺物は擾乱坑清掃中および遺物包含層内から中世と時期比定できる土師器・須恵器細片が出土し、調査区北壁溝部清掃中に弥生土器片が出土している。
- 小結 今回の調査で検出した溝は第1次調査検出のS D04の北西部にあたり、やや屈折して北方向にのびる溝と考えられる。溝内からはわずかながら弥生土器片のみが出土しており、水田および集落関連の溝が削平されながら残存したものと考えられる。また、柱列は南東側の第1次調査区でも柱穴群が検出されており、今後検討する必要がある。

4. 第6～10次調査

隣接する5軒分の敷地でほぼ同時期に発掘調査の依頼が発生したため、敷地境界を越えて同時に面的に調査した事例である。ただ神戸市教育委員会文化財課では1件の調査依頼に対して調査次数を1つ付けるようにしているため、同時に調査していても調査次数はそれぞれ本来の敷地に対応して第6～10次調査と命名した。しかし調査の際の遺構番号は、溝のみ土地境界を越えて延びるため調査範囲全体で番号を付け、土坑・落ち込み・ピットは土地境界内に納まつたため各調査次数毎に付けた。

- 第6次調査 敷地全面の発掘調査で、平成12年度に都市計画街路予定地で実施した第4次調査の北東隣に位置する。溝1条、ピット8基を検出した。
- S D01 調査区の南隣で検出した東西方向の溝である。西側は調査区外、東側は第7次調査調査区に続いているが、隣接する西側では街路部分の発掘調査を実施しており、その際にこの溝の延長部分を検出している。検出長18.5m、最大幅1.0m、深さ約30cmで、断面上半は皿状に開き、下半は楕円状に丸くなる。埋土は上から順に黒灰色シルト、暗灰色シルト、灰色粘土、黄橙色粘土混じり灰色粘土で、遺物は出土しなかった。
- ピット 直径あるいは長径10～20cm、深さ10～30cmの小規模なもので、掘立柱建物を構成するようにはまとまらなかった。遺物は出土しなかった。
- 第7次調査 敷地全面の発掘調査で、街路部分の第4次調査の北東隣、第6次調査の南東隣に位置す

る。溝1条、落ち込み1基の他、ピットを3基検出した。

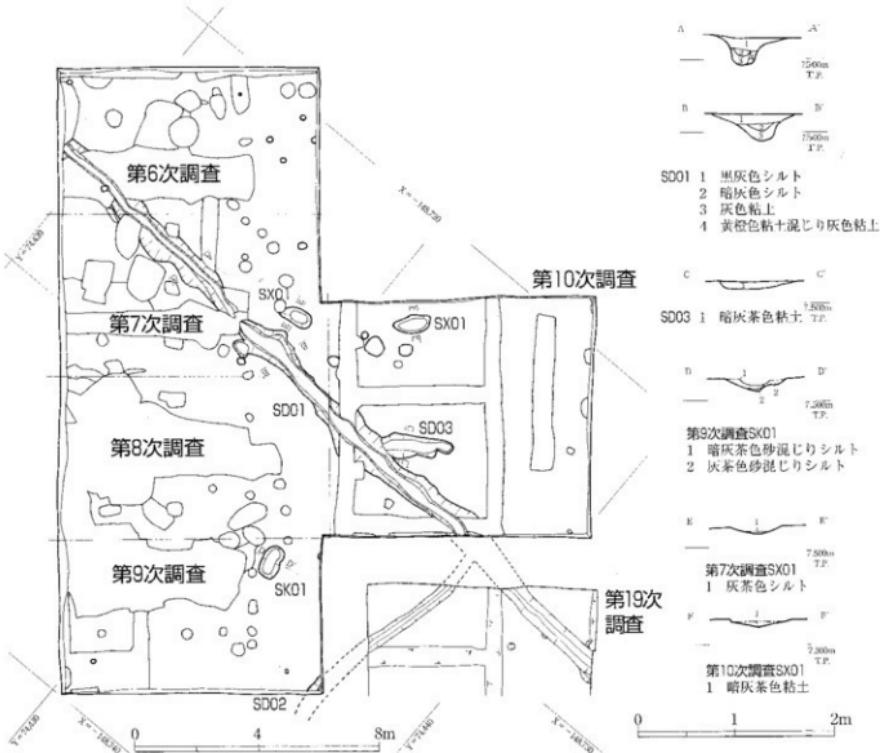
S D01 調査区の中央で検出した東西方向の溝である。西側は第6次調査調査区、東側は第8次調査調査区に続いている。検出長18.5m、最大幅1.2m、深さ約30cmで、断面上半は皿状に開き、下半は椀状に丸くなる。埋土は上から順に黒灰色シルト、暗灰色シルト、灰色粘土で、遺物は弥生時代片が出土した。

S X01 調査区の北東辺で検出した、浅い落ち込みである。長径1.1m、短径0.6m、深さ約10cmで断面は皿状、埋土は灰茶色シルトである。遺物は出土しなかった。

ピット 直径あるいは長径20~40cm、深さ5~10cmの小規模なもので、掘立柱建物を構成するようにはまとまらなかった。遺物は出土しなかった。

第8次調査 敷地全面の発掘調査で、街路部分の第4次調査の北東隣、第7次調査の南東隣に位置する。溝1条を検出した。

S D01 調査区の北隅で検出した東西方向の溝である。西側は第7次調査調査区、東側は第10次



第49図 第6~10次調査平面図・遺構断面図 (S = 1:80・1:50)

調査調査区に続いている。検出長18.5m、最大幅0.8m、深さ約25cmで、断面上半は皿状に開き、下半は椀状に丸くなる。埋土は上から順に黒灰色シルト、暗灰色シルト、灰色粘土で、遺物は弥生時代片が少量出土した。

- 第9次調査 敷地全面の発掘調査で、街路部分の第4次調査の北東隣、第8次調査の南東隣に位置する。溝1条、土坑1基の他、ピットを3基検出した。
- S D02 調査区の東隅で検出した南北方向の溝である。一部分のみの検出であるが、断面形状や埋土がS D01に似るために溝と判断した。南北両側は調査区外に統くため全長は不明であるが、北側の第10次調査調査区では検出されなかったため途中で消滅するか、東へ屈曲するものと考えられる。幅0.5m以上、深さ約25cmで、断面上半は皿状に開き、下半は椀状に丸くなる。埋土は上から順に黒茶色シルト、黄色粘土混じり灰色シルトで、遺物は出土しなかった。
- S K01 調査区の北東辺で検出した土坑である。長径1.1m、短径0.6m、深さ約15cmで断面は不整な皿状である。埋土は上から順に暗灰茶色砂混じりシルト、灰茶色砂混じりシルトである。遺物は出土しなかった。
- ピット 直径20cm、深さ5~30cmのもので、掘立柱建物を構成するようにはまとまらなかった。遺物は出土しなかった。
- 第10次調査 敷地北東辺を除きほぼ全面の発掘調査で、平成11年度に都市計画街路予定地で実施した第1次調査の南西隣、第7・8次調査の北東隣に位置する。溝2条、落ち込み1基の他、ピットを3基検出した。
- S D01 調査区の南半で検出した東西方向の溝である。西側は第8次調査調査区、東側は調査区外に続いている。検出長18.5m、最大幅1.2m、深さ約30cmで、断面上半は皿状に開き、下半は椀状に丸くなる。埋土は上から順に黒灰色シルト、暗灰色シルト、灰色粘土で、遺物は弥生時代片が少量出土した。
- S D02 調査区の南西寄で検出した北東から南西方向の溝で、調査区の南西辺でS D01と合流する。検出長2.3m、最大幅0.9m、深さ約10cmで、断面は不整な皿状である。埋土は暗灰茶色粘土で、遺物は出土しなかった。
- S X01 調査区の北西辺で検出した、浅い落ち込みである。長径1.2m、短径0.6m、深さ約10cm



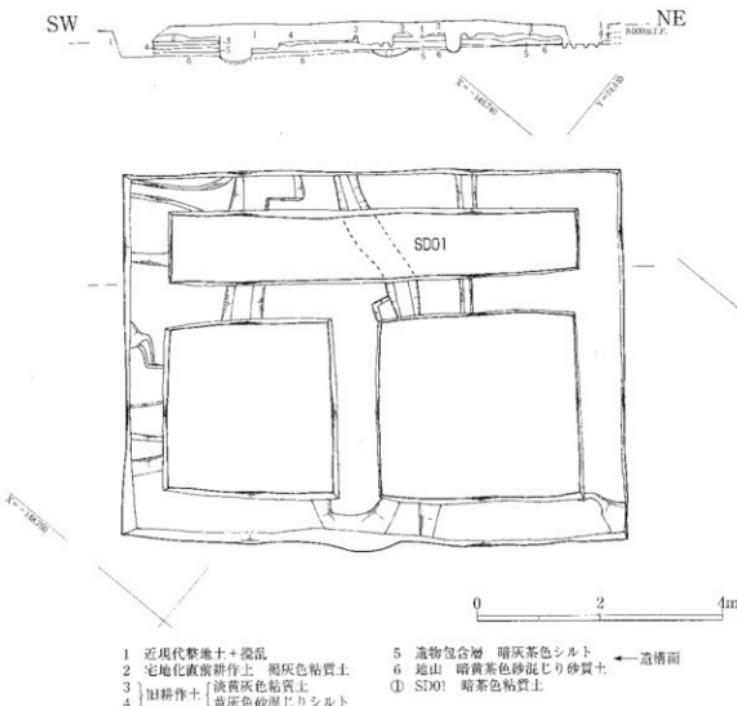
第50図 第6~9次調査土層図 (S = 1:80)

で断面は皿状、埋土は暗灰茶色粘土である。遺物は出土しなかった。

ピット 直径あるいは長径30~60cm、深さ約10cmのもので、掘立柱建物を構成するようにはまともならなかった。遺物は出土しなかった。

小結 今回の調査で検出した溝SD01は平成12年度の街路予定地での第4次調査SD05の東側延長部にあたり、埋土中からは弥生時代後期と思われる土器片が少量出土している。しかしその少ない土器も更に偏在性があり、第8次調査の敷地での出土量が多かった。また街路予定地での第1次調査では溝SD01の更に東側延長部は検出されていない。急に浅くなつて溝自体が消滅するのか、もしくは急に屈曲して第5次調査の溝SD01に繋がっていくのかどちらかの可能性も考えられるが、検討課題の一つである。

ピットには浅いものや深いものが混在していた。比較的深いものは本来掘立柱建物を構成していた可能性もあるが、遺構面までの深さが浅いことを考慮してかなり削平されていると思われる。従って今では掘立柱建物であったかどうか判定できなくなっているものも含まれていると考えられる。



第51図 第11次調査平面図・土層図 (S = 1 : 80)

5. 第11次調査

基礎によって破壊される部分の発掘調査で、街路部分の第4次調査の北東隣、第9次調査の一軒置いて南東隣に位置する。幅約60cmのトレンチを外周に4本、内部に2本設定した。溝1条を検出した。

SD01

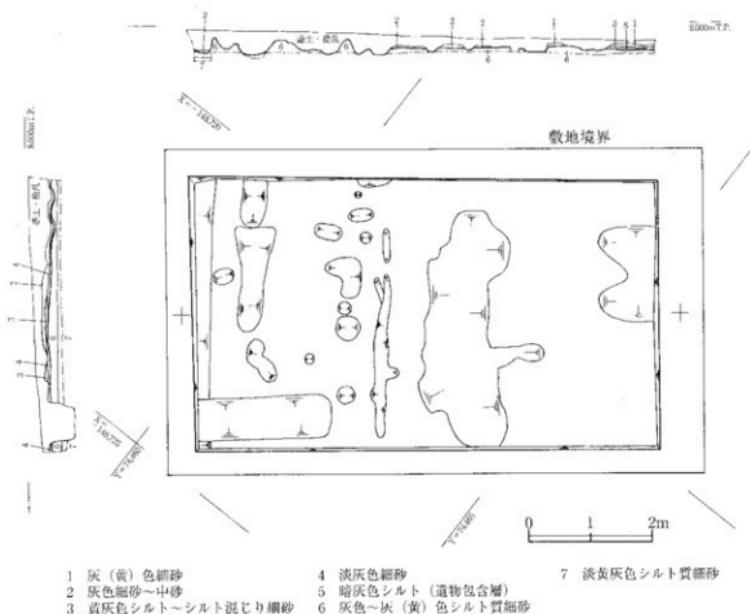
調査区の中央から北西辺で検出した、北西から南東方向の溝である。北西側は調査区外に統くため全長は不明である。南東側は南東外周のトレンチでは検出されなかったため途中で消滅するものと考えられる。検出長は未調査部分も含めて2.5m、最大幅0.5m、深さ約10cmで断面は皿状、埋土は暗茶色粘質土である。遺物は出土しなかった。

小結

今回検出した遺構は溝1条のみであるが、この溝の延長部分の可能性が考えられるものは周辺の調査では確認されていない。基礎部分のみの調査であり調査区が狭いことや攪乱が多いものもあるが溝の正確な方向は把握できていないが、周辺の調査で検出された溝と比較しても深さが浅いため、比較的短い長さで収束するものと考えられる。

6. 第12次調査

敷地北東辺を除きほぼ全面の発掘調査で、平成11年度に都市計画街路予定地で実施した



第52図 第12次調査平面図・土層図 (S = 1 : 80)

第1次調査の2本の調査区に挟まれた位置に位置する。調査の結果、遺物包含層はほとんど確認されず、遺構も検出されなかった。また、遺物も旧耕土層及び遺物包含層から極少量出土したにとどまった。以上の結果は、後世の削平や攪乱の影響が大きいことを反映していることに加え、今回の調査地が現在考えられている水笠遺跡の北端部に位置していることから、元来遺物包含層や遺構が存在しなかった可能性も十分考えられる。よって今回の調査成果からも水笠遺跡の北端部に位置していることが確認できたものといえる。

小結

今回の調査では遺物包含層がほとんど確認されず、遺構も検出されなかった。平成11年度に実施した試掘調査の結果と合わせると、調査地が水笠遺跡の北端部に位置する可能性が高く、今回の調査地以北の地点には埋蔵文化財が存在しない可能性が高いといえる。

7. 第13次調査

基礎によって破壊される部分の発掘調査で、街路部分の第4次調査の北東隣、第11次調査の一軒置いて南東隣に位置する。幅約60cmのトレンチを外周に4本、内部に1本設定した。しかし工事影響深度内では西隣の一部分で遺構面に達したのみで、大部分は遺物包含層中で収まった。遺構は検出されなかった。

8. 第14次調査

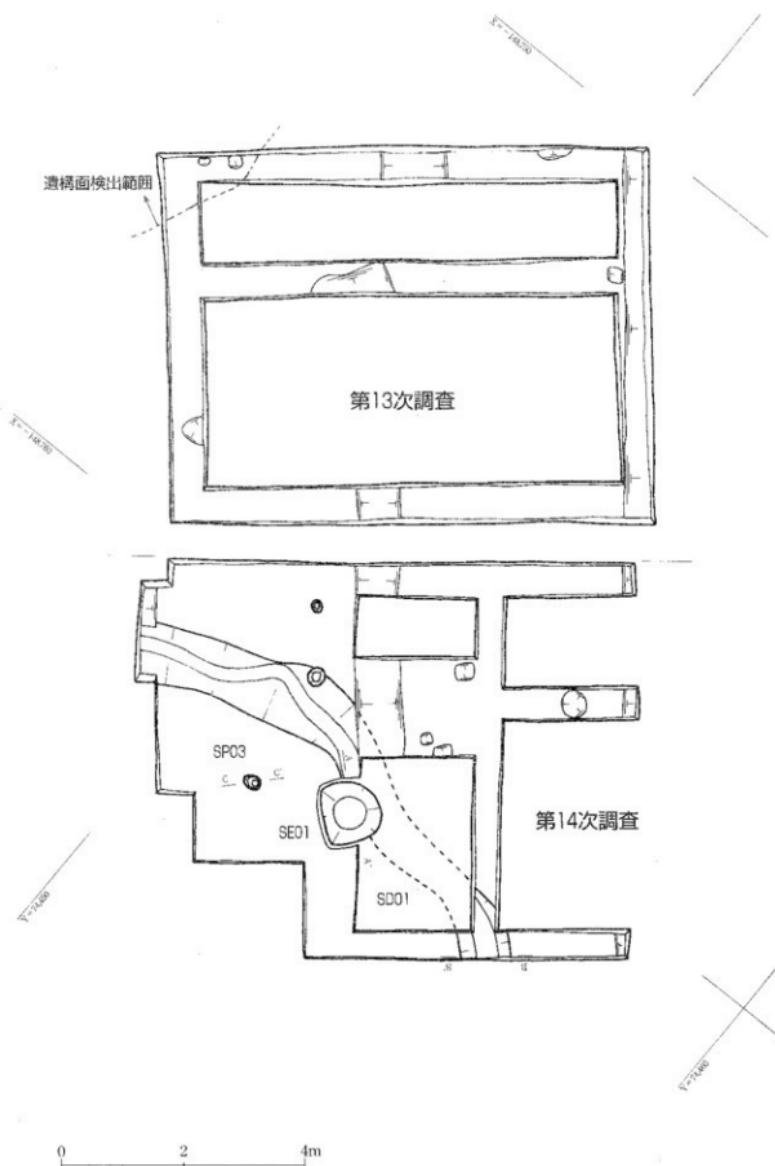
基礎によって破壊される部分の発掘調査で、街路部分の第4次調査の調査区が屈曲する部分の北隣に位置する。敷地の南西半分はほぼ全面掘削し、北東半分は幅約50cmのトレンチを外周に2本、内部に2本設定した。当初北東側外周にもう1本トレンチを設定する予定であったが、既に攪乱を受けていたことが明白であったため設定しなかった。溝1条、井戸1基の他、ピットを3基検出した。

S D01

調査区の南半で検出した、ほぼ東西方向の溝である。少し蛇行しながら両側は調査区外に続いているが、隣接する東西両側は平成12年度に街路部分の発掘調査を実施しており、その際にもこの溝の延長部分を検出している。さらにその東側延長部分は平成11年度同じく区画整理の街路築造に伴う発掘調査でも検出しており、この溝の全長はかなり長いものとなる。幅0.7~1.0m、深さ約55cmで断面は幅の広い「U」字形であるが、底は溝の蛇行に応じてカーブの外側へと大きく屈曲する。埋土は上から順に暗黄灰色砂質土、褐色砂、淡褐灰色砂である。遺物は弥生土器片が少量出土した。

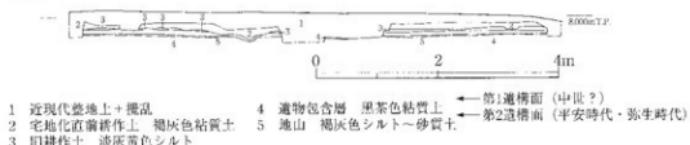
S E01

調査区の南半で検出した井戸である。これのみ明らかに遺物包含層の上面で検出した。平面は直径0.9~1.1mの不整な円形であるが、底面は直径0.5mの整円形である。深さ2.0mで、埋土は地山構成土が塊状に混和したものである。井戸最下部の地山は緑青色砂で、この層が湧水層となっている。井戸枠は存在しないのみならず、枠材の断片であった可能性のある木片も全く出土しなかった。埋土が地山土が混和したものであることを考慮すると、井戸を開削したものの十分な水量が得られなかつたためか、井戸枠を構築することなく埋め立てた可能性が推量できる。土器片も全く出土しなかつたため詳細な時期は不明であるが、遺物包含層の上面で検出されたこと、地山上面で検出したS P03から鎌倉時代頃の土器が出土したことから判断して中世後半頃と推定できる。

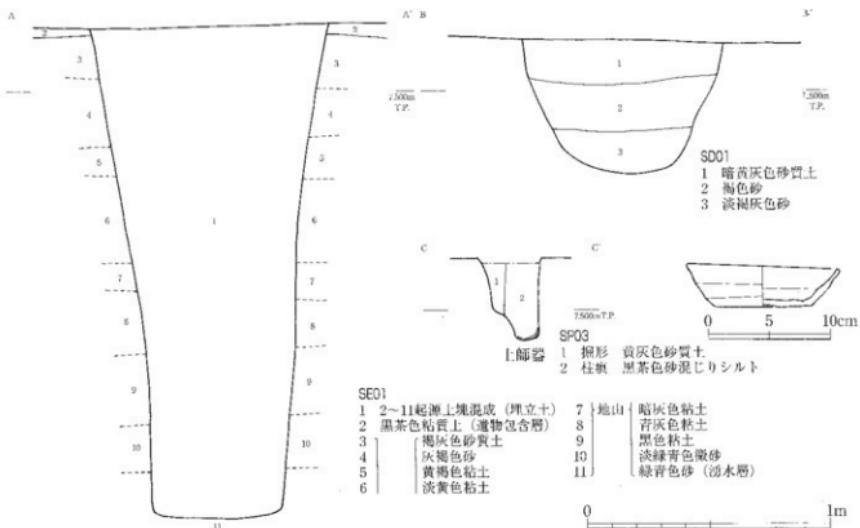


第53図 第13・14次調査平面図 (S = 1 : 80)

NE SW



第54図 第14次調査土層図 (S = 1:80)



第55図 第14次調査遺構断面図・ピット SP03出土遺物実測図 (S = 1:20・S = 1:4)

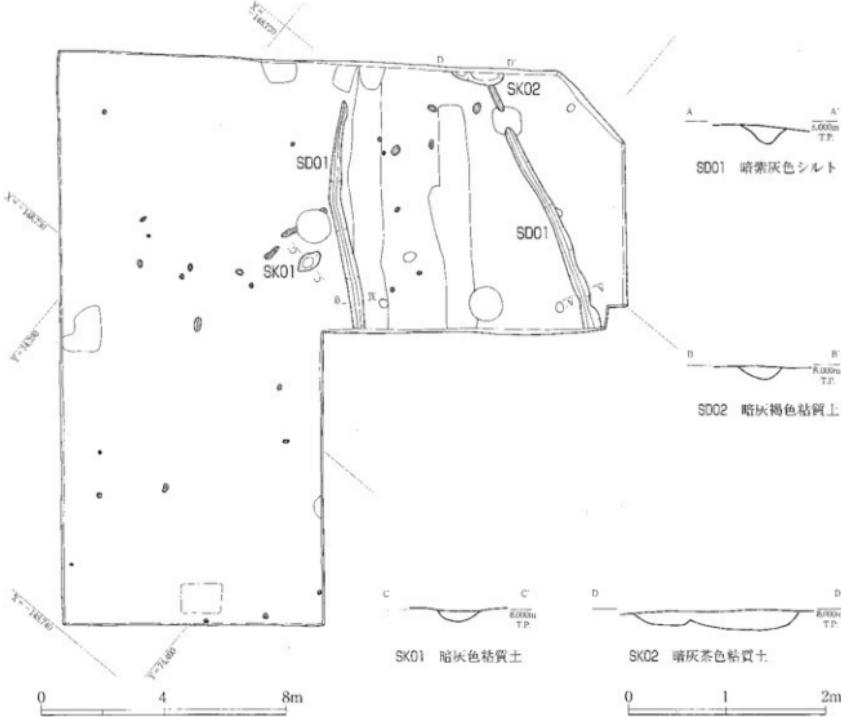
ピット 直径あるいは長径20~30cm、深さ5~35cmのもので、掘立柱建物を構成するようにはまともならなかった。S P02から弥生土器、S P03から土師器が少量ずつ出土したが、S P03の土師器の1点は13世紀後半頃と考えられるほぼ完形の皿である。少し歪んでいるが内面と立ち上がり外面はヨコナデが顕著である。底外面は指頭圧痕状の凹凸が著しく平らになっていない。柱穴の底面で出土しており、柱抜き取り後に柱穴に入れたと考えられる。

小結 今回の調査では遺物が出土しなかったため正確な時期は不明であるが、中世後半頃と考えられる井戸S E01を遺物包含層上面で検出したことが特筆される。このことによって水笠遺跡も複数の遺構面が存在する複合遺跡であることが判明した。また溝S D01は東側が街路部分の第4次調査溝S D03、西側が同じく溝S D02に続くものである。街路部分の調査時点では同一の溝になると判断されていなかったが、今回の調査で一本に続くことが判明した。そしてピット1基ではあるが鎌倉時代の遺構を確認したことにより、周辺に同じ時期の遺構が存在する可能性が示唆されよう。

9. 第15次調査

敷地全面の発掘調査で、水笠3丁目街区の西隅に位置する。工事予定地は約450m²であるが、今回は先行調査が可能であった部分のみを調査し、既存家屋の移転が完了していない残り約半分は平成13年度以降に調査を実施する予定である。調査区は「L」字状になつておらず、溝2条、土坑2基の他、ピットを31基検出した。また遺物包含層は削平されて遺存していないかった。

- S D01 調査区の北東辺で検出した東西方向の溝である。方向や埋土の類似性から第6～10次調査で検出した溝SD01の西側延長部分と考えられる。しかし第6～10次調査では溝の断面上半が皿状、下半は椀状になっていたが、今回は椀状の部分のみである。後世の耕作によつて上半が削平されて消滅したものと推定できる。長さ8.8m分を検出したが第6～10次調査を合わせると長さは約50m以上となる。幅0.3～0.4m、深さ10～15cm、埋土は暗茶灰色シルトで、遺物は弥生土器片が少量出土した。
- S D02 調査区の中央北寄で検出した北西から南東方向の溝である。長さ7.5m分を検出したが



第56図 第15次調査平面図・遺構断面図 (S = 1:160・S = 1:50)

南東側は調査区外に統くため全長は不明である。幅0.2~0.4m、深さ約10cm、断面は楕状である。埋土は暗褐色粘質土で、遺物は出土しなかった。

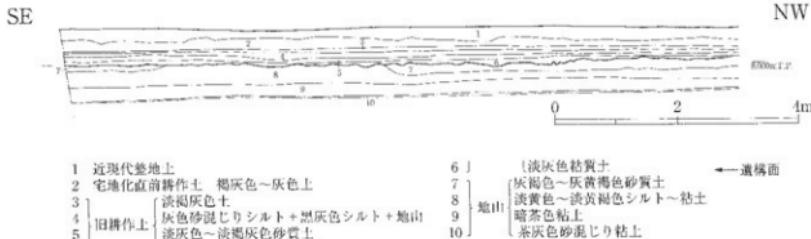
S K01 調査区のほぼ中央で検出した菱形状の土坑である。長軸1.0m、短軸0.6m、深さ約15cmで断面は楕状である。埋土は上から順に暗灰茶色砂混じりシルト、灰茶色砂混じりシルトである。遺物は弥生土器片が1点出土した。

S K02 調査区北寄の北西壁直下で検出した長円形の土坑であるが、調査区外に統くため全体の規模は不明である。長径1.9m以上、短径0.4m以上、深さ約20cmである。埋土は暗灰茶色粘質土で、遺物は出土しなかった。

ピット 直径あるいは長径10~20cm、深さ5~10cmのもので、掘立柱建物を構成するようにまとらなかった。遺物は出土しなかった。

出土遺物 今回の調査では第1~14次調査と比較して多くの遺物が出土した。ただし遺物包含層が遺存していないため大半が旧耕作土からの出土で、その多くが中世の土師器・須恵器である。しかし中には少量であるが綠釉陶器や灰釉陶器が含まれていた他、丸瓦2点、平瓦8点が含まれていた。これらは一般的な集落ではあまり多くは見られない遺物であるため、近隣に該当時期の特殊な建物等が存在していた可能性が考えられる。

1は瀬戸焼の折縁深皿で、外面には凹線状の装飾が現状で3条確認できる。釉色は黄緑色であるが外面は凹線両端の凸部分が剥落する。口縁部上面は浅い受口状になる。2は硬陶の綠釉陶器輪花碗であるが、小片のため輪花の数は不明である。釉色は濃緑色であるが口縁端部は少し剥落気味である。輪花は外面下方から内面上方へ細い棒状工具で押圧して作り、外面輪花直下にはば綱方向に1条の沈線が刻まれる。そのため輪花から沈線の部分にかけての内面は少し膨らんでいる。輪花と沈線で土器全体に花弁を表現したもので、10世紀後半頃の時期と思われる。3と4は灰釉陶器碗と思われるが小片であるために詳細な器形や時期は不明であり、3は青磁の焼成不良品の可能性も残る。釉色は3が緑灰色、4が淡緑灰色である。5は青磁碗である。外面上半に雷文帯があるが、下半は文様の線刻が1条確認できるが欠損のため蓮弁文かどうかは不明である。釉色は淡青緑色で、龍泉窯系の14世紀末~15世紀前半頃と思われる。6は青磁盤である。内面は蓮弁条に浅く彫り込まれ、口縁部上面は浅い受口状になる。釉色は淡青緑色で、釉層は厚めである。釉調から龍泉窯系と思われるが、器形全体から見れば小片であるため詳細な時期は不明である。7

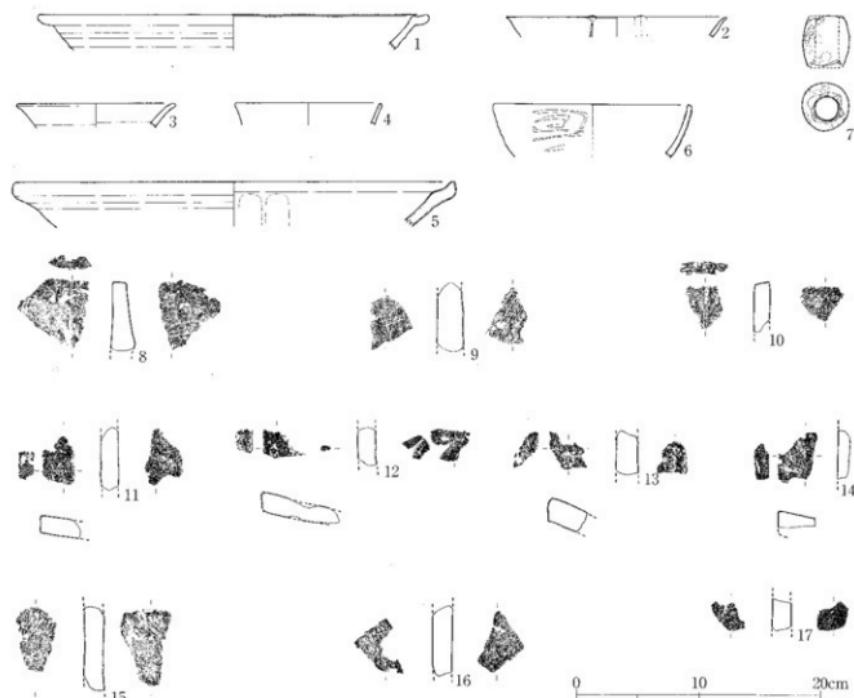


第57図 第15次調査土層図 (S = 1 : 80)

は土錠である。中央の孔の縁は欠る部分がほとんどで、わずかに数mmのみの部分が本来の状態で遺存する。孔は棒状材に粘土を巻き付けて成形した後に棒状材を抜き取って作られる。全体的に調整は丁寧であるが、指頭圧痕状の小規模な凹凸がかすかに確認できる。表面は暗灰色に焼られる。8・9は丸瓦である。8は玉縁の部分と考えられ、端面が遺存する。9の外面に繩目が、内面に模骨の痕跡がそれぞれわずかに確認できる。10~17は平瓦である。10は端面が遺存し、内面に模骨の痕跡がわずかに確認できる。11~14は側面が遺存するが、14は側面の一部と下面を欠損する。15~17は遺存状況が悪く、上下両面のみを残す。軒瓦は出土しなかった。

小結

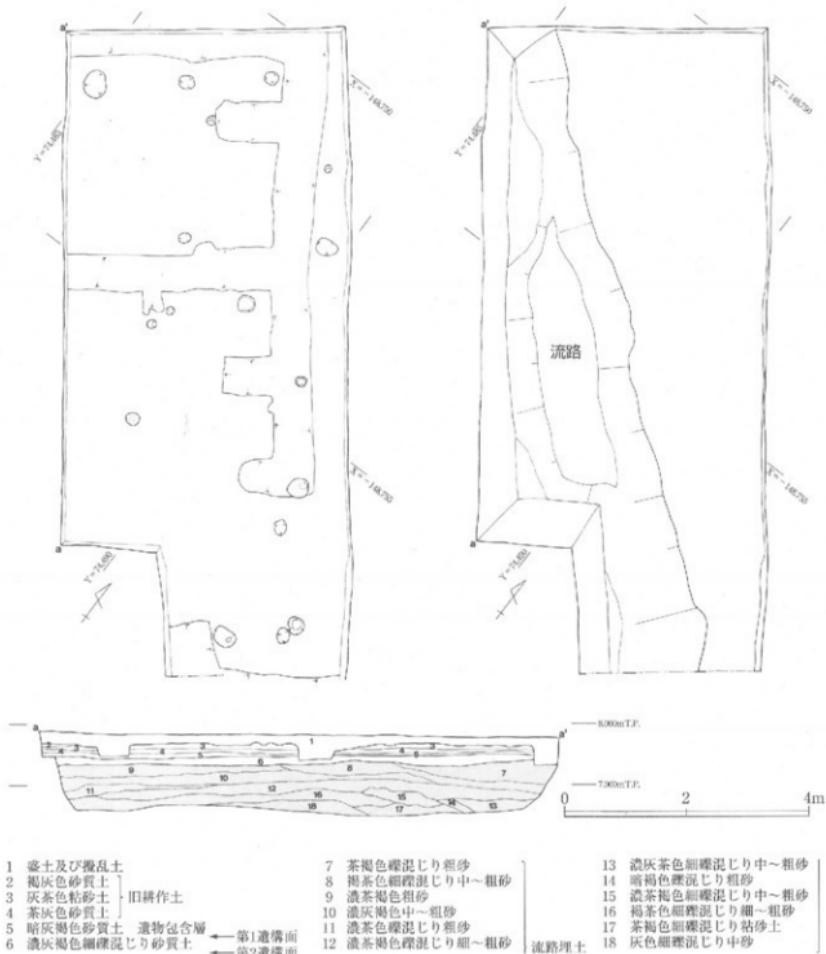
今回の調査で検出した溝S D01は東側が街路部分での第4次調査の溝S D05、更に第6~10次調査の溝S D01に続くものである。このことによってかなりの長さの溝であることが判明した。また溝S D02は一連の調査のなかで新たに確認された遺構である。後日南隣の敷地を発掘調査する予定であるため、その延長方向の検出と時期の確定が期待される。また少量であるが綠釉陶器・灰釉陶器・瓦の破片が出土したことによって近隣での平安時代頃の遺構の検出も期待されよう。



第58図 第15次調査出土遺物実測図 (S = 1 : 4)

10. 第17次調査

水笠通3丁目街区のほぼ中央部のやや南寄に位置する調査区で、2面の遺構面が検出された。層序は現代盛土の下層が2～3層の旧耕土層となっており、その下層に遺物包含層である暗灰褐色砂質土が存在する。遺物包含層の下層上面が第1遺構面で、G.L.-30～



第59図 第17次調査平面図・土層図 (S = 1 : 80)

40cmを測る。第2遺構面は第1遺構面の基盤層である濃灰褐色細礫混じり砂質土を除去した層位面で検出され、G.L.-40~55cmを測る。

第1遺構面

遺構は小規模なピット数基のみで、出土遺物もほとんどなく、性格は不明である。

第2遺構面

調査区西半で流路を検出した。東側の肩部を確認したのみのため、詳細な規模は不明である。埋土中より縄文時代晚期~弥生時代前期と考えられる土器の小片が出土した。

小結

第1遺構面については、遺構や遺構面を覆う遺物包含層である暗灰褐色砂質土からの出土遺物がほとんどなく、過去の周辺調査で検出された遺構群の拡がりを確認したにとどまったが、第2遺構面の流路の検出は、同地域における集落の様相や形成時期を考える上で大きな成果と言えよう。

11. 第18次調査

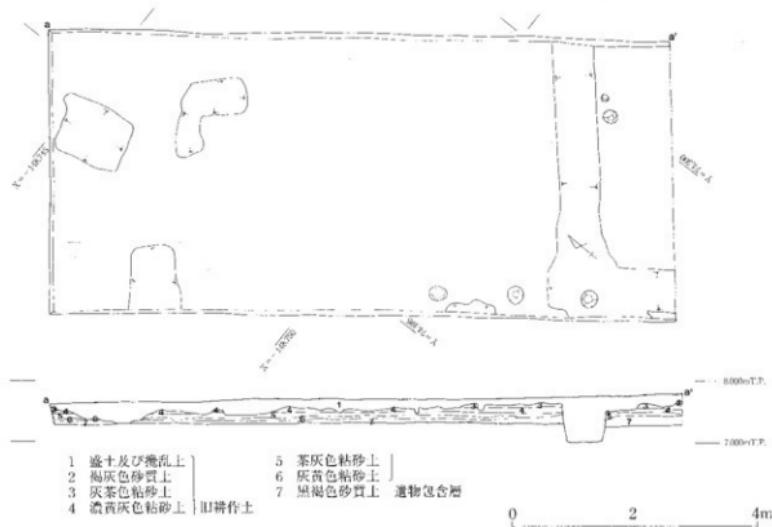
第17次調査地の約5m東側に位置する調査区である。層序は現代盛土の下層が3~4層の旧耕土層となっており、その下層に遺物包含層が存在する。遺物包含層の下層上面が遺構面で、G.L.-30~50cmを測る。第17次調査の第2遺構面に相当する層位面は存在するものの遺構は検出されなかった。

遺構・遺物

調査区南半で小規模なピットが数基検出された。西側壁面際の3基のピットが等間隔で存在するが、建物あるいは柵などを構成するものか否かは不明である。遺物は遺構・遺物包含層共に少なく、いずれも小片であるため、遺構の時期や性格の詳細も不明である。

小結

本調査区の成果は乏しいものではあるが、遺構の存在が集落の拡がりを示唆するもので



第60図 第18次調査平面図・土層図 (S = 1 : 80)

あり、同遺跡の全容を解明していく上で不可欠な資料となるものと思われる。今後の近接地での調査成果が重要視される。

また第18次調査の東方約40m、街路部分の第16次調査で縁釉陶器片が溝から出土している。残存度約4分の1の破片で軸の遺存状況もよくないが、第15次調査に次いで2点目の出土である。

溝から他に土師器・須恵器も出土したが細片であった。水笠遺跡ではまだ明確な平安時代の遺構は検出されていないが、今後近隣の調査の際には確認される可能性がある。

12. 第19次調査

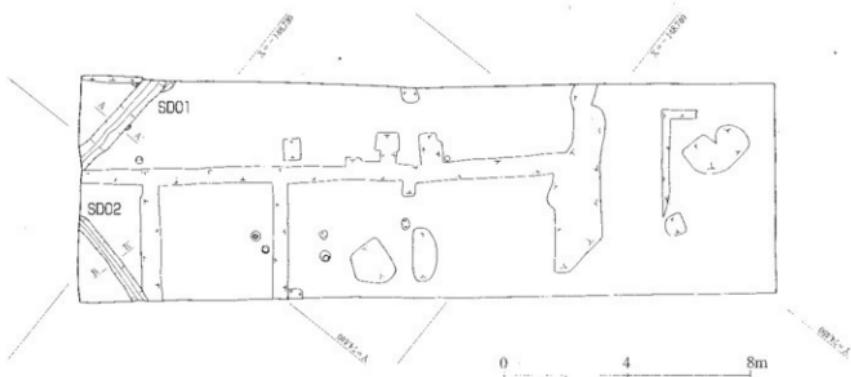
第6～11次調査地点に隣接しており、遺構面が1面検出された。層序は現代盛土の下層



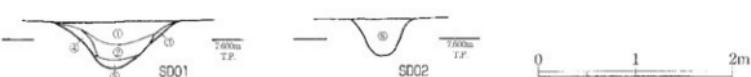
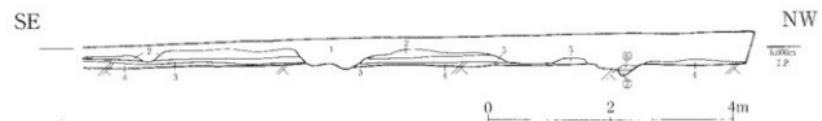
第61図 第16次調査
出土遺物実測図
(S = 1 : 4)

12. 第19次調査

第6～11次調査地点に隣接しており、遺構面が1面検出された。層序は現代盛土の下層

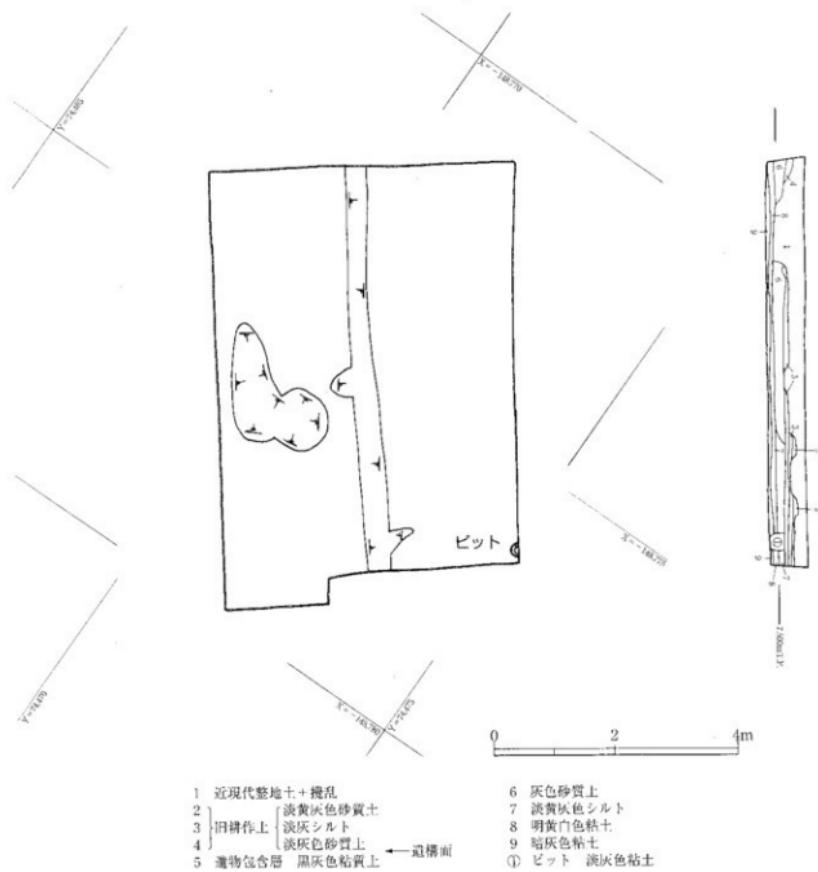


第62図 第19次調査平面図 (S = 1 : 160)



- | | | |
|----------------|---------|---------|
| 1 近現代整地土 + 梗乱 | ① 黒灰色粘土 | ⑥ 暗灰色粘土 |
| 2 旧耕作土 淡黄灰色砂質土 | ② 暗灰色粘土 | ⑦ 灰色砂質土 |
| 3 遺物包含層 黒灰色粘土 | ③ SD01 | ⑧ 黑灰色粘土 |
| 4 地山 淡黄灰色砂質土 | ④ | SD02 |
| 5 濁黄灰色粘土 | ⑤ | |

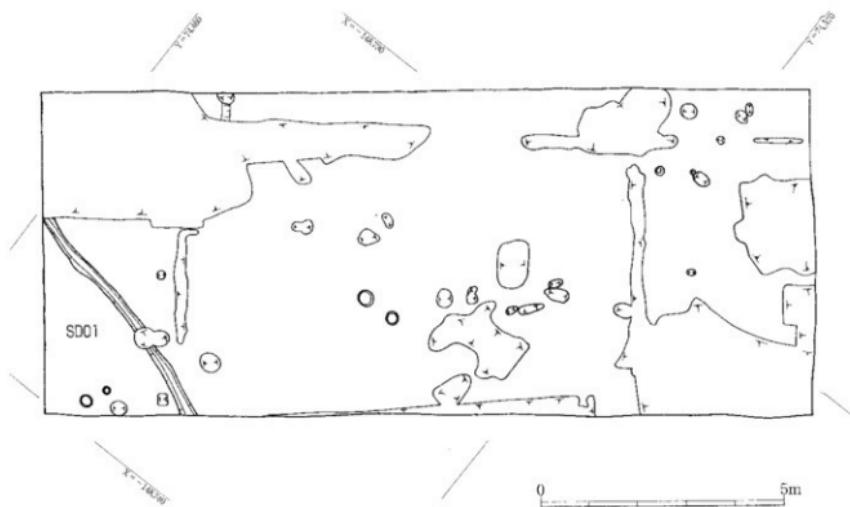
第63図 第19次調査土層図・溝SD01・02断面図 (S = 1 : 80・S = 1 : 50)



第64図 第20次調査平面図・土壌図 (S = 1 : 80)

が2～3層の旧耕土層となっており、その下層に遺物包含層（黒灰色粘土）が存在する。遺物包含層はG. L. -30cm、遺構面はG. L. -40～50cmで検出された。溝2条、柱穴数基を検出した。

- S D01 約50cm、深さ約25cmの溝で、東西方向に流れる。北接する第10次調査地点で検出されたS D01と接続する。遺物は出土しなかった。
- S D02 約40cm、深さ約20cmの溝で、南北方向に流れる。西接する第9次調査地点で検出されたS D02と接続する。遺物は出土しなかった。
- ピット ピットが數基検出されたが、建物としてまとまるものはない。
- 小結 現代の擾乱と整地により、遺構面の残存状況は悪い。出土した遺物はいずれも細片で、

第65図 第21次調査平面図 ($S = 1 : 100$)

時期を特定できるものは少ないが、第6～10次調査地点で検出された遺構と接続することから弥生時代後期頃の遺構面であると考えられる。

13. 第20次調査

街路部分の第16～3次調査地点の西隣に位置する調査区で、遺構面が1面検出された。層序は現代盛土の下層が2層の旧耕土層となっており、その下層に他の調査区で遺物包含層としてとらえられている黒灰色粘質土が存在する。黒灰色粘質土はG. L. - 25cmで検出されたが、今回は遺物は出土しなかった。遺構面はG. L. - 30cmで検出された。

遺構

ピット1基を検出した。遺物の出土はない。

小結

今回の調査では、調査面積の制約もあり、遺構面の広がりを確認するに留まった。

14. 第21次調査

第19次調査地点の東側に位置する調査区で、遺構面が1面検出された。現代の整地により遺構面が削平されており、G. L. - 0～10cmで遺構面が検出された。溝1条と柱穴数基が検出されたが、遺物は出土しなかった。

SD01

幅約20cm、深さ約5cmの溝で、東西方向に流れる。遺物は出土しなかった。

ピット

ピットが数基検出されたが、建物としてまとまるものはない。

小結

現代の整地により、遺構面以下に及ぶ削平を受けたため、本来存在した耕土層、包含層はすべて失われている。その原因は、地形的に一段高い場所であるため、影響を強く受けた事にある。今回の調査では遺構検出数は少ないが、失われた遺構の存在は、立地条件から十分考えられる。

第V章 ま と め

第1節 松野遺跡の遺構分布

平成14年度末現在で第31次を数える松野遺跡の発掘調査であるが、第1・2次調査を実施して古墳時代後期前半の豪族居館を確認した神戸市営松野住宅より南東側の一帯では、第4～9次調査によって豪族居館と同時期に展開する集落が確認されている他、平安時代後半から鎌倉時代前半の掘立柱建物や土坑、木棺墓が検出されている。松野住宅より北西側では平成11年度に個人住宅の新築に伴う発掘調査に先行して区画整理の街路部分の発掘調査が第10次調査として実施されて以降、3件の街路部分の発掘調査と18件の個人住宅等の発掘調査が実施されている。しかしそれらの調査成果では松野住宅の南側と一転して検出できた遺構の密度が低くなり、しかも豪族居館と同じ時期の遺構は耕作溝を除けば極めて貧弱である。出土遺物も少ないため遺構の時期比定が難しいが、わずかに確認できた遺構も弥生時代後期頃のものが多く、極稀に弥生時代前期のもののが存在する程度である。

そのような状況の中、第19次調査で検出した掘立柱建物や井戸は鎌倉時代のもので、明らかに黒褐色の古墳時代頃の遺物包含層上面を遺構面としていた。掘立柱建物は平成11年度の街路部分の第10～3・4・16次調査の成果と合わせると、桁行6間(13.0m)×梁間4間(7.9m)以上の比較的規模の大きな建物が復元できた。掘立柱建物の南東隅近くには柱間2間×1間の規模の、廐の可能性が考えられる土坑が伴っていた。また復元建物の北隣に位置する第14次調査から第10～16次調査にかけての部分では明確に掘立柱建物を復元できていない多くの柱穴を検出しておらず、周辺一帯に当時の集落が営まれていたことが明らかとなった。ただ松野住宅より北西側の街区内では他に第13次調査でピットと落ち込みが各1基ずつ確認されているのみで、確認された集落が松野住宅より南東側の当該時期の遺構群を含んで散村的な状況にあるのか、あるいはまだ調査が実施されていない北東側の松野通3丁目方向に広がっていくのか現状では不明である。今後周辺の調査事例が増加していく中で解明されていくものと思われる。

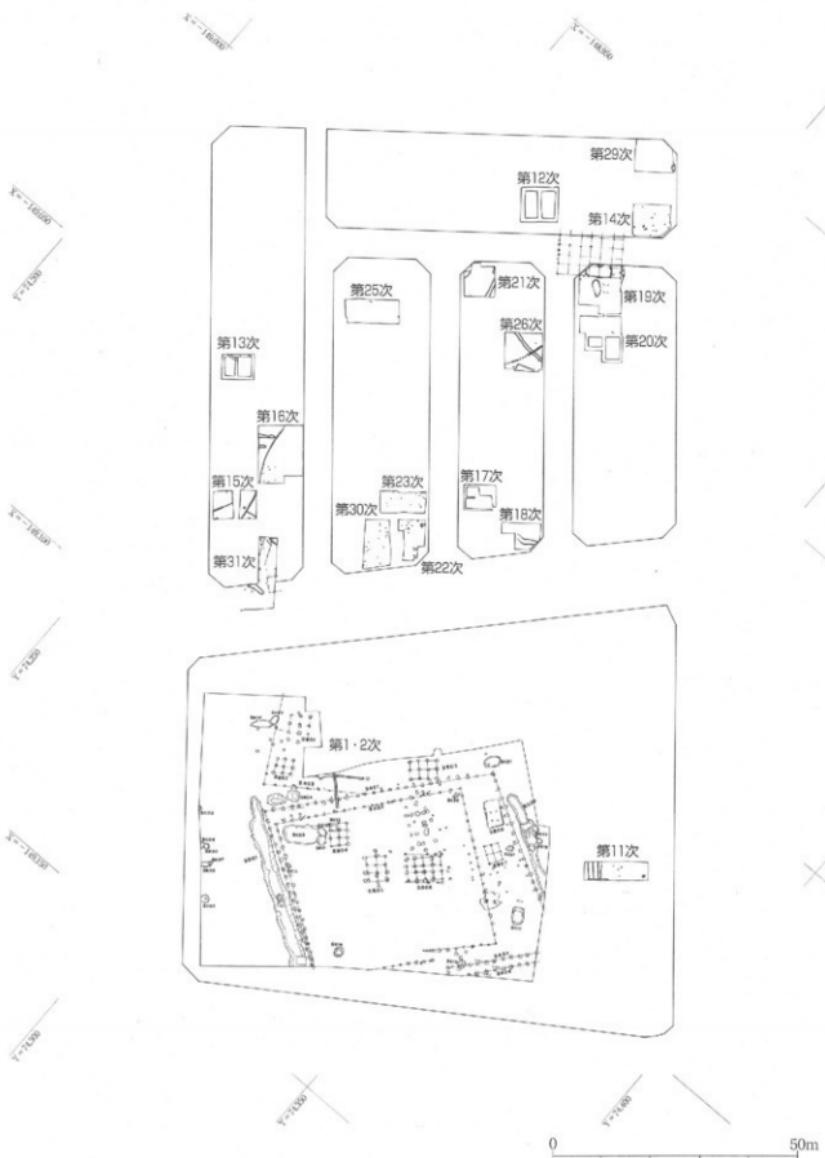
第19・26次調査では耕作溝を除くと初めて古墳時代後期の遺構が確認された。耕作溝は平成11年度の街路部分の第10～11・20次調査で確認されており、豪族居館以北一帯は当時耕作地だったことは確實である。しかし第19・26次調査ともに土坑1基ずつはあるが、耕作溝の他にも当時の人々の活動が存在したことが明らかとなった。しかしこれら以外には同時期の遺構は確認されておらず、依然として分布は貧弱な状況であることには変わりはない。ただ平成12年度に街路部分の第28～3次調査と同時に発掘調査された第31次調査では、第1・2次調査で検出された柱列(柵もしくは塀)にはほぼ平行する柱列SA01・02が検出されている。柱穴からは時代判定に耐えられる程の遺物の出土量がないこと、埋土の差から時期のグループ判別もできないこと、柱穴の規模等も第1・2次調査で確認されているものと比較にならないほど小さいことなど不確定な要素が多い。しかし周辺一帯では弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての遺構は東西もしくは南北方向にはば合致

するものが多いという傾向がある。それとは異なる方向で、また居館関連の遺構の方向が一致する点で柱列S A01・02は注目される遺構と言えよう。

これまでの震災復興に伴う松野住宅の南北両側での発掘調査で、松野遺跡について判明してきた点がある。それは周辺一帯が緩斜面で経過する中でも、居館と南東側の集落の基盤面間には若干の高低差があり、居館は一段高い位置を占めていることである。そして居館の南には当該時期の集落が展開するのに対し、居館付近一帯は遺構が削平されて消滅してしまっている可能性があるものの、居館隣接地や北西側には当該時期の遺構は耕作溝とわずかの土坑を除くとほとんど皆無に近いという状況である。このことは南側の一般集落の構成員が北の山手に顔を向ければ一段高いところに首長の居館が占拠し、逆に居館からは村の衆の暮らしを見渡せるという状態にある。このような立地条件は集落の中心となる首長の居館という性格からすれば当然のことであろう。また居館にごく隣接して一般の集落が占地することも考えにくく、居館の周囲に遺構の空白地帯が分布するのも当然のことと考えられる。プラントオパールや花粉の分析を実施していないが、遺構の空白地帯が耕作地であったとしてもそれは居館に付随する特殊な性格を有していたものであり、通常一般の耕作地ではなかった可能性も十二分に考え得ることである。そのような空白地帯のさらに外側になると再び同じ時期の集落が展開する可能性も考えられよう。

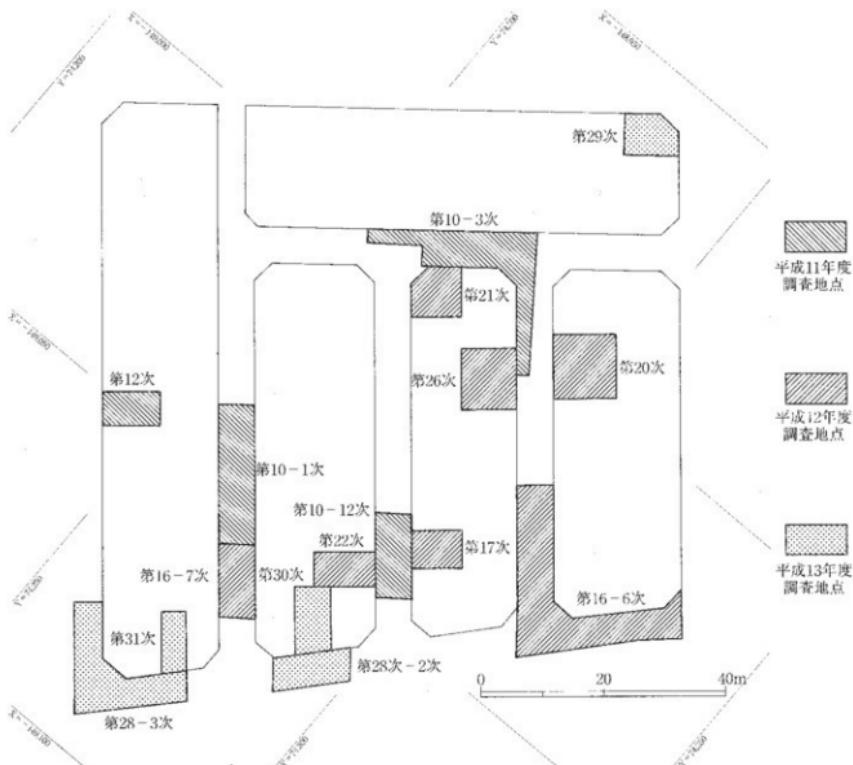
そのことに関し、平成14年度に実施した街路部分の第28-4次調査では第1・2次調査地点の北西約200mにあたる位置で古墳時代後期と推定される堅穴住居が1棟検出されている。居館から見て北側約200mまでの範囲が同時期の遺構分布が極めて貧弱な地帯となっているが、この堅穴住居はさらにその北西外側で初めて明確な居住を示す遺構であると言える。これまで試掘調査等の結果により、松野通4丁目より北側は二街区北西側にある戎町遺跡との間の遺構空白地区として推定されていた。しかし今回の調査で堅穴住居が確認されたことにより、居館周囲の遺構空白地帯のさらに外側には再び当該期の集落が展開する可能性を示すものと言える。遺物包含層や遺構が削平されているために試掘調査では遺跡であることの証拠を得難い状況にあることは確かではあるが、今後松野遺跡の範囲がさらに北側に拡大する可能性も考慮されねばならない。

弥生時代前期に関しては第29次調査で土坑が検出されている。第30次で検出した自然流路からは微細な繩文土器が出土しているが、近隣の街路部分の第16-7次調査の状況を勘案すると弥生時代前期の土器と共に伴するものと思われる。また遺物は出土しなかったが第13次調査でも前期の可能性がある溝が検出されている。第21次調査の状況は北側隣接地の街路部分の第10-3次調査と同様で、東側が安定した土壤で西側は湿地状に傾斜していく。その中で遺構面上から出土した土器片は磨滅しているが弥生時代前期のものと考えられる。街路部分の第10-1次調査では土坑内から弥生時代前期の完形の甕が、遺構面上から弥生時代前期の土器片が出土している。その他極微量であるが第17・20・22・26次調査では遺構面の下層から弥生時代前期の土器片が出土している。街路部分では第10-3・12次調査、平成12年度の第16-6・7次調査、平成13年度の第28-2次調査で弥生時代前期の遺構が確認されているが、第10-3次調査、第16-6・7次調査、第28-2次調査では下層の遺構面として検出されている。そもそも古墳時代の居館を確認した第1・2次調査

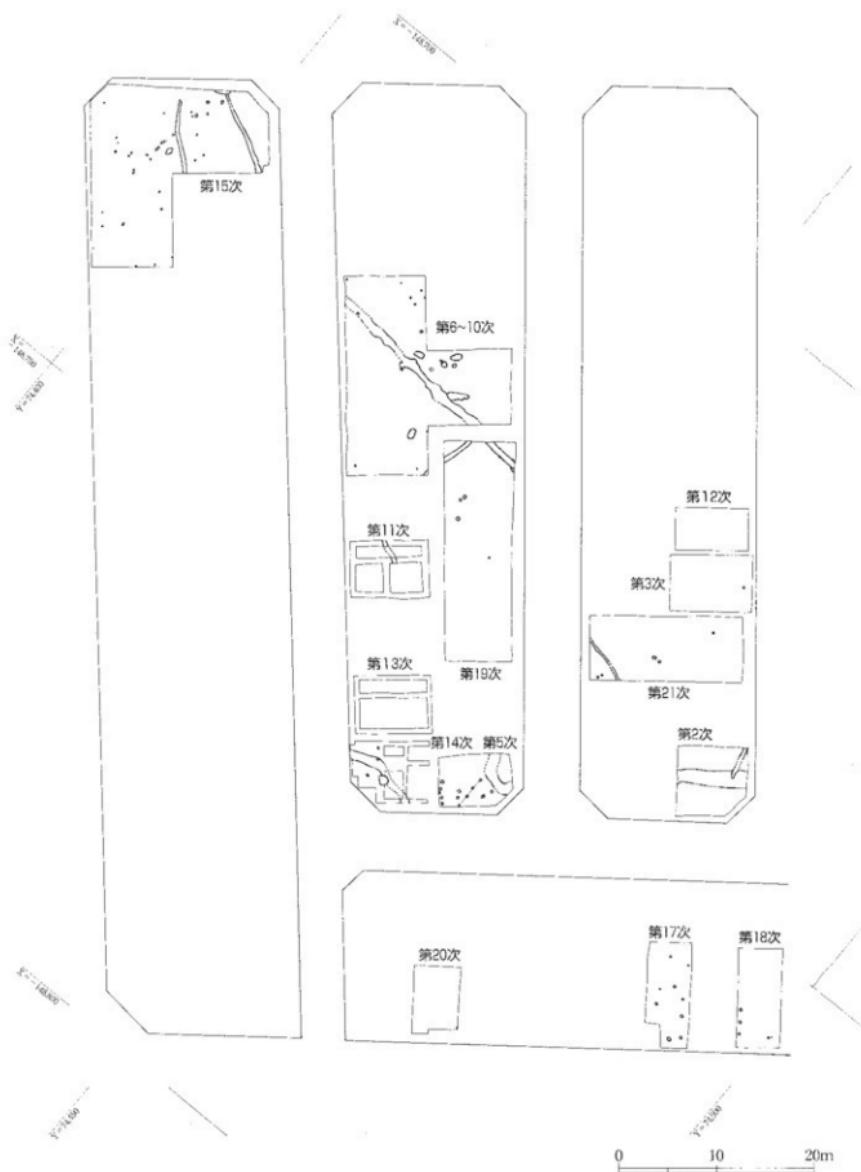
第66図 松野遺跡平面図 ($S = 1 : 1,000$)

に関しても、試掘調査で弥生時代前期の土器片が出土したことが調査を実施する契機であった。松野遺跡では堅穴住居等の居住を示す遺構は検出されていないものの、ある調査区では古墳時代から弥生時代の遺構面と同一面で、またある調査区では下層の遺構面として検出されている。決して濃密な分布状況ではないが弥生時代前期の遺構は歴然として存在しており、近隣に未確認の弥生時代前期の集落が存在する可能性がある。

以上平成11年度來から事例が増加しつづけている松野通4丁目内での調査ではあるが、しかし依然として豪族居館の北側を区切る遺構の有無あるいは状態は未だ不明のままである。豪族居館の周囲を巡る柱列の一部は本街区の方向へ延びているが、その場所は南東辺の南半でまだ調査が実施されたことがない部分にあたる。今後この部分で個人住宅等に伴う調査が実施された際には区画施設が検出されることが期待されるが、それでも検出されなかった場合は豪族居館に関係する遺構は本街区には及んでおらず、南隣の市道の下で収束しているものと考えられよう。



第67図 松野遺跡弥生時代前期遺構・遺物確認調査区位置図 (S = 1 : 800)



第68図 水笠遺跡平面図 ($S = 1:500$)

第2節 水笠遺跡の遺構分布

平成13年度末現在で第21次を数える水笠遺跡の発掘調査であるが、第1・4・16次調査が区画整理の街路部分の調査で、それ以外は区画整理後の個人住宅の調査である。第1・4次調査では主に弥生時代の溝が多く検出されているが、当時の居住を示す遺構は検出されていない。堅穴住居等の浅い遺構は後世の耕作によって削平されて消滅し、比較的深い遺構のみが遺存している状況であると推定され、遺跡の実態がまだよく判明していない状況である。個人住宅の調査では調査面積に制限があるためその傾向はさらに強く、遺構が散漫な状態で検出されるのみである。そのような状況の中、今回の一連の調査では第1・4次調査で確認されていた弥生時代の溝の延長部分の他、新たな溝を5条検出し、土坑・落ち込み・ピット等を検出した。中でも第17次調査で検出した自然流路には縄文晩期の土器と弥生前期の土器が共伴していた。また第14次調査では柱穴1基のみであるが鎌倉時代の遺構を検出した。鎌倉時代の遺構は初めての確認で、近隣に当時の掘立柱建物等が存在していた可能性が考えられる。さらに遺物包含層の上面を遺構面とする井戸を1基検出した。遺物が全く出土しなかったため詳細な時期は不明であるが、遺物包含層とその上の旧耕作土から出土した遺物から判断して室町時代頃以降と推定される。これまでの調査では遺物包含層上から遺構は確認されていないが、今回の確認によって水笠遺跡は地山上の遺構面以外にも遺構面が存在する複合遺跡であったことが明らかとなった。そしてまた第15次調査では旧耕作土からではあるが縄釉陶器・灰釉陶器・瓦の破片が出土した。近隣に一般的な集落とは異なる特殊な性格の建物が存在していた可能性も考えられる。以上本遺跡では未だ各時期の居住等の遺構は検出されていないが、調査を継続することによって当時の人々の生活の痕跡が確認されていくと思われる。今後も関連遺構の検出が期待されよう。

第3節 結 語

本書は土地区画整理事業の進捗に伴い新築される個人住宅の発掘調査の報告書である。被災された方々の新生活が少しでも早く始められる様、今まで以上により迅速な調査が求められた。遺跡全体で見れば面積的に小規模な調査成果を集積したものであり、遺跡を総体的に理解し難いが、これも震災復興の発掘調査の一つの姿であろう。しかしそのような調査であっても成果の集積なくして遺跡の実態には到達できない。今後共データの蓄積と再検討を繰り返しつつ、松野・水笠両遺跡の解明を続けていく必要があろう。

水笠通3丁目内では遺跡の埋没深度が浅かったためにほとんどの事例で発掘調査を実施したが、松野通4丁目内では住宅の新築はあったが工事による掘削深度が浅いため埋蔵文化財に影響を及ぼさない事例も少なからずあった。また工事の影響外のため敷地内的一部分に埋蔵文化財が遺存している事例は両遺跡共にあった。今後それらの敷地あるいは部分を工事で深く掘削する際には発掘調査は必要である。ただし土地区画整理事業の用地内での個人住宅の新築であるため、恐らく当該地を新たにもしくは再度、調査を実施する機会は再度個人住宅を新築する数十年後のことになろう。しかしその際にも事業者の御理解と御協力を賜って埋蔵文化財の保護に努めていきたい。

写 真 図 版

写真図版1



1. 両遺跡周辺遠景（南東から）



2. 両遺跡遠景（南東から）

写真図版 2



1. 松野遺跡第1・2次調査と街区遠景（昭和56年12月）（西から）



2. 水笠遺跡遠景（平成10年11月）（南西から）



1. 街区遠景（平成11年8月）（南東の松野住宅上から）



2. 街区遠景（平成13年3月）（南東の松野住宅上から）

写真図版4



1. 調査区全景（南から）



2. 調査区と第1～3次調査地点（北東から）

写真図版5



1. 溝SD01・02（南東から）



2. 南東壁沿断面土層（北から）

写真図版6



1. 調査区全景（南東から）



2. 南東壁中央土層（北西から）



1. 調査区全景（北東から）



2. 溝状遺構（東から）

写真図版8



1. 調査区全景（南東から）



2. 調査区全景（南西から）

写真図版 9



1. 溝 S D 01・北東壁土層（南西から）



2. 調査区全景（南東から）

写真図版 10



1. 調査区全景（北東から）

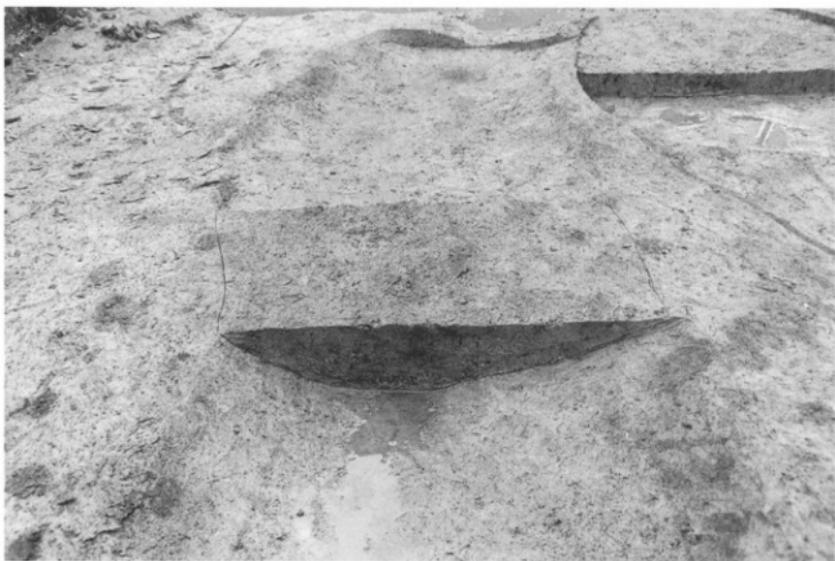


2. ピット・北西壁土層（南東から）

写真図版 11

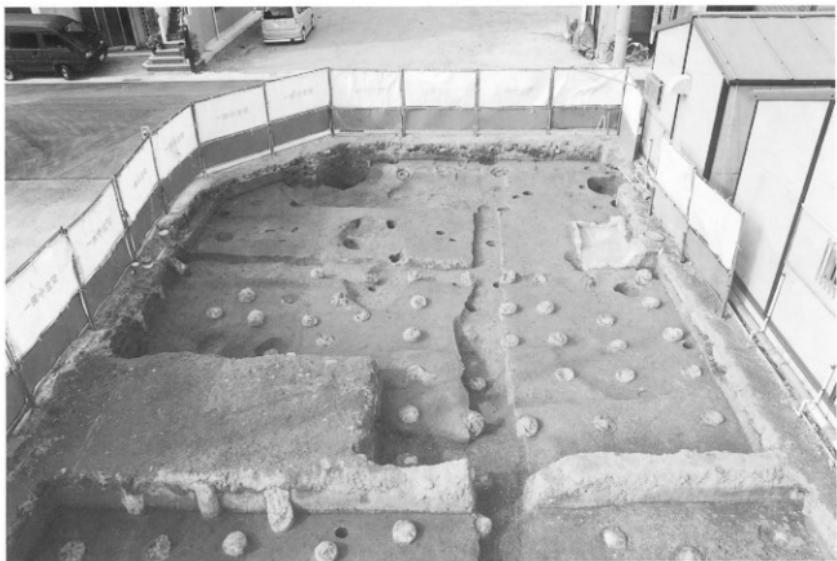


1. 調査区全景（北東から）



2. 溝SD 01断面（北東から）

写真図版 12



1. 調査区全景（南東から）



2. 調査区全景（南西から）

写真図版13



1. 掘立柱建物 S B 01・土坑 S K 01 炭分布（南東から）



2. 掘立柱建物 S B 01・土坑 S K 01 完掘（南東から）

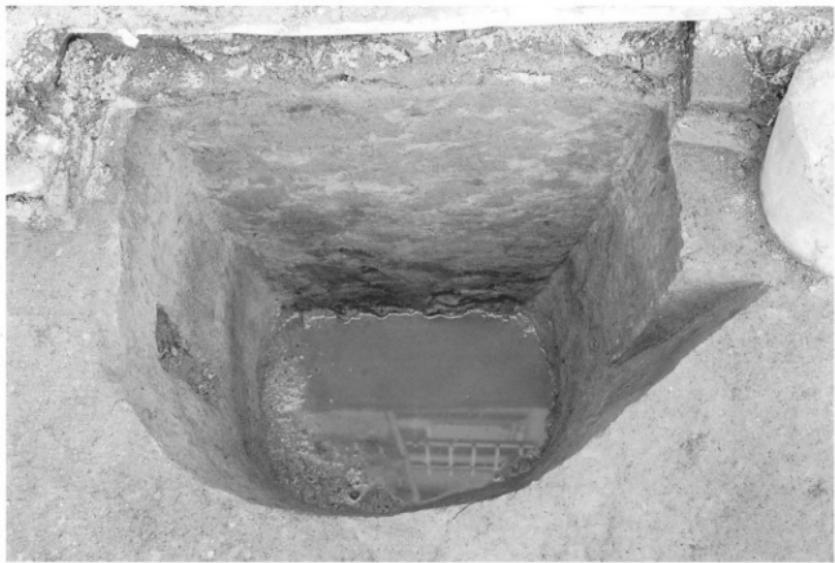
写真図版14



1. 掘立柱建物 SB 01 柱穴断面（南列東から4番目）（北西から）



2. 掘立柱建物 SB 01 柱穴断面（北列東から3番目）（南東から）



1. 井戸 S E 01 (南西から)



2. 土坑 S K 02 断面 (南東から)

写真図版16



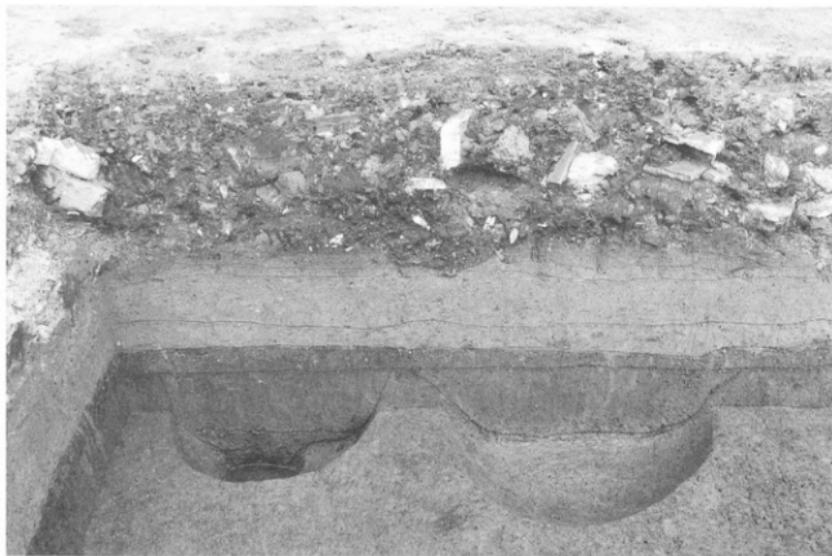
1. 調査区全景（北西から）



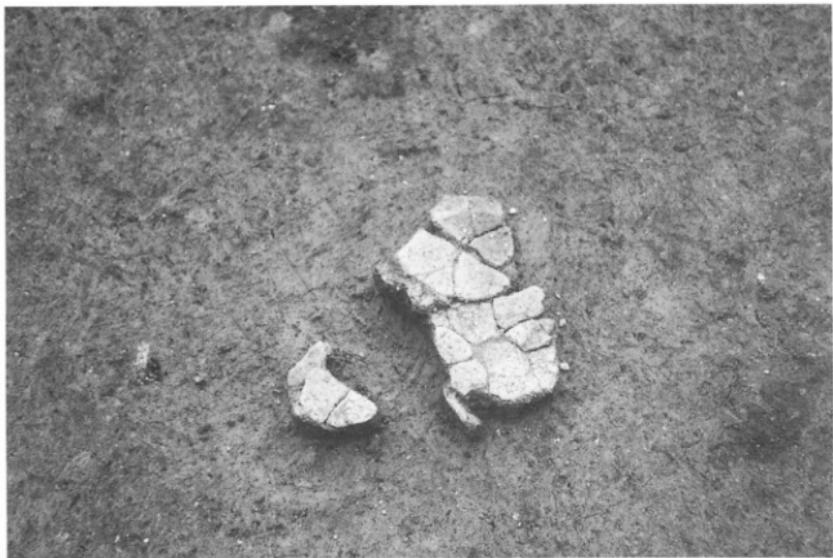
2. 北西壁南西端土層（南東から）



1. 調査区全景（南東から）



2. 土坑SK 01（左）・02（右）断面（南西から）



1. 弥生土器出土状況（東から）



2. 北東壁中央土層（南西から）



1. 調査区全景（南西から）



2. 南東壁北東半土層（北西から）

写真図版20



1. 調査区全景（南東から）



2. 北東壁中央土層（南西から）